カナタの幻想

霜月龍牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カナタの幻想

【Ｎコード】
Ｎ３７３３Ｆ

【作者名】
霜月龍牙

【あらすじ】
忠実とは大きく違う１９４１年の大日本帝國。空母『瑞鶴』に配属された戦闘機パイロット、山城彼方（やましろかなた）中尉は艦魂が見えるという珍しい能力を持っていた。彼は艦魂たちと平和な刻をすごす。しかし、その平穏も長くは続かなかった。年の終わりの１２月８日、定刻はアメリカに宣戦布告する。《連載再開しました。タイトルが『』になっているものが改訂版です。現在第三話まで投稿》

序章

――――その日も広い青空では、白い飛行機雲が縦横無尽に駆け巡り、複雑な模様を描いていた。

それらは或る時は眩い閃光に変わって散ってゆき、また或る時は黒い筋へと変わり不規則な模様を描いて落ちてゆく。

そこは、幾多の空のサムライ達が己の命とプライドをかけて闘う戦場であった。

その戦場に一人の若者がいた。

彼はただ守りたいもの守るために戦った。

だがそれは果たせなかった。

若者の腕の中で血まみれになってだんだん冷たくなってゆく少女。

その姿に若者は心に深く想う。

自分の大切な人が傷つくのがいやなんだ。

今度こそ大切な人を必ず守り通そう、と。

その想いを胸に若者は今日もサムライとなり空を征く……

第一章『始まり』（前書き）

ども、作者の霜月龍牙です。
この作品は『フィクション』であり実在する人物、事象にはまったく関係ありません。
たとえ実在の人物が出てきたとしても、僕が物語性を優先したために、脚色してあったり違う性格になっていたりしてます。
以上の事柄を承知の上で作品をお読みください。

第一章『始まり』

「『瑞鶴』ってやっぱり大きいな」

青年はそう言いながら、遠くに見える航空母艦に目をこらした。
空は雲一つない晴天で、遠くには近衛教導飛行隊所属の黒色に塗装された戦闘機が飛行している。
青年は少しの間足を止めてそれを見ると、再び歩みを始めた。
一歩一歩正門に近づくにつれて、しだいに気持ちが昂ぶっていく。

「やっと……ここまで来れたんだな」

青年は感慨深そうに呟いた。

（俺はようやくなれるのだ、誰もが憧れる母艦搭乗員に。
これで約束を果たすことができる……）

青年は歩哨についている兵の敬礼を受けながら門を潜った。

西暦１９４１年１０月４日

この日は歴史に大きな転換を迫った日となった。
後に『真珠湾燃料タンク爆破事件』や『一〇・四事件』と呼ばれるテロ事件が発生したのだ。

事件の概要はこうである。
日付が新しくなってすぐの午前３時ごろ、米太平洋艦隊の要衝であるオアフ島真珠湾の第八燃料タンクが何者かによって爆破されて炎

上した。
幸いにも翌日の艦隊演習のためにタンク内の燃料が給油艦に移されて空になっていたため、延焼は早めに食い止められて被害はそこだけに留まった。
しかし、事件に対するアメリカ大統領チャック・E・アンダーソンの発言が世界を……特に、太平洋を挟んだ大日本帝國を震撼させることになった。

「アメリカ政府はこの事件の犯人を日系人のテロリストによるものと断定した。
大日本帝國政府には我々の損害を賠償して然るべきだ」

当然帝國は事件の関与を否定し、アメリカ政府に猛抗議した。
だが、それに対するアメリカ国民の反応、壮絶なる反日・排日運動であった。
中でもハリー・S・トルーマン上院議員の「我々アメリカ国民は、ジャップの卑劣なテロリズムに屈しない」との言葉は、当時のアメリカ世論を表すものとしてあまりにも有名である。
これに対して帝國政府は何度も事件の関与を否定する内容の記者会見を行うも、それは徒にアメリカ国民のジャパン・バッシングを強めるだけであった。

一方、帝國国内では事件に対して一部の対米強硬派の活動が活発になったものの、未だにアメリカとの関係修復を望んでいる勢力が圧倒的に優勢であった。

また、この事件はアメリカに対独開戦して欲しかったイギリスの諜報部が仕掛けたという説や、日本が持っている中国利権を手に入れたかったアメリカの自作自演との説もあったが、詳細は今日まで謎になっている。

ともかく、この事件が日米の関係に深い溝を刻んだのは事実である。

この物語は『一〇・四事件』の二日後から始まることになる……

第一章『始まり』（後書き）

どうも、霜月龍牙です。
これが処女作品なので気合を入れて完結させようと思います。
さて、以前からの読者様へのお知らせですが、ようやく改訂版のアップを始めました。
表示が「」から『』になっているのが改訂版です。
これからもこの小説をよろしくお願いします。
それでは、感想・意見がありましたらどんどん送ってくださいませ。

第二章『瑞鶴乗艦』（前書き）

《登場人物紹介》

「山城（やましろ）　彼方（かなた）」

所属
瑞鶴戦闘機隊第三中隊第二小隊長

階級
海軍中尉

年齢
２４歳（１９４１年５月現在）

誕生日
１１月７日

身長
１６８ｃｍ

体重
５５ｋｇ

本作の主人公で艦魂を見ることができる。戦闘機の操縦は抜群に上手く、この年ですでにエース（撃墜王）である。
性格は温和だが、一度キレると誰も止められなくなる。
本人はその後に後悔することが多い。
また、大の音楽好きであり、クラシック音楽には詳しい。昔、トランペットを吹いていたが、海軍に入ると同時にきっぱりと止めた。
両親は既に他界しており、兄弟は居ない。

第二章『瑞鶴乗艦』

青年は桟橋にあるベンチに座っていた。
沖のほうに碇泊している空母『瑞鶴』に乗艦するために、内火艇（兵員輸送用のモーターボートで《うちびてい》と読む）を待っているのだ。

しばらくその場で本を読みながら待っていると、内火艇がエンジンの音をとともに彼方がいる桟橋に向かってきた。
よく見ると、内火艇の舷側にはこれから乗艦する予定の『瑞鶴』の名前が書いてある。
やがてその内火艇は速度を落とし、桟橋に接岸する。
青年はポケットから銀の懐中時計を取り出して見ると、ちょうどそれは到着予定の時刻を差していた。

内火艇が接岸すると、一人の水兵が船から降りて舫（もや）い綱で手早く艇を桟橋に留める。
それが終わると、内火艇に乗っていた士官達が続々と降りてくる。
青年はもしかすると兵学校の同期が居ないかと探してみたが、あいにく見つからない。

青年は全員が降りるのを待ってから、すぐに乗船する。
海軍では階級が下の者から乗り込むのが慣習なのだ。
青年は一番後ろの端の席に座り、足元に荷物を置いた。

「まもなく出航致します！」

青年の後から士官が六人ほど乗り込むと、上等水兵の階級章を付けた男が舫い綱を解きながら大声で叫ぶ。

男は操縦席に戻ると、内火艇のエンジンを始動させ、それをふかしながらゆっくりと桟橋から離れる。

「もうすぐ『瑞鶴』に着きますので、下船の準備をお願いします！」

桟橋から離れて十分くらい経った時、先ほどの上等水兵が大声で到着が近い事を知らせる。

青年はその声で船首の方を見ると、いつのまにか近づいていた『瑞鶴』の舷側が大きく写っていた。

（でかいな、さすが正規空母だ）

青年は『瑞鶴』と乗っている内火艇とを比べながら荷物を手元に寄せる。

やがて、チリンとベルが鳴り、内火艇は速力を落とした。

内火艇は『瑞鶴』の舷側から降ろされている舷梯に横付けする。

舷梯では水兵が待機しており、内火艇を舷梯に固定させている。

「ただ今『瑞鶴』に到着しました。準備がありますので今しばらくお待ち下さい！」

先ほどの兵長は大声で士官たちにそう告げると、彼自身も作業を手伝い始めた。

やがて艇の固定が終わり、士官たちは次々に『瑞鶴』へと足を踏み入れる。

青年も内火艇からタラップに乗り移って乗艦する。

舷門の当直将校（乗艦・離艦時にはその人に報告をする決まりになっている）に乗艦の旨を報告すると、副直将校に案内させると言って副直将校を呼んでくれた。

「よう、山城じゃないか。久しぶりだな」

中尉の階級をつけた男はそう言ってウインクをした。

「岩崎……岩崎じゃないか！元気だったか！？」

彼の名は岩崎（いわさき）　敦司（あつし）といい、彼方の士官学校の同級（コレス）生であり、悪友でもあった男だ。

彼は有名な光菱財閥当主の三男坊であり、一族の反対を押し切って海軍に入隊した過去がある。

青年……山城（やましろ）　彼方（かなた）とは士官学校の卒業以来会っておらず、四年ぶりの再会である。

「おう、俺はばっちりやってるぜ！

それにしても、お前だいぶ中国戦線で活躍したらしいじゃないか、このっ」

そう言って岩崎が笑いながら彼方を肘で小突いた。

中国戦線とは、一九三九年から続いている中国国民党と中国共産党の内戦の事だ。

帝國は中国国民党側を支持しており、武器弾薬の供与はもちろん、陸空軍で構成される義勇軍の派遣もしている。

彼方が『瑞鶴』に乗る前はその義勇空軍に参加しており、十二機という驚異的な撃墜数を叩き出していたのだ。

「よせよ……あれはただ運がよかっただけさ。

それにしても、お前とも士官学校以来だよな。そういえば……」

久しぶりに会った二人は昔話に華を咲かせる。

それは、卒業した同期生のその後だったり、お互いの今の任務についてである。
しばらくして話が一段落したところで、彼方はまだ副長に挨拶をしていない事に気づいた。
「そうだ。そういえば、まだ副長に挨拶してなかったな」
「ああ、すっかり忘れていたぜ。じゃあ俺がそこまで案内してやるよ」
岩崎はそう言うなり、案内を始めてくれる。
彼方はおとなしく彼についていった。
「着いた、ここが副長室だ」
彼に連れられた先は、『副長室』と書かれた立派な木のドアがある部屋だった。
それを見て彼方は少し緊張するのを自覚する。
「まぁ、副長の深野(ふかの)中佐は強面だがいいお方だから普通にしてれば大丈夫さ。
それじゃ、俺は仕事があるからこれで失礼するぜ」
岩崎は手をヒラヒラさせながら、再び元来た方へ戻っていった。
「おう、色々ありがとうな」
彼方は深呼吸を一つしてから、部屋のドアをノックする。
「入ってよし！」

部屋からはハリのある声が返ってくる。

「失礼します！」

彼方はそう言ってドアを開ける。
室内には小柄ながらもがっしりとした体格で強面の男がいた。
彼が副長の深野中佐のようだ。

「山城　彼方中尉、ただいま『瑞鶴』に着任致しました！」

彼方は直立不動の姿勢で深野に敬礼をする。
深野は椅子から立ち上がって彼方に答礼を返した。

「ご苦労であった。すでに知っていると思うが、私は副長の深野（ふかの）だ。以降、よろしく頼む。従兵にガンルームまで案内させるから、今日はゆっくりと休んでくれ」

と、深野はねぎらいの言葉を掛けてくれる。
どうやらこの上官は『当たり』のようだ。
ちなみに上官にも様々なタイプがおり、権力を嵩に威張り散らす者もいれば、このように階級が下の者の面倒を見てくれる者もいる。
当然前者のようなタイプは部下から嫌われており、陰で『外れ』を引いたと囁かれることになる。
そういう意味でいうと、この副長は岩崎の言うとおり『当たり』のようだ。

彼方は再び『当たりの副長』に敬礼してから従兵に着いていく。
従兵によると士官室は艦の前部にあるのだが、ガンルームは後部にあるという。

ガンルームとは尉官などの下級士官が使用する公室のことで、正式名称は士官次室である。
ガンルームとは元々イギリス海軍の用語……つまり英語であり、直訳すると武器庫という意味である。
この言葉の由来は遥か昔の大航海時代まで遡ることになる。

大航海時代のイギリスの商船は、当時猛威を振るっていた海賊の対策として銃などの武器を装備していた。
ところがこの武器の管理を誤ると、水夫に奪われて叛乱に使用される恐れがあり、大変危険であった。
そこで士官室の隣に武器庫を設け、ここに下級士官を居住させて警備を兼ねさせたのだ。
こういったことから、イギリスでは下級士官室をガンルームと呼ぶようになり、イギリス海軍の伝統を受け継いだ帝國海軍もそれを踏襲したのだ。
また、ガンルームの室長はケプガンと呼ばれ、下級士官の内務指導を担当するいわば口うるさい兄貴分の様なものだ。

さて、しばらく廊下を歩くと、二人はガンルームの前に到着する。
部屋と廊下はカーテンで仕切られており、中は誰もいないのかとても静かだ。

「それでは、次は寝室にご案内します」

その水兵はさらに廊下を進んでいく。
それからすぐに、寝室にたどり着いた。

「ここが寝室です。では、自分はこれで失礼します」

従兵はそう言って彼方に敬礼して、もと来た道を戻っていった。
彼方は彼に答礼をしてからドアを開ける。
中を見てみると、木製の二段の寝台が十台ほどあり、壁には備え付けの小さな机がある。
机の上の壁には舷窓があり、そこからは外の景色がよく見えた。

「へぇ、なかなか良いところだな」

彼方は素直に称賛の言葉を述べた。
決して豪華ではないが、かといって質素すぎない所に彼方は気に入ったのだ。

「ふぅ……いしょっと」

彼方はまるで訓練後のような疲れた仕草で荷物を寝台に置いた。
そして、窓際にある椅子に腰掛ける。
窓からは昨年竣工したばかりの新鋭正規空母『翔龍』や、長い間連合艦隊の旗艦を務めた戦艦『長門』が浮かんでいるのが見える。

（あれが噂の防空巡洋艦か）

青年は遠くに見える『長門』からつい二ヶ月前に竣工したばかりの防空巡洋艦『琵琶』に視線を移す。
『琵琶』は『吉野』級防空巡洋艦の六番艦で、八基の十センチ連装高角砲と四十門を超える機銃を装備している期待の最新鋭艦だ。
彼方は暫しの間、子供のように窓の外の光景に見入っていた。

「……よし、行くか」

数分後、彼方は艦を見るのを止めて艦内を一通り散策することにし

た。
散策といってもただ漫然と艦内を歩くわけではなく、艦内の施設の配置をなるべく早く知るためにできるだけ効率よく行う。そうしないと、緊急時に迅速な対応ができないからだ。

まずは寝室から比較的近かった下部航空機格納庫（『瑞鶴』の格納庫は上下二層ある）に行ってみることにした。
そこでは機動部隊の主力機である『彗星』艦爆や『天山』艦攻が整備されていて、整備員があわただしく動き回っているのが見える。
続いて上部格納庫に向かうと、そこでは戦闘機が整備されていた。
彼方はその中で自分の愛機を探す。
それは、格納庫の一番端にそれは置かれていた。

「……『陣風（じんぷう）』か。いつ見てもいい飛行機だな」

彼方はそう呟いて、そっと愛機を撫でる。
『陣風』……今年の三月に正式採用された本機は、正式名称を『一式艦上戦闘機』という。
十二・七ミリ機銃を六丁という強力な武装を備え、最高速度は時速約六百キロと当時の世界最高性能を持っている機体だ。
その性能は陸上機すら上回ると言われており、空軍の主力戦闘機である『零式戦闘機』との模擬戦闘では、ほぼ毎回勝利を収めている。
彼方は愛機の調子を軽く見てからその場を後にした。

続いて、酒保（《しゅほ》と読む。売店のようなもので艦内に数ヶ所ある）、士官食堂の順で艦内を回り、最後に艦橋に行くために飛行甲板に向かった。

ようやく飛行甲板に出た彼方は周りを見渡してみる。
日はいつの間にか暮れており、木でできた飛行甲板や戦艦に比べれ

ば小振りの艦橋を紅に染めている。
艦橋を見上げると、マストには日章旗がだらしなく垂れていた。
飛行甲板には飛行機どころか誰一人おらず、ただ潮騒の音が聞こえるのみである。

（あとは艦橋を見てまわってから部屋に戻るだけだな）

彼方がそう思った瞬間、前方から突風が襲ってきた。

「……おっと！？」

彼方は倒れそうになるところをどうにか堪える。
風は一瞬だけ強く吹き、また無風状態に戻っていた。

彼方が再び艦橋を見上げると、頂上にある防空指揮所に人影が見えた。

（防空指揮所に人がいる……こんな時間に一体誰だ？）

防空指揮所とはその名前の通り、艦長がそこに立って対空戦闘の指揮を執る場所である。
これは艦橋の最上部にあり、射撃指揮所や十数台の双眼鏡が設置されている。
その用途から普段はそこに立ち入る者はほとんどいない。
しかも、この時間は夕食前なので、兵員は各自の部屋や持ち場にいるはずだ。
彼方は気がつくとその人影が気になって防空指揮所に向かって足を運んでいた。

彼方が防空指揮所に着くと、そこには誰もいなかった。

黙って背を向けている一人の少女を除いて……

彼方はその光景に思わず息を飲む。
本来、軍艦に女性が乗っていることはありえない。
古き良き大正の時代ならともかく、戦争一歩手前の今ではたとえ艦長といえども、一般人を機密だらけの艦に乗せられる筈がない。
さらに驚くべきことは、その少女が士官服である濃紺の第一種軍装を身につけていることだ。
その上、腰には陸軍の将官のように日本刀を下げている。

彼方がそのように考えているのをよそに、その少女はもう暮れようとしている太陽をじっと見つめていた。

「おい、君」

彼方は思わず少女に声を掛けていた。
少女がその声にゆっくりと振り向くと同時に、少女の腰まである流れるような長い黒髪がサラリと揺れる。
気がつくと、喉がカラカラになっていた。
彼方は唾を飲み込んで喉を湿らせてから、次の言葉を紡ぐ。

「どうして……こんなところにいるんだ」

その言葉に少女は意味が分からないといった風に首をかしげる。
彼方はその仕草に違和感を覚えた。
少女が納得したように頷くと、その唇からありえない言葉を発した。

「……私は、『瑞鶴』の艦魂。あなた誰？」

第二章『瑞鶴乗艦』（後書き）

遅まきながら第二話を上げました。

実は第三話を上げようとして、第二話とのつながりの確認をしたら、第二話が何の手違いからか未改訂のままました。

しかも、上げてから一ヶ月もそのことに気づいていなかった僕ｏｒｚ

本当に、本当に申し訳ありませんでした。

今日中に第三話を上げるので、どうか作者を見捨てないでください。

感想・批判など待ってますのでどんどん罵倒してください。

第三章『艦魂』（前書き）

ようやく第三章を上げました。
実は第二話が僕のミスで未改訂のまま改訂済みとなっており、しかも僕は一ヶ月ほどその事実に気づいていませんでした。
本当に申し訳ありません。

第三章『艦魂』

『艦魂（かんこん）』。
又の名を船魂（ふなだま）といい、古来より世界中の船乗り達の間で語り継がれている伝説である、船に宿る魂のことである。
艦魂はその船の航海の安全を司っているといわれており、その姿は美しい少女の姿をしている。
そして、その艦魂を見ることができる人は限られているという……らしい。

というのも、これは海軍にいる士官学校の同期から聞いた話なので、どうせただの怪談話の一つであろうと彼方は思っていた。
少なくとも今この時までは……

「あなた誰？」

自称『艦魂』の少女は、不思議なものでも見るような顔で彼方に尋ねてきた。
少女の年齢は見たところ１６から１７歳くらいで、身長は彼方よりやや低いが女性としては高い方だ。
さらに少女は士官服を着ており、腰には軍刀を差している。
階級章こそないが、その堂々とした佇まいはどことなく中将や大将といった将官を思わせる。

「俺は山城　彼方。今日この艦に配属された戦闘機搭乗員だ。よろしく」

彼方はその少女に手を差し出した。
少女はそれをじっと見つめる。

その瞳には一切の感情が伺えない。

「……わたしは瑞鶴でいい。よろしく」

『瑞鶴』と名乗った少女は、数瞬の間をおいてからそれに黙礼で応える。

彼方は引きつった笑みを浮かべて差し出した手を戻す。

彼方はその少女の態度は、そんな少女の態度がどことなく幼馴染に似ているのを感じた。

「……なに？」

瑞鶴が怪訝な表情で彼方を見てくる。

どうやら考えにふけるあまり、じっと彼女の顔を見ていたようだ。

「すまん、何でもない」

「……そう」

瑞鶴はさほど興味なさそうに言ったきり、何も話そうとはしなかった。

二人の間に沈黙が漂う。

このままでは気まずいので、彼方は瑞鶴に話しかけることにした。

「瑞鶴は艦魂が見えると言ってもあまり驚かないんだな？」

「……そういう人がいるのは知っているから」

瑞鶴はまるで彼方との会話を望んでいないかのように、淡々と簡潔に答えた。

彼方はそれでも何とか会話を繋げようと、必死に頭を回転させる。
「……なるほど。そういえば、瑞鶴の姉妹ってどんな子なんだ？」
彼方がそう聞くと瑞鶴は嫌そうに顔をしかめた。
どうやらその事についてあまり話したくはなさそうだ。
「……それは」
瑞鶴が渋々答えを口にしようとしたとき、突然辺りをまばゆい光が辺りを包み込んだ。
「瑞鶴、早くしてよ。皆が待ってるわ」
光の中から出てきたのは、黒い長髪を三つ編みに纏めた美少女であった。
背は少し瑞鶴より高く、縁の細い眼鏡を掛けている。
それが彼女の整った顔と相まって、見る者に理知的な印象を与えている。
彼女も艦魂であるのか、瑞鶴と同じ濃紺の第一種軍装を着ていた。
彼方はその容姿に思わず息を呑む。
「……わかってる、姉さん」
瑞鶴は少し煩わしそうに額に皺を寄せると、チラッと彼方の方を見てきた。
どうやら、彼方と話していたせいで遅れたと言いたいらしい。
「……えっ、もしかして彼って艦魂が見えるの？」

少女は彼方のことを指差しながら瑞鶴に問いかけると、瑞鶴はそれに面倒くさそうに頷いた。
その答えを聞くと、翔鶴は彼方の顔をまじまじと見つめ始めた。
彼方は翔鶴に見つめられて少し緊張する。

（……そんな人本当にいたのね）

翔鶴は誰にも聞こえない声でそう呟いた。

「そういえば、あなたの名前は？」

「俺は山城　彼方。瑞鶴の戦闘機搭乗員で階級は見ての通り中尉だ。よろしく」

彼方はそう答えて手を差し出す。

「あっ、私は瑞鶴の姉の翔鶴（しょうかく）よ。よろしく」

姉の翔鶴は見る者をうっとりさせる笑みを浮かべて、彼方の手を取ってきた。
彼方はその笑みに思わず翔鶴から目を逸す。

「……姉さん、時間」

瑞鶴は時計を見て、少し怒気を含んだような声でそう言った。
彼方も自分の懐中時計を見ると、あと少しで巡検の時間だった。

「あっ、もうこんな時間だわ！それじゃあ、私達は用事があるから！」

翔鶴はそう言って瑞鶴の手を握ると、出てきた時と同じように光に包まれて消えてしまった。
彼方は呆然として彼女らが消え去った後を見ている。
そして大きなため息を一つついた。

「……行くか」

既に夕日は沈んで辺りは暗い。
時計を見ると、そろそろ夕食が始まってしまう時間だった。
それでも、彼方はそこに立ったままでいる。
しばらくして彼方は懐から古い写真を取り出して、それを静かに眺め始めた。

「瑞樹、俺は必ず……」

彼方の呟きは強い風にかき消される。
夕日の残光はすでに消え、宵の明星が輝いていた。
しばらくそこに立ち尽くした後、彼方は防空指揮所を後にした。

第三章『艦魂』（後書き）

ようやく第三章を上げました。
月一話というまったりペースではありますが、もう僕も受験生なので、そろそろ勉強というものをやらなければいけなくなり、このペースになってます。
ああ、三日に一話のペースが懐かしいｗｗ
これからも多分、月一話で更新していくのでよろしくお願いします。
あと、感想・ご意見等待ってますので、書き込んで下さるとありがたいです。
では。

第四章『中隊の仲間、そして内地の夜』

「これに俺が乗るのか……思ったよりもでかいな」

この日、第二艦隊の艦艇はいよいよ明日に迫った出航に備えて、大車輪で準備を進めていた。
陸上の基地にいた者や、休暇を取って故郷に帰省していた者が続々と艦に集まり、彼らを運ぶカッターや内火艇などはどれも満員状態である。
また、食料や弾薬などの物資を運ぶ船も、忙しそうに陸と艦の間を行ったり来たりしていた。

その内の一隻に乗っている男は、そう呟いて内火艇の吹きさらしのキャビンから、これから自分が配属される空母を眺めた。
その艦は旧式空母の特徴である小ぶりの島型艦橋を持つものの、搭載機数といった戦闘力は最新鋭艦とほとんど遜色ないという。

続いて、男は近くに停泊している『長門』に視線を移す。
彼女は就役してからかれこれ二十年以上経ってはいるが、その威容は未だ健在である。
かつて自分はあの艦に憧れて士官学校の門を叩いたものだと、男はしみじみと士官学校に入る前の若かりし頃のことを思い出した。

（もっとも、今は飛行機の方が好きになったが）

そう考えて男は微苦笑を浮かべる。
そのまましばらく『長門』を眺めていると、男はふと、すでに艦に到着しているであろう部下たちのことを思い出した。

「あいつらは今頃どうしているかな」
男はそう呟いて、再びこれから自分が乗る艦を見つめる。
その艦はただ何もいわずに、陽光を鈍く反射させながらゆったりと浮かんでいた。

『瑞鶴』の格納庫内では、その場所の主である整備兵たちの喧騒に満ちていた。
格納庫には戦闘機や爆撃機が限界ギリギリまで詰め込まれており、その隙間を縫うようにして整備兵が作業をしている。
艦の出航が明日に迫っていることもあって、全員が気合いを入れて入念に機体のチェックを行っているようだ。
その中には、本来は非番のはずの搭乗員が数人ほど機体の整備を手伝っている。
彼方もその一人だ。

「よう、山城。久しぶりだな！」

彼方がエンジンの整備を終えて休憩していると、後ろから聞きなれた声が掛けられた。
振り向くと、そこには少佐の階級章を付けた小柄な男が立っている。

「管野隊長！」

彼方は男の顔を見るとすぐに敬礼をした。
男は彼方の上官で、名前を管野（かんの）　直志（なおし）という。
管野は帝國軍士官学校を彼方の三期前に卒業した先輩であり、管野が士官学校の最上級生である一号生徒だった時、二人は同じ分隊だ

ったことがある。
その頃から彼方は管野に何かと目を掛けられ、そして度々同じ部隊に所属するという偶然もあって、現在まで良好な関係を続けている。
また、彼は『瑞鶴』戦闘機隊きっての名パイロットであり、中国戦線では敵機を十一機も撃墜したトップエースの一人だ。

「おう、休暇中は元気だったか？」

管野は彼方に答礼すると、気さくな態度で普段彼がよく見せる人懐っこそうな笑みを浮かべた。
そういう所が管野の名隊長である所以だと彼方は思っている。

「ええ、もちろんです。
ところで、少佐は休暇中はどうでしたか？」

「ああ、おふくろや妹達も元気そう何よりだった。
それより、さっきまで一生懸命に整備していたようだが、機体の調子はどうだ？」

管野は家族の話で一瞬表情を緩ませるが、軍の話になるとすぐにそれを引き締める。

「はい、今日もすこぶる調子が良いです。
あと、中隊の全機体も飛行可能です」

「おう、それならいい。
一応伝達しておくが、三十分後に待機室で中隊全員で会議だ。
くれぐれも遅れるなよ？」

「はっ！」

管野はそう言い残すと、じゃあなと言って去っていった。
彼方は工具の後片付けをすると、汚れた作業着を着替えるために自室に戻る事にした。

「よし、全員揃っているな」

それから二十五分後に管野が搭乗員待機室に来ると、既に彼方を含めた中隊のメンバーは全員揃っていた。

「起立ッ！……敬礼ッ！」

管野が部屋に入るのを見るなり、それまで談笑していた隊員たちはすぐに表情を引き締めて起立する。
そして、副隊長である彼方の号令で一斉に敬礼した。
管野は少し顔をしかめてから、それにいい加減な答礼で返す。

「ったく、堅苦しいのは嫌いなんだよな……まぁ、取りあえず全員座れ」

彼の一言で全員が椅子に座る。
これが中隊での会議開始の合図だ。

「まずは久しぶりだな。
とりあえず全員休暇中に怪我をしなかったようで何よりだ。
五十嵐（いがらし）、性病はちゃんと予防したな？」

管野が席に着くと、ニヤニヤしながら一飛曹の階級を持つ男に聞く。

途端に、室内に忍び笑いが漏れた。

「はっ！相棒の突撃一番は欠かさずに携行しました！
よって、性病対策は万全であります、大尉殿！」

五十嵐はまるで陸軍のようにしゃちほこ張って答えるが、その眼は笑っている。
陸軍を皮肉った彼の冗談に、室内の忍び笑いが爆笑に変わる。

「くくくっ、それなら構わん。
まぁ、他の奴にも一応言っておくが、くれぐれも病気には気をつけろよ？
それでは、会議を始める。まずは機材の報告から……」

そう管野が締めると、室内は一瞬にして真剣な空気に包まれて会議が始まる。
普段は訓練の打ち合わせや反省などを行っているが、今日は特に打ち合わせることがないため、自然と話題は休暇中のことになっていった。

「おい笹原兵曹、お前は休暇中は何をしてたんだ？」

管野の二番機を務める沢渡一等飛行兵曹が尋ねる。
彼は次席飛行下士官という飛行科の下士官のナンバーツーである。
そんな彼は、その役職のように補佐が上手く、上官の管野や彼方をよく補佐してくれている。

「自分は特に何もしてないですね。
実家でまったり過ごしていました」

笹原二飛曹はそう答えて、饅頭を口の中に入れる。
大柄で体格の良い彼は、見た目どおりに大食漢であり、そのうえ超がつくほどの甘党である。
彼の甘党振りは、どんな時でも和菓子を食べている光景が見受けられるほどであり、一説によれば彼は給料の殆どをそれに注ぎ込んでいるらしい。

「つまらなさ過ぎる。お前はいつもそうだよな」

呆れたように言うのは、先程冗談を言っていた五十嵐だ。
彼は笹原とは予科練時代からの同期で、管野小隊の三番機を務めている。
彼は稀代の女誑しで、港はおろか基地ごとに数人の女を持っている事で有名だ。

「また五十嵐兵曹は……いつものように何股か掛けたのとちゃうんですか？」

そんな彼に突っ込むのは、中隊では二番目に年少の浅里三等飛行兵曹である。
彼は関西訛りがあり、部隊のムードメーカーである。

「もちろんさ、浅里。
ああ、あの愛と自由の日々が懐かしいぜ……」

五十嵐はうっとりとしたような顔で言うが、周りは皆引いている。

「まっ、しつこいかもしれないが病気には気をつけろよ。
突撃一番の在庫は切らさないようにするんだな」

沢渡が次席らしく、一応釘を刺しておく。
だが、五十嵐はそういう所はちゃんとしているらしいので特に追及されることはない。

「……なんだ、もう夕食の時間か。
まぁ、とりあえず今日はこんなところで解散だ。
あとは飯食って就寝まで自由時間だ」

そう締めくくって菅野が立ち上がると、全員が一斉に立ち上がって敬礼をする。
管野がそれに答礼をすると、彼らは雑談を交わしながらに夕食を食べに食堂に向かっていった。

「山城君！」

夕食を終えて艦内を散歩していると、男のものとは違う高い声で名前を呼ばれる。
その声に後ろを振り返ると、そこには昨日会った少女がいた。

「お前は……確か翔鶴の艦魂か？」

「ええ、そうよ。あのね、ちょっと今暇かしら？」

翔鶴はそう言って少し首を傾げた。
その仕草は何となく妹の瑞鶴に似ているように思われる。

「ああ、だがここは人目が多いから、昨日会ったところに移動しよう」

そう言って彼方は上を指差す。
普通の人は艦魂を見ることができない。
つまり、他人から見ると、彼方はただぶつぶつと独り言を言っているように見えるのだ。
そのため、彼方は場所を移そうと提案したのだ。

「ええ、構わないわ」

翔鶴はそう頷くと、それ以降は黙って彼方について行った。

「それで、話って何だ？」

数分後、二人は昨日出会った防空指揮所に来ていた。
この場所は普段から人が居ないため、彼女と話すのには打ってつけだ。

「少しお願いがあるのだけど……頼まれてくれないかしら？」

翔鶴は柔らかく微笑んではいるが、瞳は真剣だ。
自然と彼方は表情を引き締める。

「……別にかまわないぞ。
俺にできる範囲であればだが」

「それについては大丈夫よ。
お願いっていうのはね……貴方に妹の相手をしてやってほしいのよ」

一瞬、彼方には翔鶴が言った事が理解できなかった。
少し経って段々と意味が飲み込めてくると、なぜ自分がという疑問が浮かんできた。

「……もしかして瑞鶴の事か？
だが、どうして俺なんかに？」

「貴方はこの艦に乗っている人で唯一、私たちが見える人だからよ。
それに、あの娘は人見知りというか内向的というか……どうもあまり他人と接触したがらないのよね。
だから艦魂内では友人もほとんどいないし、そのせいで新入りの娘たちもちょっと距離を置いちゃうみたいなの。
でも、そのままだと周りにとって色々と良くないし、何よりもそれじゃあ彼女自身が寂しいでしょう？
だから、できる範囲でいいから彼女の相手をしてくれないかしら？」

翔鶴は不安そうに、上目遣いで彼方を見つめてくる。
彼女にそんな顔をされると、男として無下に断る事はできる筈がない。
彼方は嫌でも首を縦に振らざるを得なかった。

「……分かった、引き受けよう。
とはいっても、上手くいくかは分からないが……」

彼方はそう言って言葉を濁した。
彼女達と付き合うことで特にデメリットはないし、男ばかりの軍隊生活では滅多に味わえない娑婆（軍隊に対する一般の世界）の気分が味わえるのもなかなか乙なものだ。
それに、瑞鶴という少女のことは、出会ったときから少し気になっ

ていたという理由もある。
だがそれ以上に、果たして女付き合いが殆どない自分が瑞鶴と上手くやれるのかという不安が大きい。
彼方はあまり女性と話したことがないからだ。

「ありがとう、これから妹のことをよろしく頼むわね」

翔鶴はそんな彼方の心配に反して、本当に嬉しそうに微笑む。
その純粋な笑顔に、彼方は自分の不安が一気に晴れていくような気がした。

「ああ、できるだけやってみるよ」

彼方は翔鶴の言葉にしっかりと頷く。

「あと、一つだけいいことを教えてあげる。
あの娘はね、あなたのことをかなり気に入っているわ。
だから、きっとうまくいくわよ」

翔鶴はそう言って、いたずらっぽくウインクをした。

第四章『中隊の仲間、そして内地の夜』（後書き）

ども、霜月です。
ようやく四話をｕｐしました。
本当は一月中旬辺りにｕｐする筈だったのですが、諸事情によりこんな時期まで延期してしまいました。
……すいません、言い訳です。
実はここ最近受験勉強が忙しすぎて殆ど小説が書けてません（これはホントです。いや、マジですって）。
春休みは日帰りで横須賀に行く事を企画していたのですが、塾の講習で埋め尽くされた結果、断念。
現在、小説は暇を見つけてはチビチビと打っている状態ですので、第五話はいつになるのやら……
こんな作者でも見捨てないで下さると嬉しいです。
ご意見・ご感想を送ってくださると、さらに喜びます。
では～

第五章「出港前夜」（前書き）

《登場人物紹介》

「幻龍（げんりゅう）」

所属
大日本帝国海軍第二艦隊第七航空戦隊

年齢
２歳（１９４１年１０月１日現在）

誕生日
５月１１日

身長
１５５ｃｍ

外見年齢
１６歳

幻龍姉妹の長女である。ショートカットの黒髪で性格も明るい方だが、キャラが濃すぎる妹達のせいで存在感が少し薄い。
いつもその妹達が起こす騒動に悩まされている苦労人。
奇人変人が多いとされる空母艦魂の中でも珍しくまともな感性を持っている。
彼方のことが大好きだが、影の薄さから周りの艦魂と比べて出遅れている感が否めない。
趣味は料理と裁縫と家庭的な一面も持つ。
胸はそれほど小さくもないが、いつも慧龍と比べられているのでとても気にしている。

「翔龍（しょうりゅう）」

所属
大日本帝国海軍第二艦隊第七航空戦隊
年齢
２歳（１９４１年１０月１日現在）
誕生日
７月２９日
身長
１４３ｃｍ
外見年齢
１３歳

幻龍姉妹の次女でボケ担当。髪型は紫のロングヘアに触角がある。
どうやらその触角で未来の電波を受信しているようで、よく意味が
わからない発言をしては、
仙龍や慧龍に突っ込みとは言えないような攻撃をされている。
また、歌唱力が抜群なため、一部の艦魂にカルト的な人気を持ち、
彼女のファンクラブも存在している。
自身がチビで貧乳であることを気にしている。
趣味はアニメ鑑賞と歌。

「仙龍（せんりゅう）」
所属
大日本帝国海軍第二艦隊第八航空戦隊
年齢
２歳（１９４１年１０月１日現在）
誕生日
９月３０日
身長
１６１ｃｍ
外見年齢

１７歳

幻龍姉妹の三女で関西弁を話す。
髪型は黒のロングと一般的な髪型であり、姉妹の中では突っ込み担当でよく翔龍に突っ込んでいる。
彼女はなぜかアニメの知識に詳しく、その知識量は翔龍とタメを張れるほどのとも言われている。
よく部下の琵琶に抱きついているが、誰でもいいというわけでもなく、ただ彼女が好きなだけである。
趣味は琵琶に抱きつくことと吉本漫才を見ること。

「慧龍（けいりゅう）」
所属
大日本帝国海軍第二艦隊第八航空戦隊
年齢
１歳（１９４１年１０月１日現在）
誕生日
１１月９日
身長
１６６ｃｍ
外見年齢
１９歳

幻龍姉妹の四女。髪型は仙龍と同じ黒のロングヘアであるが、
身長が高くＦカップという巨乳の持ち主。
旗艦であるためか、頭の回転が速く知識も豊富にある。
錦鶴と普通に話せる数少ない艦魂であり、いつも内気な彼女のことを気にしている。
趣味は囲碁・将棋・チェス・兵棋演習・読書など。

「敷島（しきしま）　晴香（はるか）」
所属
海軍横須賀航空基地第三整備班副班長
階級
中尉（１９４１年１０月１日現在）
年齢
２１歳（１９４１年１０月１日現在）
誕生日
１０月３日
身長
１７１ｃｍ

彼方の乗艦以前に彼の機体の整備をしていた。
彼方のことが好きだが、なかなか素直になれない所がある。
相当嫉妬深く、彼方が少しでも他の女（人間だけでなく艦魂も）と話すと猛烈に不機嫌になる。
ちなみに、彼方は前に彼女の伯父に世話になっており、そのときに嫁に貰ってくれ、
と言われているが、彼方は未だにどうするか決めかねているらしい。
趣味はスポーツ全般と機械いじり。

第五章「出港前夜」

「酒保開け！各分隊、酒を受け取れぇ！」

午後７時３０分、待ちに待った副長の号令が艦内放送で流された。
艦内の各所で歓声があがり、当番の水兵が我先にと酒保に殺到する。
この日のために用意された上等な酒や、主計課が腕によりをかけて作った料理などが一斗樽や大皿ごと彼らの手によって運ばれていく。
酒が飲めるものはコップや茶碗、飲めないものも料理や菓子類が配られ、主計課の倉庫はみるみる軽くなっていく。
まもなく、艦内の各所で歌が始まり、乾杯を唱和しての宴会が始まった。

出港準備が終わった第二艦隊の後発隊は明日トラックに向けて出発する。
そのために、各艦では盛大な壮行会が開かれている。

彼方がいる搭乗員待機室でも宴会が始まっていた。
艦戦や艦爆など搭乗員は機種に関係なく集まり、歌を歌ったり酒を飲んだりしている。
その中で、彼方はひたすら食べ物を食べていた。
彼方が桜餅を食べているときに、小隊の二番機である佐東力（さとうりき）二等飛行兵曹が話しかけてきた。

「小隊長、酒は飲まないのですか？」

そう言う力はかなり酔っている。
彼の手には菊正宗の一升瓶が握られている。

「ああ、酒は目に悪いからな。今は控えているんだ。」
彼方は酒は飲めるが、目に悪いということで控えているのだ。
もっとも、その理由は表向きで本当はとても恥ずかしい理由があるのだが・・・・・
「おおっ、さすがは我が小隊長！言うことが違いますなぁ～」
佐東はしきりに感心している・・・というか、酔っているために一人で勝手に盛り上がっている。
「いや、そんなことないよ。」
「そうやって謙遜するところが流石です。やっぱり一流の搭乗員はこうじゃないとな～」
彼方は苦笑するしかなかった。
もはや彼方が何を言ってもこうであろう。
「おい、それよりあっちでまた酒が配られてるぞ。
早く行かないとなくなるかもな。」
彼方は佐の注意を違うほうへ向けさせる。
「おおっ、それはいけませんな！それでは失礼いたしますぞ！全軍突撃ぃー！」
と言って力は走って行ってしまった。
彼方は苦笑してそれを見送る。

しばらくして彼方はトイレにでも行こうかと思って部屋の外に出ると、そこには翔鶴と宝鶴がいた。

「二人ともどうしたんだい、こんなところで。」

彼方が驚いたように二人に聞く。

「あんたを誘いに来たのよ。ほら、うちでも宴会をやるから。」

と宝鶴がぶっきらぼうに言う。

「うちって、艦魂の方でも？」

「ええ、もちろんそうよ。出港時はよっぽどのことが無い限り開かれるわ。」

当たり前じゃない、という風に宝鶴が答える。

「ああ、そういうことね。もちろん行かせてもらうよ。で、どこでやるんだい？『瑞鶴』の会議室はちょっと狭いと思うよ。」

彼方には特に断る理由がないため行くことにした。

しかし、問題は場所だ。

『瑞鶴』には会議室は一応あるが、とてもではないが五十人を超える大人数の艦魂は入らない。

だが、彼方の心配は無用だった。

「ああ、それなら大丈夫よ。場所は『慧龍』の会議室だから。」

旗艦としての設備が整っている『慧龍』は会議室が広いので場所の面では大丈夫だ。
それに宴会時に会議室を使用する人もいないので、さまざまな意味で好都合な場所である。

「うん、それなら大丈夫だね。」

「そうよ。それじゃあっちまで『飛ぶ』わよ！しっかりつかまってなさい！」

と言って宝鶴たち三人は光に包まれて消えてしまった。
そして、その光景を影から見詰めている人がいた……

彼方たちが、『慧龍』の会議室に着いたときには、既に宴会は始まっていた。
士官服やセーラー服を着た艦魂たちは、皆既に楽しそうに酒を飲んでいたり、ご馳走を食べていたりする。
よく見ると、空母の艦魂は全員士官服で、他は下士官服を着た数人の艦魂以外全員セーラー服である。

彼方が中をよく見てみる。
翔龍は彼方が知らない歌を歌っていて、その周りの数人の艦魂が声援をあげている。
そこから離れたところで幻龍は他の艦魂たちと酒を飲みながら騒いでいる。
その中には仙龍がおり、彼方の知らない士官服の艦魂に抱きついている。
仙龍に抱きつかれている子は、顔を真っ赤にしながら逃げようとし

ている。
錦鶴は意外なことに慧龍と話していた。
二人ともとても楽しそうで、錦鶴は時折笑顔さえ見せている。
瑞鶴はテーブルに陣取り、ひたすら酒を飲んではご馳走を食べていた。
彼方がそれらを見ていると、宝鶴が手を叩いた。

「はい、注目！これが今日のメインゲスト、山城　彼方でぇ～す！」

おおおぉぉぉっっ！　パチパチパチ・・・・

その場にいる全員が歓声を挙げてテンションが一気に上がる。

「おっ、ようやく来たね～」

「彼方ぁ、来てくれたんだ。」

「あ～山城はん、いらっしゃい～」

「中尉、よくお越しになりました。」

「あっ、あのっ、いらっしゃい・・・・」

「・・・・・（ペコリ）」

幻龍たち空母が彼方に挨拶をする。
下士官服やセーラー服着ている子たちも彼方の方を見ている。

「こんばんは、みんな結構盛り上がってるね。」

「ねえねえ、彼方もこっちに来て歌わない？次は『残〇な天使のテ〇ゼ』だよ。」

翔龍が彼方をカラオケに誘う。

「いや、遠慮しておくよ。っていうか時代設定を完全に無視してない？」

と彼方は翔龍に突っ込む。

「大丈夫だよ、わたしのアンテナ（触角）で未来の電波を受信しているから。」

と翔龍はいつも通り意味不明な台詞を言う。
どうやら受信してはいけない電波も拾っているようだ。
彼女の周りの艦魂もみな触角をきちんと装備しているのはご愛嬌である。
話に付いていく気が全くない宝鶴と翔鶴は、いつのまにかここから退却していた。

「ますます意味分からないって。それより、どうして今日は仙龍は襲ってこないの？」

「むふふっ。ほら、仙龍はあの子に夢中だからね。」

翔龍の指差す方を見ると、仙龍に猛烈にからまれている下士官服の子がいた。
その子は真っ赤な顔をして仙龍から逃れようとしているが、彼女に阻まれて思うようにいかない。

「ああ、そういえばさっきもこんな感じだったね。」

「ふふふっ、二人は百合なんだよ。あの子もああ見えて結構楽しんでるのさ。」

と翔龍が面白そうに言う。

「ふぅん、ところで百合ってなに？」

ちなみに、彼方はその方面にまったく関心がない。
そのために、そういった知識は殆どないのだ。

「うふっ、百合ってのはね……」

「翔龍さ～ん、そろそろ歌ってくださいよ～。もう待ちくたびれましたぁ～」

翔龍が彼方にその意味を言おうとしたとき、彼女の声を遮って歌を待ちわびたような声が聞こえる。

「はいは～い、今行くよぉ～。それじゃまたね、彼方君。」

「うん、行ってらっしゃい。」

それだけ言うと翔龍は再び艦魂の輪の中に戻る。
その中で熱唱する翔龍を見て、彼女も色々と大変なんだなと彼方は思った。

「そういえば百合ってなんだろう？あとで翔鶴にでも聞いてみるか……」

彼方は次に仙龍のところへ向かうことにした。

「やあ、仙龍。何してるの……って酒臭っ！」

どうやら仙龍は大量の酒を飲んだようだ。

周りを見てみると、空になった一升瓶があちこちに転がっている。

「ん～？わらひはたらこの子を可愛がってただけやぁ～
う～ん、琵琶(びわ)ってやっぱりかぁいい～。」

と言って腕の中の琵琶を抱きしめる。

呂律が回らないことからして、相当飲んだようだ。

「やっ、止めて下さいっ、仙龍さんっ！ひゃうっ！？
そっ、そんな所ダメですよっ！はっ、放してくださいっ！」

琵琶は一生懸命もがくが、仙龍に抑えられて動くことができない。

「いややぁ～。まったく、琵琶ったらやぁらかくて気持ちええなぁ～」

そう言ってますます仙龍は、琵琶を強く抱きしめて頬をすりすりする。

「ひゃあっ！せっ、仙龍さんっ、いい加減に……」

「す～……」

いよいよ琵琶が怒ろうとするが、仙龍はいつの間にか寝てしまったようだ。
琵琶がため息をついて彼女を部屋の隅に寝かせる。
口ではぶつぶつ文句を言っているが、彼女はとても優しい表情をしていた。
ふと、あることを思い出した彼方は琵琶に尋ねる。

「あれ、君って確か『吉野(よしの)』級防空巡洋艦の『琵琶』だよね？」

吉野級防空巡洋艦とは、第四次艦艇補充計画（通称：マル四計画）で建造された防空巡洋艦である。
それまでの巡洋艦と違い、防空専用の艦で、主砲や魚雷兵装を全廃して対空砲のみを搭載した艦である。
優れた防空能力により、航空機主体の戦いとなるであろう今後の戦闘での活躍を期待されている艦である。

「ええ、そうです。姉達四人は呉にいて、後の三人はこの場で下士官服を着ているので、すぐに分かると思います。」

そう言われて彼方は周りを見渡すと、幻龍の近くに二人、食べ物のテーブルのところに一人、下士官服の子がいる。

「あっ、ほんとだ。それにしても、琵琶って仙龍と結構仲いいんだね。」

「なっ！？山城さんっ、ぜんぜん違いますよっ！わたしはそんなつもりではっ！」

琵琶は真っ赤な顔をして彼方の言葉を否定した。

「そう？その割にはちゃんと彼女の面倒見てたけど……」

「なっ！！もうっ、知りません！」

琵琶は顔を真っ赤にして怒って、そっぽを向いてしまった。
彼方はどうにか琵琶をなだめて、機嫌を直させる。

「そういえば、琵琶は他の艦魂のところへ行かないの？」

「いえ、もう少し仙龍さんを看てます。」

琵琶は仙龍に膝枕をしながら言う。
その顔は聖母のように穏やかなものであった。

「そう、じゃあ僕は慧龍のところへ行くよ。じゃあね。」

彼方がそう言って立ち上がると、琵琶は軽く手を振って見送ってくれた。

慧龍たちがいるテーブルには二人以外誰もいなかった。
他の艦魂たちはみんな壁際で飲んでいたり、食べものを食べたりしていた。

「やあ、二人とも。ちょっとお邪魔するよ。」

そう言って彼方は二人の向かい側の席に座る。

「あっ、中尉。」

「ひっ・・・・」

慧龍は普通に挨拶を返してくれるが、錦鶴は怯えた様な顔をする。

「二人とも何してるの？」

彼方は錦鶴の態度に少し落ち込みながら、慧龍に聞く。

「わたしたちはただ料理を食べて話してただけですよ。
今、彼女の趣味について話していたところなんですよ。」

「えっ、錦鶴の趣味ってなんだい？」

「えっ、えと・・・・・わっ笑わないですか？」

錦鶴はおずおずと彼方に聞いてくる。

「もちろん。」

「あの、実は・・・・まだ下手なんですけどホルンをやってまして・・・・・」

錦鶴は顔を真っ赤にして恥ずかしそうに言う。

「本当かい！？」

錦鶴の趣味が自分と同じだと分かり、彼方は思わず身を乗り出していた。

「ひっ！」

錦鶴はいきなりの彼方の行動に怯えてしまった。

「あっ、ごめん……」

彼方は冷静さを取り戻して、席に座りなおす。
錦鶴もそれをみて少し落ち着いたようだ。

「で、錦鶴はホルンをどのくらいやってるの？」

彼方は改めて錦鶴に聞く。

「はい、大体二年くらいです……。
それで…あの、竣工式の時の軍楽隊の演奏を見ていいな、って思ってそれからやってみようと……」

「へぇ、そうなんだ。それじゃあ、教本は……」

彼方と錦鶴が楽しそうに話しているのを見て慧龍もうれしそうだ。

「慧龍、そっちは……って、珍しいわね。錦鶴があんた以外と楽しそうに話してるのは。」

幻龍は二人が楽しそうに話しているのを見て驚いている。

「ええ、そうね。あの中尉さんもなかなか見所あるんじゃない？」

「そうね。それにしても、慧龍は最近その中尉さんの事ばかり話してるわね。」

と幻龍はニヤニヤしながらからかう。

「それはどういう事かしら？
姉さんこそ、あの人のことが好きだからわたしに嫉妬してるんじゃないですか？
まあ、わたしと姉さんって戦艦と空母ぐらいの差がありますから無理はありませんけどね。」

慧龍は平然と答える。
戦艦と空母が何を指しているかは読者の想像にお任せしよう。

「なっ・・・・！違うってば！それよりその例えは酷いんじゃない！？」

図星の上、自分の気にしていることを指摘された幻龍は、顔を真っ赤にして言い返す。
慧龍と幻龍が言い争っている横で、喉が渇いた彼方は近くにあったレモンジュースを飲む。

「あっ、このレモンジュースおいしい！ほらっ、錦鶴も飲んでみなよ。」

彼方はそう言って他の瓶を錦鶴に渡した。

「あっ・・・・はい。あっ、ありがとうございます。」

と言って錦鶴は恐る恐る瓶を受け取ってレモンジュースを飲む。

「あっ、それは『シトロン・ジェネヴァ』よ！」

突然、慧龍と話言い争っていた幻龍が叫ぶ。

「えっ、なにそれ？レモンジュースじゃないの？」

「違うわよ！それはレモン入りのカクテルよ！」

そう言われて彼方は錦鶴を見ると、彼女の顔は真っ赤に染まっていた。

目はとろんとしていて、剣呑な空気を放っている。

「ああっ、大変なことになったわ！全員急いで……ひっ！」

幻龍が逃げて、と言い終わる前に、彼女の喉元のわずか先に錦鶴の刀があった。

「おい……ごたごた言うんじゃねぇ！とっとと酒もってきやがれ！」

錦鶴は普段とは別人のような恐ろしい顔で言う。

それと同時にまわりの艦魂たちに緊張が走る。

だが、そんな中で瑞鶴はひたすら食事をしている。

既に彼女の周りは空になった皿がうず高く積まれているが、ペースは一向に衰えていない。

話を戻そう。

彼方は知らなかったが錦鶴は酒癖が異常に悪いのだ。

前に彼女の竣工祝いで宝鶴が悪ノリして彼女に無理やり酒を飲ませたところ、

彼女は悪酔いしてしまい、慌てて全員で止めようとしたが歯が立たなかったのだ。

そのときは、アルコール度数が高い酒をたくさん飲ませて酔い潰させることで、どうにか事なきを得たのだった。
しかし、今回は出港祝いのために酒はあるが、度数は低く量も少ない。
度数が高い酒も、外に出ればないことはないが、この場から逃げる前に錦鶴に襲われる可能性のほうが大きい。

「あの、錦鶴？どうしたの？」

そんな中で事情が全く飲み込めない彼方が無謀にも彼女に話しかける。

「ああん？誰が話しかけていいと言ったぁ、この愚図がぁ！
それに俺様を呼ぶときは『錦鶴様』だろうが！」

彼方の発言に酔った錦鶴がキレる。

「……はい、わかりました錦鶴様。」

悪酔いした人を扱わせれば右に出る者はいない、と言われるほど酔った人の扱い上手な彼方は、
とりあえず無難に対応することにする。
新兵時代に無理矢理刷り込まれた教育の賜物である。

「声が小せぇ！もう一回！」

「わかりました、錦鶴様っ！」

彼方はヤケクソになって答える。

「よろしいっ！貴様はなかなか骨のあるやつだな。
おい、愚姉ども！とっとと酒を持ってきやがれ！愚図愚図してると斬り殺すぞ！」

とりあえず怒りの矛先は彼方から逸れたが、今度は彼女の姉である翔鶴と宝鶴に向けられた。

「はっ、はい！わかりました！」

「・・・わかりましたっ！」

翔鶴は怯えながら、宝鶴はまたやったかという表情で酒を取りに他のテーブルまで走る。
テーブルで料理を食べている瑞鶴を除いた他の艦魂は、とばっちりを食わないように壁際へ移動している。

「まったく、使えない愚姉どもだ・・・・・」

と瑞鶴を見ながら錦鶴が呟いたとき、救いは現れた。

「やっほ～、遅れてごめんね！今日はちょっと忙しかったんだ☆
それでお詫びにお酒をたっぷり・・・・・って、あれ？」

といきなりハイテンションで登場した金髪碧眼の少女は、ここにいる艦魂たちの大先輩である『三笠』の艦魂だ。
彼女は『敷島』級戦艦の四番艦で、かの日露戦争で連合艦隊旗艦として黄海海戦や日本海海戦の大勝利を飾った殊勝艦だ。
その後は姉達は解体されたが、彼女は記念艦として保存が決まり、現在は横須賀港に碇を下ろしている。
なぜ彼女は他の艦魂と容姿が違うのかというと、英国に発注された

艦であるために外見はイギリス人であるからだ。
さて、彼女は艦暦が長いせいか（余計なお世話よ！）、入ってくるなりすぐに状況を読み取った。
「ああ、そういうことね。まったく、しょうがないなぁ。」
と言うやいなや、ドアのそばから一瞬で錦鶴の前に立ち、彼女の口に無理やり酒が入った瓶を突っ込む。
「ちょっ、むぐっ・・・・ん・・・・こくっ・・・・ん〝っ！？・・・・・・」
三笠は錦鶴が酒を飲み込むのに必死になっている隙を突いて、当て身を食らわせて気絶させる。
錦鶴は口から盛大に酒を溢れさせながら倒れる。
三笠はやれやれ、といったため息をつきながら錦鶴を部屋の隅に寝かせる。
あまりの早業に彼方をはじめ全員が唖然としていた。
「まったく、今回はわたしがいたから良かったけどね。これからみんなも気をつけてね。」
三笠はそう言った後、彼方の方を向く。
「おっ、珍しいね。君は艦魂が見えるのかい？」
「ええ、そうですが・・・・一体、あなたはどなたですか？」
彼方はその少女――三笠――を訝しげに見る。

「あっ、自己紹介がまだだったね。わたしは『三笠』の艦魂よ。これからよろしくね！」

三笠はそう言って手を差し出してくる。

「僕は山城彼方です。『瑞鶴』で戦闘機の搭乗員をしています。」

彼方は笑顔で差し出されたその手を握る。

「えへっ、君は結構カッコいいね。わたしも参戦しちゃおうかな？」

するとその瞬間、この場が殺気に包まれた。

どうやらその殺気は数人から放たれているらしいが、それでもこの場を凍らせるのは十分だった。

その張本人である彼方は、突然の殺気に訳も分からずに混乱する。

瑞鶴は相も変わらず食事をしているが、ちらちらとこちらを見ている。

「じょっ、冗談だってば。ちょっとからかってみただけだよ。ほら、みんな、笑顔は大切だよ。」

三笠はあまりの殺気に冷や汗をたらしながら弁解する。

それで大部分の殺気はなくなったが、未だに警戒するような視線はこちらを向いている。

「ふぅ、危なかった。」

「あの・・・三笠さん、さっきのはいったい・・・・・・」

鈍感なため事情がまったく分からない彼方は、とりあえず三笠に聞

いてみる。

「うん、君はまだ知らない方がいいことだよ。そのうちいやというほど分かるようになるから。」

「はぁ……」

彼方は納得したわけではないが一応頷く。

「それじゃあ、わたしはこの子を寝かせてから他の艦魂のところへ行くよ。積もる話もあるしね。」

「はい、いってらっしゃい。」

三笠はにこやかに手を振って錦鶴を部屋の端に寝かせる。
彼方はさすが最年長なんだな、と彼女が聞いたら殺されるような事を思った。

ぎゅぅぅ〜

「痛っ！」

突然つねられて驚いた彼方は、後ろを振り向く。
そこには頬を膨らませた翔鶴がいた。

「もうっ、なに他の子に色目つかってるんですか〜」

「そんなもの使ってないよ。」

「絶対嘘です！三笠さんを見て金髪もいいな〜、なんて思ってるん

でしょう！」

「違うってば！」

「う～……」

翔鶴は未だに頬を膨らませてたままだが、とりあえず手は放してくれた。

「いてて……まったく、しょうがないな。お菓子でも食べる？」

「はい！もちろん！」

食べ物と聞いた瞬間に翔鶴は目を輝かせる。
そこは瑞鶴と似てるんだな、と彼方は思ったが口には出さなかった。

「それじゃあ……ってもうお菓子がない！」

なんとお菓子だけでなく、あれだけたくさんあった料理も跡形も無く消えていた。
他の艦魂はあまり食べていた様子は無かったからほとんど瑞鶴が食べたのであろう。

「あぁ～っ、お菓子も料理もない！まさか、瑞鶴が全部食べたの？」

「……（コクリ）」

実は、錦鶴が酒を飲んで暴れている最中に、瑞鶴は全てのテーブルの料理を食べつくしていたのだ！
他の艦魂たちもその事に気づいて悲鳴をあげる。

「嘘っ！？あれだけあったのに？」

「・・・・・うん。もうお腹一杯。」

と言って瑞鶴は満足そうにお腹をさする。
しかも、瑞鶴はあれだけ食べたのに外見は全く変わっていない。
まさしくブラックホールのような胃である。

「ちょっと、瑞鶴！どうしてくれるのよ！
せっかく中尉さんに『あ～ん』とか『あんこがついてるから取ってあげるよ・・・ペロッ』とかしてもらいたかったのに！」

翔鶴は必死に己の夢を訴える。
彼方はそれを聞いて苦笑している。

「・・・・・そう。」

瑞鶴はそんな姉の必死な思いを、無表情のままあっさりとスルーした。

「一言で片付けるなぁー！」

「まあまあ、落ち着いてよ翔鶴。お姉さんなんだから。」

彼方の瑞鶴をかばう様な発言が翔鶴の怒りをますます燃え上がらせる。

「ちょっと、お姉さんだからってどういうことですか！
これをず～～～っと楽しみにしてたわたしの気持ちはどうなるん

ですか！」

と言って翔鶴はぽかぽかと彼方を殴る。

「うん、わかった、悪かったから。ほら、代わりにこれをあげるから。」

そう言って彼方はポケットから饅頭を取り出した。

「そんなものでわたしをなだめようと思ったって、そうはいきませんよ。」

だが、翔鶴はちらちらと饅頭の方を見ている。

口元にはだらしなく涎が垂れている。

「はぁ、しょうがないなぁ。あ～んしてあげるから。」

「むっ・・・・しょうがないですね。中尉がそこまで言うなら・・・・・」

と言うが、顔は嬉しそうだ。

「ほら、あ～ん」

「あ～ん・・・・」

ぱくっ、はむはむ・・・・・

「ん～っ、とっても甘くておいしいですぅ☆」

翔鶴はさっきの不機嫌はどこへやら、とても嬉しそうに饅頭を食べ

ていた。
それを見た幻龍が遠くから睨んでいる。
横を見ると、瑞鶴がもの欲しそうな目でこちらを見ている。
「瑞鶴も欲しいのかい？」
「……（コクリ）」
「それじゃあ、まだあるからあげるよ。」
「……ありがとう。」
瑞鶴は彼方に微笑む。
それを翔鶴が驚いたように見ている。
「はい、どうぞ。」
瑞鶴は彼方から饅頭を貰うなり、一口で食べてしまった。
「……おいしい。」
「うん、それはよかった。」
そう言って彼方は瑞鶴の頭を撫でる。
「ん……わたしはもう帰る。」
「うん、気をつけて。」
瑞鶴は少しの間気持ちよさそうにすると、そう言って光に包まれて

消えてしまった。

「中尉はいったい瑞鶴となにをしたんでしょうねぇ～。
彼女が笑うとこなんて、わたし一度も見たことないんですよ。」

後ろでは翔鶴が嫉妬モード全開の笑顔で彼方を睨んでいる。
そしてその隣にはなぜか幻龍がいて、彼女も翔鶴と同じく彼方を睨んでいる。
こいつらの説得には苦労しそうだ、と彼方は頭を抱えた。

その後、どうにか二人をなだめた彼方は翔鶴に部屋の前まで送ってもらった。

「今日はありがとう、翔鶴。いろいろと楽しかったよ。」

「こちらこそ。中尉が来てくれて嬉しかったです。」

翔鶴は微笑んで彼方の頬にキスをした。
さすがの彼方も真っ赤になる。

「えと・・・今のはほんのお礼です。あのっ、それではっ！」

翔鶴は真っ赤になって離れた後、光に包まれて消えてしまった。
彼方はしばらくキスされたところを触っていたが、背後に殺気を感じて振り返る。

「へぇ、中尉さんは逢引のお帰りですか。まったく、モテるお方はおつらいですね・・・・・」

後ろには晴香が立っていた。
彼女は物凄い殺気を放っている。

「はっ、晴香っ！どうしてここに！」

彼方は冷や汗が体中から吹き出るのを止めることができなかった。

「ふふふっ、宴会中にちょっと様子を見に待機室に行ったら、
あなたが女の子と親しげに話してるのを見てしまったんですよ。
それでちょっと目を離したら消えちゃってたんで、ここであなたを
待ってたんですよ。」

晴香はあくまでも笑顔だ。目は笑っていないが。

「へっ、へぇ～・・・そうなんだ。それじゃあ、僕はそろそろ寝ない
と・・・・・・」

と言って彼方は自室に向かおうとする。

「えっ、何を言ってるんですか？これから楽しい尋問の時間じゃな
いですか。
さあ、こっちに来なさい。大丈夫よ、『死に』はしないから。」

自室の方向にある道を塞ぎながら、晴香はじりじりと彼方との距離
を詰める。

「うひゃあっ、誰か助けて～！」

彼方は一気にダッシュで逃げる。

「待ちなさいっ！今度こそ逃がしはしないわよ！」

晴香も彼方の後を追う。

二人の夜はまだまだ長くなりそうだ……

第五章「出港前夜」（後書き）

霜月「ふぅ、ようやく第五章を上げました。今回はなんと、前章の約二倍の分量で更新時間も二倍となってしまいました。それにしても疲れた。」
宝鶴「あんた何時も『疲れた』ばっかいってるわね。根性が弛んでるんじゃないの！」
霜月「いや、そんな事言われても僕だって忙しいんですよ。部活でスコアの写譜しなきゃいけないし、勉強がヤバイし・・・・」
宝鶴「はぁ？あんたバカァ？それは他の作者さんだって同じじゃない。黒鉄さんだってあの膨大な量をほぼ三日で仕上げてるし、草薙さんに至ってはほぼ毎日が更新日じゃない！あんたもちょっとは頑張りなさいよ！」
霜月「ううっ、わかりました。あっ、そうだ。今日はなんと宝鶴達の大先輩である三笠さんが来ております！」
三笠「やっほ～☆どうも、三笠でぇーす！それで、わたしはどうすればいいの？」
霜月「普段どおりで大丈夫ですよ。」
三笠「うん、わかった。えっと、次回はいよいよ第二艦隊の後発隊がトラックに向けて出港するんだって。
これから日本はどうなっちゃうのかなぁ・・・・・。わたしは絶対戦争には反対だよ。」
宝鶴「そうよ。わたしだって戦争はしたくないわ。向こうの艦にだって魂はあるだろうしね。」
霜月「その通りです。ですが、現在日米間の溝が深まって開戦直前な様子です。
日本は忠実よりは大分マシになってますが、その分だけ戦争が惨くなりそうです。」
宝鶴「まったく、あんたももう少し平和的な小説を書きなさいよ。」

霜月「それにはこれを完結させないと……予定では後七十章以上ですからね。」
宝鶴「まっ、精々頑張るのよ。」
三笠「それでは、感想・ご意見など待ってます。（ふぅ、ようやくセリフもらえたわ。）」
宝鶴「こんな駄目作者ですが見捨てないで下さるとありがたいです。」

第六章「出港、決意改め・・・・」（前書き）

《登場人物紹介》

「琵琶（びわ）」

所属

大日本帝国海軍第二艦隊第二直衛戦隊第二防空巡洋艦戦隊

年齢

０歳（１９４１年９月１日現在）

誕生日

１月１４日

身長

１５４ｃｍ

外見年齢

１５歳

吉野姉妹の六女。髪型は黒のボブカットで前髪を目が隠れるほど伸ばしている。

とてもおっとりとした性格で、部下である駆逐艦の艦魂からは慕われている。

よく仙龍に襲われ、本人も嫌そうな素振りを見せるが、実は彼女に抱きつかれることが好きである。

趣味は読書と音楽を聴くこと。

「三笠（みかさ）」

扱い

三笠公園施設

年齢

３９歳（１９４１年９月１日現在）

誕生日
３月１日
身長
１５４ｃｍ
外見年齢
１６歳

敷島姉妹の四女。
既に姉妹は全艦退役し、他の三艦は解体されたが、彼女は記念艦として横須賀に保存されている。
日露戦争時には連合艦隊旗艦を務めていた。
性格は明るく自由奔放だが、司令官としての一面を持っており、その時は別人のような性格になる。
過去の経歴のためか、横須賀港の艦魂のまとめ役をしている。
趣味は兵棋演習と他の艦魂との会話。

第六章「出港、決意改め・・・」

昭和１６年１０月１４日。
今日は待ちに待った第二艦隊後発隊の出港日である。
横須賀港には日章旗を持った見送りの人がたくさん来ており、ものすごく混雑している。

そのころ、彼方は眠そうな顔をして晴香と歩いていた。
彼方は昨晩、艦を一回りするほどの大逃走劇を繰り広げた末に、とうとう晴香に捕まってしまったのだ。
その後、彼方は拷問のフルコースを受け、それは朝まで続いていた。
そのために彼はほとんど眠れず、目には隈ができている。
しかも顔はほとんど無傷であるが、体にはかなりの数の縄の痕や痣が刻まれているという念の入れようである。
ちなみに、その彼方と晴香が二人で歩いているのは、彼方が横須賀基地に戻る彼女の見送りをするためである。

二人とも舷側のタラップに向かって黙って歩く。
彼女はタラップを降りる前に彼方に近寄ってきた。
彼方は先ほどの拷問を思い出し、思わず身構える。
だが、晴香の口から出てきた言葉は彼の予想とは大きく違った。

「彼方・・・あんたはもう行っちゃうのよね。」

彼女は悲しそうな顔で言う。

「うん、これも軍務だから。」

彼方はただ淡々とそれに答える。

「ねぇ、彼方…お願いだから死なないで。必ず生きて帰ってきて。」

晴香は真剣な顔で、そして目に涙を浮かべながら言って、彼方に抱きついたのだ。

彼方は驚いたが、やがてゆっくりと晴香を抱きしめ返す。

「晴香…大丈夫。僕は絶対に戻ってくるから…約束するよ。」

彼方は晴香の頭をなでながら言う。

晴香は気持ちよさそうにされるがままにしている。

二人はしばらく抱き合っていたが、やがて二人はどちらからともなく離れた。

「うん、約束よ！破ったら承知しないわよ！」

そう言った彼女はとびきりの笑顔を見せる。

彼方はそれを見てドキッとする。

晴香は彼方に手を振って桟橋に向かう通路を降りていく。

そして晴香はいま自分がしたことを思い出し、顔を真っ赤にした。

彼方は晴香の後姿をしばらく見ていたが、やがて踵を返して艦内に戻っていった。

晴香を見送った後、彼方は艦内をぶらぶらしていると、後ろから肩を叩かれた感じがした。

振り向くとそこには瑞鶴がいた。

「どうしたんだい、瑞鶴。」

「……今から艦魂の出撃式があるの。山城さんも連れて来いって姉さんに言われた。」

「そうか、わかった。ところで僕はこのままの服装でいいの？」

彼方は今、正装である第一種軍装でなく飛行服を着ていた。本来、出港式などの儀式は、第一種軍装や第二種軍装といった礼服の着用が義務付けられている。

「……構わない。それじゃ飛ぶわ。」

と瑞鶴が言うやいなや、二人は光に包まれてその場から消えてしまった。

二人が着いたのは旗艦である『慧龍』の会議室であった。そこには既に横須賀港内にいる全艦魂が勢ぞろいしており、広い会議室が狭く感じられた。

二人が会議室に入ってくると、周りの艦魂たちが一斉に彼方の方を向く。

彼方は物凄い疎外感を感じたので、一刻も早くこの場を抜け出したかったが、海軍で培った強大な精神力でそれに耐えた。

瑞鶴は彼方がおろおろしている間に、まっすぐ整列している第二艦隊の艦魂たちの端に並ぶ。

「彼方君は部屋の端のほうで立っててくれない？」

三笠に言われて、彼方はすぐに部屋の端に移動した。

「これより、出港式を始める！」

後発隊の旗艦である慧鶴が普段とは違う真剣な声で開会を告げる。
他の艦魂たちの顔も真剣そのものだ。

「連合艦隊最先任艦魂、三笠殿よりお言葉を拝聴ッ！」

名を慧鶴に呼ばれた三笠が会議室の真ん中に移動する。
そして彼女は息を大きく吸う。

「私からは一言だけ言葉を贈ります。
『総員、必ず帰還せよ！』
以上をもって最先任艦魂の言葉とさせて頂きます。」

そう言って三笠が礼をした瞬間、この場にいるほとんどの艦魂たちが熱狂的な叫びをあげる。
中にはどこから用意したのかクラッカーを撃つ者までいる。
それを笑顔で見ながら、三笠は元の位置に戻る。
彼方は艦魂たちの人望が厚い彼女に対して、尊敬の視線を向ける。
やがて騒ぎも段々収まり、再び静寂が会議室を包む。

「これより、第二艦隊後発隊は出港するッ！全員、残留艦艇の艦魂に敬礼ッ！」

旗艦の慧龍の言葉で、後発隊の艦魂が横須賀に残留する艦艇に向けて一斉に敬礼をする。
その瞬間、『慧龍』のスクリューが回転を始め、停泊している岸壁から離れようとする。

「全艦艇、第二艦隊艦魂に向けて答礼ッ！」

三笠の号令に合わせて彼女らは後発隊の艦魂に向けて答礼する。
大勢の艦魂が互いに敬礼する様はなかなか壮観であった。

「これで出港式を終了する。　それでは、総員解散ッ！」

慧龍の号令がかかるが、誰も自艦に戻ろうとしない。
それどころか、空母や巡洋艦、駆逐艦など艦種に関係なく、皆は別れの挨拶をしている。
解散の号令をかけた慧龍自身でさえ三笠に挨拶している。
彼方がぼーっ、とその光景を見てると、頬を赤く染めた翔鶴が話しかけてきた。

「あっ、あの、彼方さんどうしたんですか？遠いものを見るような目をして。」

翔鶴は彼方のほうをじーっ、と見てくる。

「いや、ちょっと昔のことを思い出していただけだよ。」

「そうですか・・・ほら、彼方さんも来てください。三笠さんに挨拶しますから。」

そういって翔鶴は彼方の手を引く。
彼女の頬はこころなしか赤くなっている。

「うん。」

彼方は彼女の後を付いていく。

「あっ、彼方君。わたしの演説どうだった？」
彼方の姿を認めた三笠が話しかけてくる。
「ええ、かっこよかったです。」
「あはっ、よかった。彼方君にそう言ってもらえるとうれしいな。」
三笠は彼方の言葉にうれしそうだ。
「むうっ、三笠さんは中尉にばっかり構いすぎです。」
翔鶴が頬を膨らませて彼方に抗議する。
「ごめんごめん、彼方君は翔鶴ちゃんのこれだもんね。」
と言って彼女は小指を立てる。
「なっ！？彼方さんがわたしの……」
翔鶴は顔を真っ赤にして夢の世界へトリップしてしまった。
「三笠さん、彼女どうしたんですか？」
彼方が翔鶴を指差して言う。
翔鶴は顔を真っ赤にしたままぶつぶつと何かを呟いている。
「いいのよ。彼女はいまお楽しみ中だから。」
と言って三笠は彼方にウインクする。

「はぁ。」

「それより、今からちょっと付き合ってくれない？」

三笠は意味深な笑顔で彼方を誘う。

「ええ、かまいませんよ。」

彼方はその笑顔に疑問を持ちながら彼女の誘いを受ける事にした。

彼方は三笠と共に会議室を出る。

三笠は外に出ると、一言も話さずに使われてない部屋に彼方を連れて行き、ドアを閉める。

「あの、話っていったい・・・・・」

彼方は突然の三笠の行動に戸惑いを隠せない。

「ねぇ、彼方君はこの戦争で生き残る自信はある？」

彼方は変な質問だな、と思いつつ答える。

「わかりません。生きるも死ぬも時の運ですから。」

彼方はその質問にあいまいに答えた。

生き残る自信はない訳ではないが、万が一ということもある。

そのために、ここで確約することはあまりよくない、と彼は判断して答えた。

「じゃあ、彼方君は生きたい？」

いったい三笠さんは何が聞きたいんだろう、と彼方はますます疑問に思う。

でも、かなり前にこれと同じ状況があったような気がする・・・・・

「ええ、それはそうですよ。もちろん死にたいわけないじゃないですか。」

誰だって生きたいのは当然の欲求であろう。

彼方はもちろんこの質問には即答した。

「なら、瑞鶴ちゃんたちが危険になったら自分が命を失ってでも助ける？」

「はい、もちろん。」

彼方は即答する。

瑞鶴たちは僕が守らなきゃいけないんだ。

命にかけても・・・・・

「・・・みんなそう言うのよね。それじゃあ、あなたが彼女達を守って死んだとするわ。

それなら、残された瑞鶴ちゃんたちはどう思うのかしら？」

「・・・・・」

彼方はそれを聞いて愕然とする思いだった。

そうだ！

『あの時』の前にも『あの人』に言われたんだった！
また同じことを言われてしまった・・・結局、俺は『あの時』と変わっていないじゃないか！

「きっと彼女達・・・特に瑞鶴ちゃんはとてもショックを受けると思うわ。
わたしは、彼女が今まであんなに親しそうに他人に話しているのを見た事ないわ。
それに翔鶴ちゃんとか幻龍ちゃんだって、彼方君が乗艦してからとても嬉しそうよ。
彼方君はそれほど彼女たちに慕われているのよ。」

三笠はまるで過去の事を思い出すような悲しい顔で言う。
彼女の言う事がいちいち彼方の心にぐさり、と深く突き刺さる。

僕はいつも彼女たちを自分が守る事ばかり考えていた・・・
でも、僕が死んだ後に残される彼女たちの気持ちは考えていなかった。
その辛く悲しい気持ちは誰よりも僕が知っているのに・・・・・！

「ようやく気づいたのね。私はこれ以上何も言わないからあとは自分で考えてね。」

と言って三笠はドアに手をかけて立ち去ろうとした。

「三笠さんっ、待ってくれ！」

彼方は咄嗟に彼女を呼び止める。
彼女はゆっくりとこちらに振り向く。

「僕は必ず瑞鶴たちを守る・・・そして、絶対にここに帰ってくるよ！」

その言葉に三笠は微笑みで返し、そして彼女は今度こそ部屋の外へ出て行った。

部屋の外に出てドアを閉めた彼女はため息をつく。
その顔には何かをやり遂げたような安堵と深い悲しみが出ていた。
彼女は少しの間そこに佇んでいた後、光に包まれてその場から消えてしまった。

彼方が会議室に戻ると既に横須賀港の艦魂はいなくなっており、第二艦隊の艦魂が数人いるだけであった。
彼女らも後片付けを終えて、今まさに帰ろうとしていた。

「あっ、中尉。今までどこに行ってたんですか？」

と翔鶴が聞いてくる。
どうやら彼女はトリップから抜け出せたようだ。

「いや、ちょっとトイレに行ってたんだよ。」

さすがに先ほどの事は言えない彼方は、翔鶴にとっさに嘘をつく。

「そうですか・・・わたしたちも、いまさっき片づけが終わったばかりなんですよ。
その・・・わたしでよければ『瑞鶴』まで送りましょうか？」

翔鶴は恥ずかしそうに聞いてくる。

「うん、お願いするよ。」

彼方は笑顔で答える。

「！！」

彼女の顔がみるみる赤く染まっていく。

「どうしたの翔鶴？熱でもあるの？」

彼方が翔鶴の額に手を当てる。

「ひゃっ！なんでもないですっ！」

翔鶴は慌てて彼方の手を振り払い、首をぶんぶんと勢いよく左右に振る。

「そう？じゃあ『瑞鶴』までお願いね。」

「はいっ！」

翔鶴は満面の笑みを浮かべながら言った。

「あっ、そういえば『百合』ってどういう意味なの？」

右の頬に赤い紅葉を付けた彼方は翔鶴に部屋の前まで送ってもらったあと、後甲板に向かっていた。

後甲板に出ると、すでに艦隊は全艦出港しており、横須賀が遠くに

見えている。
彼方の周りにも非番の乗員が何人かおり、彼らは一様に黙って故郷を目に焼き付けている。
「『祖国』か……」
彼方はそう呟く。
その顔には深い悲しみと寂しさが宿っていた。
彼方は陸地が水平線に隠れるまで見ていたが、やがて踵を返して部屋に戻っていった……

第六章「出港、決意改め・・・・」（後書き）

霜月「ようやく第六章をあげました。前回の更新より（かなり）遅くなってしまいました。
本当にすみません。」
宝鶴「土下座ね。前回は分量が多かったからまだよかったけど、今回は普通の量じゃない。
情状酌量の余地はないわよ。」
霜月「はい。読者の方々、本当にすみませんでした（土下座）。」
三笠「そういえば、次の次あたりで兵器の説明をやるって本当？」
霜月「はい、ようやく登場兵器の説明が入ります。
いままで架空艦を出したのに、スペックが分からないという訳の分からない状況を打破するためです。」
宝鶴「そこまで言うなら次の次といわず次でやんなさいよ。」
霜月「いや、なんか今更出すのも区切りが悪いと思って、まとまった数の艦が出てきたらやろうと思ったんで・・・・・」
三笠「読者に不親切な作者ね・・・・・」
宝鶴「まったくよ。あんたが一番タチが悪いわ。」
霜月「はい、すみませんでした。」
三笠「そういえば、この作品が更新されない間に黒鉄先生の「艦魂年代史」と伊東先生の「護衛戦艦神龍」が完結したんだよね。」
宝鶴「そうよね。何か凄く寂しいわ。艦魂はこの後どうなっちゃうのかしら？」
霜月「大丈夫ですよ。黒鉄先生も当分艦魂作品を書き続けるらしいですし、他にも最近百章を突破された草薙先生を始めとする僕より優れた先生方がたくさんいらっしゃるじゃないですか。」
宝鶴「特に更新頻度とかね。」
霜月「うぐっ、いいじゃないですか。その代わり僕はいまだに誤字脱字の報告がゼロですよ。」

三笠「そりゃ、あんだけ時間をかければね。それこそ誤字脱字があったら駄目作者どころじゃないわよ。」
霜月「ううっ、その辺は前向きに善処させていただくという事で・・・」
宝鶴「今の返事はやらないという事かしら？」
霜月「いえっ、違いますよ！今は試験三週間前で勉強しなきゃいけないし、部活も大会近いし、学校遠いから朝早く起きなきゃいけないし・・・。そんな訳でパソコンで打てる時間がないんですよ。」
三笠「じゃあケータイで投稿したら？現にそういう作家さんもいらっしゃるし。」
霜月「ケータイは無理です。いま、親指が両方腱鞘炎寸前だし、それにケータイって文字を打つ速度が遅いじゃないですか。」
宝鶴「使えないわね・・・じゃあ、睡眠時間削れば？」
霜月「これ以上削ったら死にますよ！」
三笠「困ったな～」
宝鶴「作者は教室で席が一番前で、しかも教卓のすぐ横だから授業中の内職ができないしね。」
霜月「とにかく！今度こそ早めに更新できるように頑張りたいと思います！」
三笠「よく言った！その決意だよっ！」
宝鶴「それでは、ご意見・ご感想お待ちしております。ご意見はなるべく反映するように努力しますが、更新速度だけはどうにもなりません。あしからず。」
三笠「では、次回もお楽しみに～」

第七章「訓練、そして・・・・」

現在、第二艦隊の後発隊の２４隻（空母8、巡洋4、駆逐１２）は硫黄島沖を航行している。
目的地のトラックまではあと二千キロ・・・・日数にしてあと8日ほどである。
ちなみに、横須賀からトラック環礁まで約三千キロもあり、日数にして約１２日である。

ここで第二艦隊後発隊の艦艇の紹介をしよう。

『第二艦隊後発隊』
「空母部隊」
・第五航空戦隊
『翔鶴』『瑞鶴』（翔鶴級正規空母）
・第六航空戦隊
『宝鶴』『錦鶴』（翔鶴級正規空母）
・第七航空戦隊
『幻龍』『仙龍』（幻龍級正規空母）
・第八航空戦隊
『翔龍』『慧龍』（幻龍級正規空母）

「護衛部隊」
・第二直衛戦隊
・第二防空巡洋戦隊
『五ヶ瀬』『十勝』『揖斐』『留萌』（吉野級防空巡洋艦）
・第四防空駆逐隊
『秋雲』『冬雲』『白雲』『山雲』（夕雲級防空駆逐艦）
・第五防空駆逐隊

『峯雲』『蒼雲』『紅雲』『天雲』（夕雲級防空駆逐艦）
・第六防空駆逐隊
『雪雲』『雷雲』『沖雲』『八重雲』（夕雲級防空駆逐艦）

・艦載機
常用６４０機

以上が第二艦隊後発隊の戦力である。
詳しい艦艇の性能は次章で述べるためここでは省くが、既にトラックにいる先発隊を加えると相当な戦力となる。
その上、呉の第一艦隊と舞鶴の第三艦隊がおり、それらを合わせると米海軍をも上回る世界最強の機動部隊となるのだ。

さて、その後発隊の空母の艦上は、航空機の爆音に包まれていた。
甲板上には前から艦戦、艦爆、艦攻、艦戦の順番で並んでおり、発艦の合図をいまや遅しと待っている。
なぜ艦戦が二つに分割されているのかというと、今日の訓練は各母艦航空隊の合同訓練であるとともに、艦隊への攻撃訓練なのである。
そのため、後部に並べられた艦戦は敵の直衛戦闘機役を務めるのである。
そこには帝國海軍の制式塗装であるネイビーブルーに塗装されている一式艦上戦闘機『陣風』に乗る彼方の姿もあった。

『陣風』は４月から配備されたばかりの最新鋭機であり、当時の艦上戦闘機としては最も速い６１０キロの最高速度を誇っている。
武装は一式１２．７ミリ機銃を６挺装備し、航続距離は約２千キロとかなりの高性能機である。

（燃料計、油温、筒温よし。爆音も正常だ。あとは発艦の合図を待つだけだな……）

彼方は計器を頼りに機体の調子を確認し終えて、発艦の合図をする
甲板士官の旗を見ていると、視界の端に軍服を着た女の子が見えた。
彼女は航空機が並んでいる甲板を注視しているようだ。

（あっ、瑞鶴だ。相変わらず無表情だな……）

そう彼方が思った瞬間、甲板士官の旗が振り下ろされた。
先頭の菅野少佐機がカタパルトの力により、勢いよく飛び立ってゆく。
続いて二番機の沢渡誠二飛曹が発艦する。
彼方は、次々と発艦していく僚機たちを見ながら機体を前進させる。
ふと瑞鶴の方を見ると、彼女もこちらに気づいたようで、小さく手を振ってきた。
彼方も笑みを浮かべながら手を振り返す。

前の機が発艦し、ついに彼方の番になった。
整備兵が機体をカタパルトのフックに引っ掛ける。
フックに引っ掛け終わったら、整備兵たちはその場から退避すると同時に、彼方はエンジンを全開にする。
すべての準備を終えた彼方は甲板士官を注視する。

旗が振られた。

その瞬間に零式艦載油圧カタパルトが作動し、機体を一気に時速２１０ｋｍまで加速させる。
彼方はそのショックに耐えながら飛行甲板が終わる頃合いを見計らって操縦桿を引く。
すると、機体はふわっと浮き上がり、やがてぐいぐいと引っ張ってゆく感覚がくる。

彼方はそのまま上昇し続け、編隊を組みつつある先行機について行く。

防空指揮所に立っている瑞鶴はその光景をただ黙って見ていた。
不意に彼女の脳裏にこれと同じような光景が映し出される。
だが、飛び立つ飛行機は帝國海軍制式のネイビーブルーではなく、純白の塗装がされていた。
飛行機の形も微妙に違う気がする。
彼女がもっとそれをよく見ようとすると、その映像は消えてしまった。
そして、その後にはもうそれを見ることはできなかった……

彼方は編隊の定位置に付いたあと、周りを見渡してみると次々と空母から発艦していく航空機が見える。
空に飛び立ったそれらは、各自別々の場所で集合をしている。
百機以上の航空機が上空で編隊を組んでいる光景はなかなか壮観である。

彼方が他の編隊を見ている間に、中隊は編隊を組み終わったようだ。
そして中隊は、他の母艦の戦闘機隊と合流して一大編隊を形成する。
艦爆や艦攻も編隊を組み終えたらしく、高い順から艦戦、艦爆、艦攻と、機種ごとに高度を変えていく。
そして、それらの大編隊から少しうしろの高高度では、『慧龍』から発艦した2機の一式艦上偵察機『彩雲』が編隊を組んでいる。

『彩雲』は最高速度が時速６３７キロと『陣風』よりも速く、最新式の機載対空・対艦電探を装備し、索敵能力が従来と比べて大きく上がっている。

また、航続距離も４千キロ以上と驚異的な値である。

さて、なぜ艦偵が先行しないで編隊の後ろの方にいるのかというと、電探を積んでいるためにわざわざ小編隊で前方の危険な空域を偵察する必要がないのと、編隊を後ろから指揮するためであるからだ。つまり、艦偵が索敵と編隊の指揮を兼ねるのだ。

このため、合同訓練を一度もやったことがない部隊が共同攻撃をしても、ある程度は統率が取れるというメリットがある。

単独で飛行しているために艦偵が危険にさらされる可能性もないことはないが、陣風よりも早い彩雲が撃墜されることはまずないだろう。

そういうわけで、この方式は帝國軍で正式に採用されることとなったのだ。

だが、もちろん欠点もあり、それは彩雲の電探の使用には相当な熟練を要す事である。

なぜなら、電探の表示方式が現代の戦争映画に見られるような円形の画面のＰＰＩスコープ表示方式ではなく、Ａスコープ表示方式であるからだ。

ここからは少々専門的になってしまうが、Ａスコープとは縦軸に電波強度、横軸に時間を取ったオシロスコープに波形を表示（心電図のようなイメージ）させることにより、強度が最も大きい反射波が戻ってくる時間から対象物までの距離を読み取る方式である。

レーダー送信機の方向は別に表示されていたため、他方向に多数の対象物が存在する場合、一覧する事が出来ないという欠点があるのだ。

そのため、偵察機の電探操作員には熟練した技術が必要とされ、優秀な人材が優先的に回されているのだ。

さて、各母艦から発艦した攻撃隊は進路を北に向ける。
編隊が鳥島上空に差し掛かったころ、全機反転して先ほど発艦した母艦に向かう。
ここから攻撃演習が始まるわけである。

一方、母艦では戦闘機を発艦させて上空に待機させる。
数刻後、艦隊の電探は先ほど発艦させた攻撃隊を探知し、すぐに直衛戦闘機を『敵』攻撃隊に向かわせる。
やがて、母艦側の正確な誘導により直衛隊は敵攻撃隊を肉眼で発見する。

攻撃隊の方も艦偵の電探で艦隊を探知すると、その方向へ編隊を誘導する。
そして、比較的練度が高い『翔鶴』『瑞鶴』『宝鶴』『錦鶴』の戦闘機隊を制空に向かわせ、残りを艦爆と艦攻のすぐ上に配置して護衛させる。
艦爆と艦攻は、防御砲火を集中させるために編隊を緊密にする。
制空隊にいる彼方は、やがて現れるであろう直衛隊を見つけるため、前方に目を凝らす。

《こちら『慧龍』偵察機。敵直衛隊は前方約3万メートルで高度はほぼ同じだ。
もうすぐそちらでも発見できるだろう。健闘を祈る。》

偵察機から情報を得てしばらくすると、前方にいくつか光点が見えてきた。
彼方はすぐに無線機を送信状態にして編隊全機に報告する。

「こちら、山城一番。前方2万5千に敵編隊を発見。数は５０以上。高度はこちらが若干高い模様。」

彼方はすぐに無線機を受信状態に戻す。

《菅野一番了解。全機さらに高度を上げろ。》

制空隊隊長である菅野少佐が、編隊全機に指示を出す。

制空隊はさらに高度を上げ、現在は6千メートルである。
敵は、こちらに合わせて高度を上げる編隊と、そのまま攻撃隊に襲い掛かろうとする編隊に分かれた。
それでも、敵は下のほうに見えており、こちらの方が高度は高いようだ。

《菅野一番より全機へ。そろそろ酸素マスクをつけろ。》

菅野少佐が酸素マスクの着用を指示する。
この高度では酸素が薄くなり、酸欠で気絶するのを防ぐためだ。
彼方はマスクを着用しつつ、敵編隊を見る。
彼我の距離はもう1万メートルを切っており、機体の形がはっきりと見える。

やがて、3千メートルくらいに近づいたとき、敵編隊は高度の取り合いをあきらめたのか、次々と翼を翻して降下してゆく。

《こちらも降下するぞ！全機増槽を投下、俺に着いて来やがれ！》

それを聞いた味方編隊は一斉に増槽を投下し、一糸乱れぬ編隊機動で敵編隊を追う。
敵は降下で気速がついたところで分隊ごとに散開し、上昇して味方に迫る。

味方も分隊ごとに別れ、それぞれ敵を狙う。
彼方も照準器内に敵を入れて機銃の発射スイッチを押す。
機銃からは何も出てこないが、ガンカメラが敵の姿を捉える。
その後、一瞬で敵味方が交錯する。
彼方は今の攻撃に確かな手ごたえを感じた。

《菅野一番より全機へ！『宝鶴』隊、『錦鶴』隊はこのままこいつらの相手をしろ！
『翔鶴』隊と『瑞鶴』隊はそのまま俺に続け！》

『宝鶴』隊と『錦鶴』隊は反転上昇して再び敵編隊に襲い掛かり、他はそのまま降下する。
やがて、彼方は下の方に先ほど別れた敵編隊がいるのを見た。

《ようし、予想通りだ……全機このまま敵を攻撃しろ！》

菅野少佐に率いられた味方は、そのまま制限速度ぎりぎりで降下を続ける。
下にいた敵はこちらの攻撃に気づいたようであわてて左右に散開する。
彼方は再び照準器を覗き、敵機をその中に入れて、ガンカメラを作動させる。

一機『撃墜』確実だ。

敵編隊を突っ切った後、味方は分隊ごとに散開しながら、すぐさま上昇して先ほどの敵編隊に襲い掛かる。
未だに体勢が整ってなかった敵は、勢いがついている味方の攻撃をモロに受けることとなった。
再び彼方は敵機を『撃墜』し、他の機に襲い掛かる。

彼方が狙ったのは『翔龍』所属のマークを付けた機だった。
しかも、その機には戦闘機隊隊長を示すマークが付いている。
彼方は一瞬だけ後ろを確認し、敵機がいないのと佐東二飛曹が着いてきてる事の確認する。

まずは後ろの機から始末するために彼方たちは後下方から忍び寄る。
彼方が死角から近づいたため、その機は全く回避行動を取る様子がない。

その敵に１００メートルくらいに近づいた時、彼方はいやな予感がして咄嗟に左に機体を滑らせる。
その数秒後、敵機が彼方のすぐ横をすり抜けて降下していくのが見えた。

くそっ、今のは囮か。
さすがは戦闘機隊隊長直属の小隊だな。
統制が利いている。

彼方は一瞬そう思い、機体を増速させてすぐに先ほど狙っていた敵機を追う。
先ほどの敵機も今度ばかりは回避行動を取る。
だが、彼方はそれを照準器内に収めて『射撃』する。
それを数秒続けていると、敵機は諦めた様にバンクを振り、降下する。

よし、残るは隊長機だ！

彼方は隊長機に狙いを変更し、襲いかかろうとする。
だがその時、無意識に索敵をしていた眼が敵機を捕らえた。

こいつはヤバイかな、と思いながら彼方が後ろを振り向くと、既に佐東がその敵機を攻撃しに行った後であった。

彼方は佐東に心の中で礼を述べると、全速力で隊長機を追った。
だが、敵もさすがに隊長なだけあって回避運動にキレがあり、彼方を中々射線に付けさせない。
彼方は敵の動きを先読みしたかのように回り込み、次第に距離を詰めてゆく。
そして彼方は満を持して敵を『撃つ』。

数秒後、敵はバンクを振って降下していった。

彼方は佐東の方を見ると、彼は苦戦しながらもどうにか堕とされてはいないようだ。
敵機は佐東を追うのに夢中で、彼方の存在は忘れ去られているようだ。
彼方は敵の後下方から敵機に忍び寄る。
敵は距離が１００メートルを切ったところで、ようやく彼方に気づいたようで、ばらばらに逃げ始める。
彼方は位置的に悪かった機を無視して、近くにいた機を追尾する。
その際に後方を確認する。
敵がいないことを確認した彼方はひたすら敵機を追い詰める。
敵機はとうとう上に旋回し、巴戦に持ち込んできた。
彼方はもちろんそれを受けるつもりだ。

一回、二回、三回・・・

彼方も敵も必死で旋回を続ける。
両者は襲いくるＧに耐えながら、敵が諦めるのを待つ。

四回目になると、両者は遠心力で全身の血液が下半身に集中してきて、視界がだんだんぼやけてくる。

五回目。
両者はそろそろ体力的には限界に近づいてくる。
あとは気力と忍耐力の勝負だ。
敵機はまだ上のほうに見える。

六回目。
両者はもう気力だけで操縦桿を引いている。
だが、ここで両者に差が生まれる。
本当の限界を知っている彼方に対し、経験の浅い相手はもうここらが限界だと思い始める。

そして、七回目。
ついに我慢の限界がきた敵機は旋回を止め、違う動作に移ろうとする。

（もらった・・・！）

彼方はその動作を見逃さず、敵機を『撃つ』。
敵機はバンクを振り、降下する。
それを見届けた彼方は、周りを見渡してみると佐東がいつの間にか二番機の位置にいた。
彼がガッツポーズをしているのを見ると、先ほどの敵機を落としたらしい。

彼方はふと下を見ると、回避運動を取る艦隊の姿が目に入った。
艦爆は中高度から、艦攻は海面スレスレの超低空から同時に空母や駆逐艦に襲い掛かる。

狙われた艦は必死に回避運動をする。
彼方はそれを一瞥した後、再び敵の中へ向かう。

その後、彼方がさらに４機ほど『撃墜』したころ、偵察機から無線で《空戦止め、全機集まれ》と送られてくる。
彼方は、空戦をほどほどで切り上げて指定されている集合場所に向かった。
そこでは多数の機が入り乱れており、自分の編隊を見つけるのに苦労しそうな状況だった。
だが、彼方は運良く菅野の機体を見つけると、それと合流するために近づく。

菅野の横に行くと彼が手信号で《何機落とした？》と聞いてきたので、彼方は《１１機落としました》と答えた。
すると、菅野はニヤリと笑うと《俺は１３機だ》と送ってきた。
彼方はそれに参りましたという仕草で返す。

周りを見ると大分そろってきたようなので、菅野との会話を切り上げて本来の位置に戻る。
三番機の笹原（ささはら）　雄二（ゆうじ）一飛曹がこちらに手を振ってくる。
手をが振り返すと、彼は少佐と同じように今日の首尾を聞いてくる。
彼方は先ほどと同じ答えを返すと、彼はかないませんよ、といった仕草をして指を９本立てた。
彼方が彼に何か返そうとすると、《行方不明はないか？》と偵察機から通信が入る。
しばらくの間、無線には言葉が流れない。
《よし、全機揃っているな。それではこれより帰投する。》
全機の無事にほっとしたような声で指揮官が言う。

攻撃隊はすぐに艦隊上空にたどり着くと、母艦は艦首を風上に向け

て全速で航行している。
まずは空戦訓練で燃料を大量に消費した戦闘機から着艦する。
彼方の着艦は五番目だ。

まずは戦闘機隊の隊長である菅野が着艦する。
彼はは見事なアプローチを見せて、後ろから三番目の制止索にフックを引っ掛けた。
他の機も次々と着艦してゆく。
いよいよ彼方の番だ。

彼方は気速を落としながら艦の周りを旋回し、艦尾からアプローチに入る。
そしてフックを出して艦尾をパスする前に機首を上げて失速させ、制止索にフックを引っ掛ける。
彼方は急に後ろから引っ張られる感覚と、機体が接地する衝撃で着艦が成功したことを知る。
整備兵が急いで近寄ってきてワイヤーを巻き取り、元のように戻す。
そして、前方の制動索を倒して彼方の機体を前に押し、また制動索を立てて次の着艦に備える。
彼方はようやく機体から降りて艦橋へ向かう。
そのには菅野少佐のほかに、既に着艦を済ませた直衛隊の搭乗員や留守番だった搭乗員が集まっていた。
彼方はその輪に入って直衛隊の瑞鶴隊隊長であった久瀬少佐の話を聞くことにした。

「まったく、七航戦や八航戦の搭乗員はヘタクソばかりだな。
回避運動もロクに取れないし、挙句の果てに無理な動作をするから、こっちはいつ空中衝突をするかヒヤヒヤしたぜ。」

と久瀬少佐は不満げに漏らしている。

「まあまあ、それはしょうがない。
近頃はベテランだけでなく速成訓練だけでこっちに送られてくる搭乗員が多いからな。
うちはともかく、新米が多い『仙龍』や『慧龍』では着艦事故が多い、と知り合いの隊長が嘆いていたよ。」

菅野少佐がやれやれ、という風に肩をすくめながら言う。

「何っ、あの基地も同然の広い空母でか！
まったく、トラックに着いたら思いっきりしごいてもらわないとな。」

と久瀬が呆れたように言う。

「おっ、彼方か。お前は今日何機墜としたんだ？」

彼方に気づいた久瀬が話しかける。

「今日は１１機ですね。今日は『幻龍』の戦闘機隊隊長を１機墜としました。」

と彼方は答える。

「はぁ、負けたよ。俺は９機だ。ったく、直衛隊長が『幻龍』の山崎だったばかりに今日は惨敗だったよ。
俺たちの隊だけでも上に上がらせればいいものを、あいつは『編隊の統率が大事だ』とか言って全機が集まるまで高度を上げなかったんだ。
まあ、その結果がこれだからな。」

久瀬は自嘲気味に笑った。
「まあ気にするな。いちおう訓練の名前が付いているが、所詮ただのお遊びに過ぎないさ。
実戦はこんなもんじゃないからな……」
菅野が懐からタバコを取り出しながら呟いた。
その言葉に久瀬と彼方は黙って頷いた。
菅野がタバコに火を付けようとした瞬間、唐突に後方から異音が聞こえてきた。
何事かと搭乗員たちが音のした方向を見てみると、『慧龍』の飛行甲板から煙が立ち上っている。
どうやら着艦事故を起こしたらしく、一機の『陣風』が燃えていた。
搭乗員が中から急いで脱出して機体から離れた後、整備兵たちがやって来てすぐに消火ポンプを持ってきて消火を開始する。
『慧龍』の艦橋では手旗信号や、発光信号で着艦中止を打っている。
しばらくすると、『慧龍』の上空で待機していた機は他の母艦のところへ行き、そこで着艦を待つために旋回している。
『慧龍』の飛行甲板が使用できないため、他の艦に着艦させるようだ。
事故を起こした機体は訓練で燃料をほとんど使い果たしていたのが幸いしたのか、火は数分で消し止められ、整備兵が機体の残骸を処理している。
「ほら、言わんこっちゃない。」
と菅野が呆れたように言う。

「まったくだ。ったく、当分の間は飛行訓練は中止だろうな。今度は死人がでるぞ。」

久瀬もそれに頷きながら言う。

「おい！久瀬、菅野！さっさと報告を済ませろ。艦長が待ってるぞ。」

後ろから声が聞こえてきたので彼方が振り向くと、艦爆隊隊長の阪（さか）元馨（もとかおる）少佐であった。

「はいよ～、今行くから。まったく、中隊長なんて面倒くさい役職は嫌だぜ。」

と菅野はブチブチ言いながら艦橋に向かう。

「おい、あとで待機室で上映会やるからな。ヒトナナマルマル（午後5時）までに来いよ。」

久瀬がそう言って菅野の後を追う。
搭乗員たちはそれを聞いて、それぞれ散っていった。
彼方は時計を見ると時間まであと30分ほどあったので、とりあえず防空指揮所に向かうことにした。

彼方が防空指揮所に着くと、そこには瑞鶴が立っていた。

「やあ、瑞鶴。さっきもここにいたよね。」

彼方が話しかけると瑞鶴はコクリと頷く。
だが、彼女は彼方の方を向くわけでもなく、『瑞鶴』の艦首を見つ

め続けている。

「瑞鶴、どうしたんだい？」

彼方が聞くと、瑞鶴は首を振って何でもないと答える。

「そっか……」

彼方はそれっきり黙ってしまった。

二人の間に沈黙が流れる。

「……そろそろ行かないと。姉さんたちが待ってる。」

瑞鶴は唐突にそう言って『慧龍』の方を見る。

「この後何かあるのか？」

彼方が瑞鶴に聞く。

「……今日の反省会。たぶん慧龍が荒れると思うけど。」

瑞鶴はしょうがないな、といった風に言う。

ちなみに他人から見ると彼女の表情は全く変わっていないようだが、

彼方には彼女の微妙な変化が分かるのだ。

「そうか。頑張ってこいよ。」

彼方は瑞鶴の肩にそっと手を置いて言う。

「……うん。それじゃ。」

瑞鶴は頷いて光に包まれて消える。
彼方はそろそろ時間なので待機室に向かうためにラッタルを降りていった。

待機室に行くと、気の早い連中が既に上映会を始めていた。
フィルムはちょうど『幻龍』の所属機が追い回されているところだ。
『幻龍』機はしばらく後ろにつかれたままだった後、バンクを振って降下した。
そこで映像が途切れたのでどうやらフィルムはそこで終わったようだ。
場内に拍手が湧く。

「どうだ、凄いだろ。まあ、俺にかかればあれくらいは楽勝さ。」

菅野が得意げに言っている。
どうやら今のは菅野のものだったらしい。

「さっきのはおかしいんじゃないか？撃墜の規定の三秒を達してないように思えるが。」

久瀬が横から言ってくる。

「ふん、負け犬はそこで吠えてろ。」

菅野は得意そうに言う。

「む・・・まあ、実戦でのスコアは俺のほうが上だからな。今回はたまたま調子が悪かっただけさ。」

久瀬が痛いところを突いてくる。
菅野の公式撃墜スコアが９機なのに対し、久瀬は１２機である。
久瀬は普段からそれをネタにして菅野をからかっていた。

「少佐、今はその時期ではないですよ。」

彼方は小声で菅野に釘を刺しておく。

「ぐっ…わかってるよ。まっ、まあ空戦技術はお前より俺のほうが圧倒的に上だからな。
言い訳が言いたくなるのも当然か。」

菅野が引き攣った笑みを浮かべながら言う。
確かに一対一の空戦や中隊単位での指揮では菅野のほうが上手い。
それは久瀬も認めざるを得ないところだ。

「ふ、ふん。まあ、俺は貴様と違って防衛大を『首席』で卒業したからな。
これでも貴様とは脳みそのつくりが違うのさ。」

実は、久瀬は防衛大学校を首席で入学し、主席で卒業した秀才である。
本来は陸海空軍の内のどれかの司令部に参謀として勤めてから、統合参謀本部に勤めるはずである。
それなのになぜ実戦部隊にいるのかといえば、彼が単純に飛行機を操縦したかったからである。

「なんだと！てめぇ、やるか！」

菅野は痛いところを突かれて激昂する。
彼は決して成績が悪いわけではなかったが、それでも首席と比べるとどうしても格落ちしてしまう。

「おう、やってやろうじゃねぇか！」

久瀬も殴りあう気は満々だ。
二人は間合いを取って睨み合う。
気の早い兵たちはどっちが勝つか賭けをしている。

「菅野少佐、落ち着いて下さいっ！」

一人の長身の男が菅野を後ろから抑えつける。

「うるせぇっ！今すぐこいつを殴らせろ！」

彼方がよく見ると、その男は沢渡だった。
菅野は一生懸命振りほどこうとするが、悲しいかな身長の低い菅野は簡単に沢渡に取り押さえられてしまう。

「ふん、どチビが。部下に抑えられるとは無様だな。」

久瀬がさらに菅野を挑発する。

「ほらっ、少佐も挑発しないでください！」

久瀬を必死で止めているのは彼の小隊の二番機の酒井芳郎（さかい よしろう）二飛曹だった。
彼は柔道二段の猛者であるが、武道でも成績がよかった久瀬を押さえるので精一杯だ。

「放せっ！俺は前々からあいつを一度ぶん殴りたかったんだよ！」
久瀬は酒井をどうにか振りほどいて菅野に殴りかかろうする。
「おいっ、艦長だ！早く敬礼をしろっ！」
ちょうど久瀬が菅野を殴ろうかというときに誰かが大声を上げて入り口を指差した。
搭乗員たちはその先に艦長がいるのを見て慌てて敬礼をする。
「ほう、昼真っから喧嘩とは敢闘精神が溢れてようでよろしい。そんなに元気があるなら腕立て４００回は軽いだろう。なぁ、久瀬、菅野。」
橘はニヤニヤしながら言う。
「「はっ、はい！もちろんその通りであります！」」
久瀬と菅野が見事なユニゾンで答える。
「よし！お前ら二人はあと６００回追加だ！
なあに、心配しなくても大丈夫だ。俺がここで見てるから回数を間違える心配はないぞ。」
再び橘はニヤニヤしながら二人に死刑宣告を述べる。
搭乗員たち、特に二人はげんなりしたような顔をして腕立ての用意をする。
「よし、腕立て始めっ！いーちっ！にーっ！さーんっ！……」

こうして地獄の腕立ては始まった……

数十分後、待機室から出てきた面々――特に久瀬と菅野の二人――は疲れきったような顔をしていた。
なぜなら、２００回を過ぎたころに橘が途中で数え間違えたと言う理由で、回数をリセットしたのだ。
結局、搭乗員たちは腕立てを６００回行う羽目になり、菅野と久瀬にいたっては１２００回になってしまったのであった。

「痛たた……まったく、あいつのせいで散々な目にあったぜ……」

菅野が痛む腕を押さえながらぼそり、と愚痴を漏らす。

「なにぃ？それはこっちの台詞だぞ。貴様さえいなければ俺はこんな目にあわなかったんだろうが。」

それを聞いた久瀬が菅野に食って掛かろうとする。

「お前らまだそんな元気があるのか？なんなら次は腹筋９００回でどうだ？」

橘が後ろから二人に話しかける。

「「いえっ、結構です！！」」

そう言って二人は自室へ向かって我先にと走り出した。
それを周りの搭乗員は笑って見ている。
彼方もその光景を見て久しぶりに大笑いしていた。

所変わって、ここは東京の市ヶ谷である。
ここには１９１０年に陸海軍省を合併してできた防衛省の他に、近衛第三連隊の駐屯地がある。
その防衛省の廊下を士官服を着た一人の男が走っていた。
彼は『大臣執務室』と板が張ってある部屋の前に着き、乱暴にドアを開ける。

「大臣っ！アメリカ外務省より文書が届きました！」

「何だね？」

そう言って振り返ったのは防衛省の大臣である米内（よない）　光政（みつまさ）である。
彼は海軍の出身で、米英の事情に明るく、平和主義者と呼ばれている人である。
そのために軍の一部の強硬派からは疎まれているが、国民には比較的人気が高い。
その彼は、男から紙を受け取ると中を読み始めた。
彼が読むにしたがって、次第に手が震えてゆく。

「おい……これは本当か？」

米内は声を絞り出すようにして男に問いかける。

「はい、間違いありません。先ほど外務省宛にこの電報が届きました。」

それを聞いて米内は沈痛な顔になる。
しばらく黙ったままだった彼は、顔を上げて静かに言った。

「そうか。なるべく米国とは戦いたくはなかったがな……よし、天皇陛下にこのことを伝えるとともに、戦時体制を発令しろ！」

男は敬礼すると、元来た道を戻っていく。

米内は大臣室のソファに座ると頭を抱えた。

「クソッ……。山本さん、井上君、君たちの努力は残念ながら無駄だったようだ。

やはりアメリカは開戦を望んでいたんだ……

残念ながら俺にできるのは早く戦争が終わるのを願うだけだ……」

そう言って彼は静かに泣いていた。

このアメリカが送った文書は後にハル・ノートと呼ばれ、後に日米開戦への重要なターニング・ポイントと位置づけられるようになる。

こうして日本はついに開戦を決意するのであった……

第七章「訓練、そして・・・・」（後書き）

霜月「ども、現在口内炎が三箇所できている霜月です。ようやく、本当にようやく第七章をあげました。」
宝鶴「遅いっ！」
バキッ！
霜月「ううっ、殴るなんてひどいじゃないですか！」
三笠「前に一週間以内に仕上げるとか言っておいて結局１０日もかかったじゃない。」
霜月「それは、ネタ切れ・・・もとい！内容を熟考していたのであります！」
宝鶴「ぽろっと本音が出たわね・・・で、次はさすがに早く上がるわよね。」
霜月「はい、もちろん。明日までには仕上がる予定です。」
三笠「大見得きって大丈夫なの？絶対五日ぐらいかかりそうな気がするけど・・・・・」
霜月「もちろん！設定は完璧に仕上げてますから！」
宝鶴「そうやってどうでもいい設定を作る暇があったらさっさと本編書きなさいよ！」
霜月「うぐっ・・・まっ、まあそれは置いておいて次の次はいよいよトラックに到着ですね。ここから加速度的に艦魂が増えてややこしくなりそうですが・・・・・」
宝鶴「そこはあんたが何とかしなさいよ。作者なんだし。」
三笠「いや～実は作者はまだキャラの設定を殆ど考えていないのよ。」
宝鶴「死刑確定ね・・・覚悟はいいかしら？」
三笠「そういえばわたしの出番は？」
霜月「そのうち外伝書く予定ですから！」
三笠「予定ね・・・予定は未定だよね。」

霜月「ちょっ、ちょっと待ってくださいよ！宝鶴さんに三笠さん、その手に持っている釘バットはだめっ・・・・！」
《しばらくお待ちください》
宝鶴「はぁっ・・・・はぁっ・・・・」
三笠「ふぅ・・・すっきりした。」
宝鶴「次回は予告どおり兵器とかその他の解説よ。つまんないかもしれないけど我慢しなさい。」
三笠「それじゃあ、これからも応援よろしくね～☆」

間章「帝國軍兵器紹介その１」

霜月「どうも、霜月です。遅ればせながらようやく解説を出すことができました。」
宝鶴「遅いっ！」
バキッ！
霜月「ぐはっ、すみません。完全に今のは僕が悪かったです。」
三笠「何だかんだ言ってまた公約破ったね。」
霜月「すいません、読者の皆様（土下座）。思ったより編集に手間取ってしまったので……」
宝鶴「言い訳無用っ！あんたの御託はどうでもいいからさっさと解説するのよ！」
霜月「わかりましたっ！では、まずは皆さんも疑問に思ったであろう、帝國の防衛省の概略・構成から解説していきます。」

・防衛省
防衛省は１９１０年に旧陸海軍が合併して作られた。海軍部・陸軍部・空軍部・士官大学校などの組織があり、それらを統合参謀本部が統括している。

・統合参謀本部
陸海空軍部を統括し、三軍を有機的に組み合わせた戦いができるようにするための組織。

・陸軍部
陸軍に相当。主に陸上の敵に対処し、災害時には即座に救援に向かう役目を負っている。

・海軍部

海軍に相当。連合艦隊と海上護衛総隊から成り立っており、前者は敵海上兵力の撃滅、後者はシーレーンの維持、沿岸警備を行う。

・空軍部

空軍に相当。各航空隊を指揮下に収める。空軍部の管轄下にある搭乗員養成学校では、有事の際に軍へ召集されるのを条件に、格安で航空機搭乗員の勉強を受けることができる。

霜月「とりあえず、こんなところでしょうか。次はいよいよお待ちかね、艦船と航空機の解説です！」

三笠「わ～い、どんどんぱふぱふ☆」

宝鶴「ようやくね。読者の皆さんもそのことについてずっと知りたいと思ってたはずだわ。」

霜月「う～ん。逐一解説するのもめんどいし、一括してやったほうが分かりやすいような気がしたので。」

三笠「確かに。逐一やると後でスペックが知りたいときにどの話か分からなくなるよね。」

宝鶴「それはいいからちゃっちゃと始めなさいよ。」

霜月「分かってますよ。それでは、まずは戦艦と空母の主力艦から始めたいと思います。」

・戦艦

金剛級

概要

第一次世界大戦前に計画された巡洋戦艦。

「ドレッドノート」の竣工により、当時帝國で建造されていた戦艦が一気に旧式化してしまったため、

同盟国であったイギリスに建造を依頼し、造船技術の取得を図った

ものであった。
そのため、一番艦をイギリスに発注し、設計図を購入し二～四番艦は自国で建造するという変則的な建造方式がなされた。
なお、一番艦『金剛』の艦魂の容姿がイギリス人なのはそのためである。
ジュットランド沖海戦での戦訓を元に改装され（第一次改装）、防御力が上がった代わりに、速度が下がったため、戦艦へ艦種変更された。
また、１９３４年にも大改装を行い（第二次改装）、船体の拡大・強化、ケースメイト式の副砲を全廃しての両用砲、機銃の増設、主砲の長砲身化、機関の換装、装甲板の張替えが行われた。

性能（開戦時）
武装
１４インチ砲４５口径連装４基８門
１０サンチ両用砲６５口径連装８基１６門
４０ミリ機銃４連装４基１６門
４０ミリ機銃連装４基８門
４０ミリ機銃単装２０門
３０ミリ機銃連装８基１６門
３０ミリ機銃単装２０門

速力
３３ノット

全長
２２５．６ｍ

艦幅
３２．４ｍ

搭載機数
水上機×２機

排水量
３万３千トン

同型艦
『金剛』
『比叡』
『榛名』
『霧島』

扶桑級
概要
帝國初の１６インチ砲搭載戦艦。
当初は１６インチ砲の搭載が予定されていたが、予想より開発が難航して実用化は当分不可能であることが判明したために、急遽１６インチ砲４５口径連装４基８門から１４インチ砲５０口径３連装４基１２門へ変更となった。
なお、扶桑級の砲塔は、１６インチ砲が開発されたら従来の砲塔と換装できるように設計されていたため、砲塔の換装だけで改装が済むようになっていた。
船体は元々１６インチ砲の搭載を予定していたために対１６インチ装甲に覆われ、
さらに注排水装置が多数設置され、防御力はトップクラスとなっている。
１９３７年に大改装され、主砲塔と機関の換装、防御力の強化、対空火器の増設、居住性の改善などが行われた。

性能（開戦時）
武装
１６インチ砲４５口径連装４基８門
１０サンチ両用砲６５口径連装１０基２０門
４０ミリ機銃４連装６基２４門
４０ミリ機銃連装８基１６門
４０ミリ機銃単装２８門
３０ミリ機銃連装８基１６門
３０ミリ機銃単装３２門

速力
３０ノット

全長
２６４ｍ

艦幅
３４．７ｍ

搭載機数
水上機×２機

排水量
４万１千トン

同型艦
『扶桑』
『山城』
『伊勢』

『日向』

長門級

概要

第二次艦艇補充計画で建造された戦艦。
忠実のアイオワ級に似ているが速力は劣り、防御や復元性はこちらのほうが上。
この艦で初めて傾斜装甲が採用され、防御効果が上がった。
ワシントン条約により、５，６番艦は空母に改装され、７，８番艦は廃棄された。
対空装備がほかの艦と比べて強化されているのが特徴である。
後に砲の長砲身化と機関の換装が行われた。

性能（開戦時）

武装

１６インチ砲５０口径３連装３基９門
１０サンチ両用砲６５口径連装１２基２４門
４０ミリ機銃４連装８基３２門
４０ミリ機銃連装１６基３２門
４０ミリ機銃単装２８門
３０ミリ機銃連装１２基６４門
３０ミリ機銃単装２２門

速力

３０ノット

全長

２５６ｍ

艦幅
３５．３ｍ

搭載機数
水上機×３機

排水量
５万３千トン

同型艦
『長門』
『陸奥』
『美濃』
『因幡』
『土佐（空母へ改装）』
『加賀（空母へ改装）』
『肥後（建造中止）』
『浪速（建造中止）』

越後級
概要
ワシントン条約失効後に建造開始。様々な新機軸が搭載された。
１６インチ砲搭載艦ではあるが、対１８インチ砲用の装甲を備えたため、戦闘力では１８インチ戦艦にも対抗できた。
後に１８インチ砲に換装する計画があったが、開戦間近という事で見送られて実現しなかった。
開戦後は主力として重要な決戦には必ず参加し、戦局に多大な影響を与えた。

性能

武装

１６インチ砲５０口径３連装４基１２門

１０サンチ両用砲６５口径連装１４基２８門

４０ミリ機銃４連装１２基４８門

４０ミリ機銃連装２０基４０門

４０ミリ機銃単装３２門

３０ミリ機銃連装１６基３２門

３０ミリ機銃単装３０門

速力

３１ノット

全長

２８０．３ｍ

艦幅

３７．６ｍ

搭載機数

水上機×４機

排水量

６万２千トン

同型艦

『越後』

『播磨』

『安芸』

『伊予』

・正規空母

土佐級正規空母

概要

ワシントン条約で廃棄されることとなった長門型戦艦の５，６番艦を空母に改装したもの。

機関が強化されて、長門級よりも速力が上がっている。

舷側装甲は大鳳級より厚い。アイランド式艦橋を採用。

開戦後は常に機動部隊の主力として太平洋を縦横無尽に駆け巡った。

性能

武装

１０サンチ両用砲６５口径連装８基１６門

４０ミリ機銃４連装１０基４０門

４０ミリ機銃連装８基１６門

４０ミリ機銃単装１２門

３０ミリ機銃単装８０門

速力

３２ノット

全長

２８０．３ｍ

艦幅

３８．３ｍ

搭載機数
常用８４機＋補用１４機（戦３２（４）、爆２４（４）、攻２４（４）、偵４（２））
※カッコ内は補用機

排水量
４万７千トン

同型艦
『土佐』
『加賀』

蒼龍級正規空母

概要
ワシントン条約下の改マル二計画で建造した中型正規空母。
忠実の蒼龍級とほぼ同じであるが、格納庫は開放式となっている。
大戦中は敵機動部隊との戦いのほかに、上陸支援、航空機輸送など様々な役割をこなした。

性能
武装
１０サンチ両用砲６５口径連装８基１５門
４０ミリ機銃４連装８基３２門
４０ミリ機銃連装８基１６門
４０ミリ機銃単装１２門
３０ミリ機銃単装７２門

速力
３４ノット

全長
２２２ｍ

艦幅
２２．４ｍ

搭載機数
常用６０機＋補用１２機（戦２４（３）、爆１６（４）、攻１６（３）、偵４（２））

排水量
１万７千トン

同型艦
『蒼龍』
『飛龍』

翔鶴級正規空母

概要
マル三計画で帝國が初めて建造した本格的な大型正規空母。
それまでの実験や運用で生まれたノウハウをすべてつぎ込んで建造された。
搭載機数は後の艦に比べて若干少なめだが、終戦まで第一線で活躍

した。

性能

武装

１０サンチ両用砲６５口径連装８基１５門

４０ミリ機銃４連装８基３２門

４０ミリ機銃連装８基１６門

４０ミリ機銃単装１２門

３０ミリ機銃単装７２門

速力

３５ノット

全長

２５７．５ｍ

艦幅

２６．０ｍ

搭載機数

常用７６機＋補用１０機（戦３４（２）、爆２４（３）、攻１６（３）、偵４（２））

排水量

２万５千トン

同型艦

『翔鶴』

『瑞鶴』

『宝鶴』

『錦鶴』

幻龍級正規空母

概要

ワシントン条約失効後のマル四計画で建造、翔鶴級と比べかなり大型になっている。
日本空母では初のエンクローズドバウとカタパルトを採用。
米軍のヨークタウン級空母とはライバル的存在である。
開戦後は土佐級とともに主力空母として活躍した。

性能

武装

１０サンチ両用砲６５口径連装８基１６門
４０ミリ機銃４連装１０基４０門
４０ミリ機銃連装８基１６門
４０ミリ機銃単装１２門
３０ミリ機銃単装８０門

速力

３５ノット

全長

２７８ｍ

艦幅

２８．９ｍ

排水量
３万１千トン

搭載機数
常用８４機＋補用２８機（戦３２（６）、爆２４（１０）、攻２４（１０）、偵４（２））

同型艦
『幻龍』
『翔龍』
『仙龍』
『慧龍』

大鳳級正規空母

概要
我が國初の装甲飛行甲板を持った空母。
そのために格納庫が一段しか設置できないので、艦体を大きくすることで対処した。
旗艦設備に優れており、主に機動部隊の旗艦となることが多かった。
以前の艦に比べ、レーダー、通信設備の増強、ＣＩＣの設置など多岐にわたる改良が行われている。

性能
武装
１０サンチ両用砲６５口径連装８基１６門
４０ミリ機銃４連装１０基４０門
４０ミリ機銃連装８基１６門

４０ミリ機銃単装１２門
３０ミリ機銃単装８０門

速力
３５ノット

全長
２９７．８ｍ

艦幅
３５．６ｍ

搭載機数
常用７６機＋補用１４機（戦３２（４）、爆２４（４）、攻１６（４）、偵４（２））

排水量
４万２千トン

同型艦
『大鳳』
『稜鳳』
『蒼鳳』
『准鳳』

霜月「以上で主力艦の説明は終わりです。」
宝鶴「なんか、後の方になるにつれて説明が雑になっていくわね・・・・」

三笠「最初は気合入ってたけど、後のほうになってめんどくさくなった、っていう典型的なパターンね。」
霜月「うぐっ、これを何十とやる身にもなってくださいよ。」
宝鶴「はいはい。作者はほっといて、次は巡洋艦以下の艦艇ね。作者の都合により、当面出てくることがないのは乗せないわ。」

・巡洋艦
朝日級重巡洋艦

概要
第四次艦艇補充計画により建造された重巡洋艦。
高雄級よりも兵装が大幅に強化されており、防空能力も高い。
主に機動部隊や戦艦の護衛で活躍した。

性能
武装
８インチ砲５６口径３連装４基１２門
１０サンチ両用砲６５口径連装８基１６門
４０ミリ機銃連装１６基３２門
３０ミリ機銃単装３０門

速力
３３ノット

全長
２０５．４ｍ

艦幅
２２．１ｍ

排水量
１万３千９百トン

搭載機数
水上機×３機

同型艦
１２隻

長良級軽巡洋艦

概要
マル三、四計画で建造された軽巡洋艦。
旧式化した天龍級の代艦の必要性や、駆逐艦の大量建造により水雷戦隊の数が増え、
それの旗艦用の軽巡が必要とされたために、１２隻という大量の艦が建造された。
また、この型から砲力が重視されたために魚雷は搭載していない。

性能
武装
６インチ砲５２口径３連装４基４門
８．８サンチ７２口径高角砲単装４基４門
４０ミリ機銃連装４基８門
３０ミリ機銃単装１６門

速力
３６ノット

全長
１６８．３ｍ
艦幅
１６．５ｍ
排水量
６千５百トン
搭載機数
水上機×２機
同型艦
１２隻

吉野級防空巡洋艦

概要
第四次艦艇補充計画で建造された防空巡洋艦。
後に改良型である米代級が２４隻建造された。
航空機の脅威から艦隊を守るために、対空火器を多数装備している。
大戦中は専ら機動部隊の護衛に使われ、航空攻撃から艦隊を守った。

性能
武装
１０サンチ両用砲６５口径連装８基１６門
４０ミリ機銃連装８基１６門
４０ミリ機銃単装１２門
３０ミリ機銃単装１６門

速力
３６ノット
搭載機数
水上機×１機
全長
１６５．４ｍ
艦幅
１７．６ｍ
排水量
６千５百トン
同型艦
『吉野』
『四万十』
『常願寺』
『九頭竜』
『五ヶ瀬』（ごかせ）
『琵琶』
『揖斐』
『十勝』

・駆逐艦

長月級汎用駆逐艦

概要
第三次艦艇補充計画で建造された一等駆逐艦。
艦隊型汎用駆逐艦の第二弾で前級の秋月級と比べて武装に変更はないが、船体が大型化したため、航続力と居住性が改良された。
大戦中では、神風級とともに様々な任務について活躍した。

性能
武装
１０サンチ両用砲６５口径連装３基６門
６１サンチ魚雷四連装２基８門
４０ミリ機銃連装４基８門
４０ミリ機銃単装１０基１０門
３０ミリ機銃単装１０基１０門
零式対潜用爆雷投射機２基

速力
３７ノット

全長
１２０．１ｍ

艦幅
１０．６ｍ

排水量
２千トン

同型艦
２４隻

綾波級汎用駆逐艦

概要

第四次艦艇補充計画で建造された大型汎用駆逐艦。
大型であるためにバランスがとれており、航続距離、居住性が良好で、乗員からも好評だった。
また、その重武装は軽巡に匹敵し、水雷戦で米駆逐艦を圧倒することが期待された。
本級は、本業である水雷戦のほかにも、艦隊の護衛、上陸支援など多岐にわたる任務をこなした。

性能

武装

１０サンチ両用砲６５口径連装４基８門
６１サンチ魚雷４連装１基４門
４０ミリ機銃連装４基８門
４０ミリ機銃単装１２基１２門
３０ミリ機銃単装１０基１０門
零式対潜用爆雷投射機２基

速力

３８ノット

全長

１３９．４ｍ

艦幅

１２．０ｍ

排水量
２千８百トン

同型艦
３６隻

朝霜級

概要
第一次マル急計画で建造された中型汎用駆逐艦。
長月級をベースにして構造を徹底的に簡略化して、船体を可能な限り直線化するなどの工期の短縮を図った。
そのため、速力は落ちたが平均で一隻あたり４ヶ月で竣工された。
また、本級にはブロック工法が採用され、迅速な建造・修理が可能になった。
航続力がやや不足気味であったため、予定されていた２５０隻のうち５６隻のみの建造となった。

性能
武装
１０サンチ両用砲６５口径連装３基６門
６１サンチ魚雷四連装２基８門
４０ミリ機銃連装４基８門
４０ミリ機銃単装１０基１０門
３０ミリ機銃単装１０基１０門
零式対潜用爆雷投射機２基

速力

３４ノット

全長
１２０．２ｍ

艦幅
１０．６ｍ

排水量
２千トン

同型艦
５６隻

夕雲級防空駆逐艦

概要
第四次艦艇補充計画で建造された艦隊型防空駆逐艦。
朝潮級の改良型で船体が大きくなり、航続距離・居住性が改善された。
大戦中は殆どを機動部隊の護衛として過ごした。

性能

武装
１０サンチ両用砲６５口径連装４基８門
４０ミリ機銃連装８基１６門
４０ミリ機銃単装１４基１４門

３０ミリ機銃単装６基６門
零式対潜用爆雷投射機２基

速力
３７ノット

全長
１３４．６ｍ

艦幅
１２．１ｍ

排水量
２千３百トン

同型艦
２４隻

宝鶴「とりあえず、巡洋艦以下の艦艇はこれだけのようね。」
霜月「はい。他にもありますが、今はこれだけにしておきます。」
三笠「次はいよいよ航空機ね。」
霜月「そうですね。帝國は忠実よりも技術が上なので、航空機は大体昭和１８年前後の性能となっています。」
宝鶴「わかってると思いますが、ここに出てくる航空機・発動機などはすべて架空のものです。」

・艦上戦闘機

一式艦上戦闘機『陣風』

概要
太平洋戦争前中期の主力艦上戦闘機。
それまでの艦戦と違い、航続力・武装が強化されている。
防弾タンクや操縦席背部の防弾装甲を装備し、打たれ強い戦闘機になっている。

性能（２２型）
武装
１２．７ミリ機銃×６　３０ｋｇ爆弾×２
発動機
ハ－１２６－１型（二段三速）空冷１８４０馬力×１
最高速度
６１１ｋｍ／ｈ
航続距離
２３１０ｋｍ
上昇限度
１万１千７百メートル
製作会社
三菱重工

・艦上爆撃機
一式艦上爆撃機『彗星』

概要
九八式艦爆の後継機として開発され、引き込み脚を採用している。
急降下の際、高角砲の弾片による損害を減らすために、機体全体に
薄く装甲を張り、
コックピット前面の防弾ガラスを厚くした結果、連合軍のＶＴ信管
の採用にもかかわらず較的帰還率が高かった。
後継機の流星が出るまで第一線で活躍した。生産機数は約五千機。

性能（２２型）
武装
５００ｋｇ爆弾×１（胴体下）又は２５０ｋｇ爆弾×２（胴体下）
又は又は中型ロケット弾（胴体下）×１又は小型ロケット弾×１０
（主翼下）
１２．７ミリ旋回機銃（連装）×１

発動機
ハ－１２６－３型（二段三速）空冷１８８０馬力×１

最高速度
４７０ｋｍ／ｈ

航続距離
２０７０ｋｍ

上昇限度
８千９百メートル

製作会社
空軍航空技術廠

・艦上攻撃機

一式艦上攻撃機『天山』

概要

九七式艦攻の後継機として開発された機体。
エンジンを完全に他の機種と同一にしたことにより、量産し易い、整備の手間が省ける、などの利点があった。
乗員は２人であり、防弾装備は彗星と同じく弾片防御用の鋼板が機体前部に張られ、コックピットが防弾ガラスとなっている。

性能（２１型）

武装

１２．７ミリ固定機銃×２、１２．７ミリ旋回機銃単装×１
魚雷×１又は１０００ｋｇまでの爆弾又は大型ロケット弾×１（胴体下）
小型ロケット弾×６又は中型ロケット弾×４（主翼下）

発動機

ハ－１２６－１型（二段三速）空冷１８４０馬力×１

最高速度

４５２ｋｍ／ｈ

航続距離

２１９０ｋｍ

上昇限度

７千８百メートル

製作会社

中島飛行機

・艦上偵察機

一式艦上偵察機『彩雲』

概要

帝国海軍は航空決戦において、何よりも情報と速度が勝敗の鍵を握るということを中国戦線の戦訓や昭和十五年度演習で知った。

そのため、敵の早期発見、アウトレンジ、早期迎撃が重視された。

そこで、新開発の機載対艦・対空電探を搭載して、敵機動部隊の早期発見を目標とした本格的な艦上偵察機を開発した。

彩雲は当時、雷電を除いて世界最速であり、どんな戦闘機でも追撃はできなかった。

トラック沖海戦での「我ニ追イツクグラマン無シ」の電報は有名である。

さらに、開戦後には緊急用にロケット推進装置が搭載され、これにより生還率が格段に上がった。

他にも、機動部隊から発艦する攻撃隊の誘導や、簡易的ではあるが空中指揮など機動部隊にはなくてはならない働きをした。

性能（２１型）

武装

１２．７ミリ機銃×１

発動機

ハ－１２６－３型（二段三速、排気タービン付き）空冷１８８０馬

力×１

最高速度

６３７ｋｍ／ｈ

航続距離

４０５０ｋｍ

上昇限度

１万２千２百メートル

製作会社

中島飛行機

・陸上戦闘機

零式戦闘機（通称『零戦』）

概要

九六式戦闘機の後継機で、全太平洋戦争を戦い抜いた機体である。
九六戦の弱点であった航続距離の不足や、無線電話の不調の改善、
防弾装備のさらなる強化、
ＯＰＬ照準器の装備により、登場した時は世界最強の戦闘機となった。
さらに、世界初となる自動空戦フラップの搭載により格闘性能が向上した。
戦争序盤では敵艦戦のＰ４０などを圧倒していたが、その後出現する敵新型戦闘機に苦戦し、
後継機の電光が登場してからは、主に練習航空隊で使用された。
また、この機体から空中用小型無線発信機が搭載され、世界で初め

て空中指揮のシステムが実用化された。
各型合計で約一万二千機が生産された。
零戦の最多生産型の３２型はエンジンを新型のハ－１２６に換装、最高速度・航続性能・高高度性能などが良くなった。

性能（３２乙型）
武装
２０ミリ機銃×４、２５０ｋｇ爆弾×１（増槽なしの場合）、小型ロケット弾×４（主翼下）
発動機
ハ－１２６－１型（二段三速）空冷１８４０馬力×１
最高速度
５９８ｋｍ／ｈ
航続距離
１３１０ｋｍ（増槽なしの場合）２３２０ｋｍ（増槽ありの場合）
上昇限度
１万１千９百メートル
製作会社
日本重工

一式局地戦闘機『雷電』

概要
九七式局地戦闘機の後継機として開発された局地戦闘機。

最初から排気タービンを装備し、搭載機銃も新型になっている。
また、零戦と機体各所の部品が共用でき、量産性を高めている。
機体の安定性も九七局戦の反省をふまえ、十分考慮されている。
そして、発動機を重爆用で大出力のハ一１２２にしたことにより、
試作機で速度が６３０ｋｍ／ｈを超えるという高速機となった。
零戦と同じく自動空戦フラップを搭載し、翼面荷重が低い割に旋回
性能も良かった。
大戦初期から中期にかけて活躍し、「重爆キラー」と連合国軍から
恐れられた。
また、対戦闘機戦でも活躍し、敵艦載機の迎撃でも大きな戦果を挙
げた。
戦争後半になっても使われ、敵重爆や艦載機の猛攻から基地を守り
通した。

性能（１２型）
武装
３０ミリ機銃３型×２、１２．７ミリ機銃４型×２、小型ロケット
弾×６（主翼下）
発動機
ハ一１２２一３型（二段三速、排気タービン付き）空冷２１９０馬
力×１
最高速度
６３５ｋｍ／ｈ
航続距離
１１５０ｋｍ
上昇限度

１万２千５百メートル

製作会社

三菱重工

・中型攻撃機

一式中型攻撃機『風龍』

概要

九七式中攻の後継機で、開戦時の主力機。

戦闘機並の速度性能と抜群の防弾性能で搭乗員の損失は少なかった。

開戦時には第一次トラック沖海戦やマレー沖海戦で大戦果を挙げた。

性能（２１型）

武装

爆弾１．４ｔ又は魚雷一本、１２．７ミリ機銃×１２

発動機

ハ－１２６－１型（二段三速）空冷１８４０馬力×２

最高速度

５０３ｋｍ／ｈ

航続距離

２６７０ｋｍ

上昇限度

８千４百メートル

製作会社

日本重工

・戦略爆撃機

一式戦略爆撃機（泰山）

概要

開戦前に正式採用された四発戦略爆撃機。深山よりもエンジン出力が上がっており、防弾装備も自動消火装置が搭載されるなど強化されている。戦争後期では機体下部に防弾装甲を張り、機銃を多数搭載したガンシップ型や空中警戒機などに改造された。

性能（２１型）

武装

爆弾搭載量８．５ｔ、２０ミリ機銃×１４

発動機

ハ－１２２－３型（二段三速、排気タービン付き）空冷２１９０馬力×４

最高速度

５８８ｋｍ／ｈ

航続距離

４５００ｋｍ

上昇限度

１万２千２百メートル

製作会社

日本重工

・空中指揮機

一式空中指揮機『大洋』

概要

泰山の空中指揮型。管制官が１２名乗っており、機体上部のレドーム内に対空電探を装備しての敵早期発見、味方の誘導、空戦指揮を行った。

爆弾倉には燃料タンク・電源などが増設され、これにより元の機体より航続距離が伸びている。

性能（１２型）

武装

２０ミリ機銃×８、管制官１２名、電探１基、

発動機

ハ－１２２－３型（二段三速、燃料直噴式）空冷２１９０馬力×４

最高速度

５４３ｋｍ

航続距離

５３００ｋｍ

上昇限度

６千７百メートル

・早期警戒機

一式早期警戒機『東海』

概要

泰山の早期警戒機型。機体上部に大型のレドームを乗せ、広範囲を索敵することができる。開戦直後は配備数の少なさから敵の奇襲を度々許してしまったが、次第に数が増えるにつれ、そのようなことは少なくなっていった。太平洋戦争の影の功労者である。

性能（１２型）

武装

２０ミリ機銃×８、電探１基

発動機

ハ－１２２－３型（二段三速、燃料直噴式）空冷２１９０馬力×４

最高速度

５４３ｋｍ

航続距離

５３００ｋｍ

上昇限度

６千７百メートル

霜月「以上で今回の説明は終わりです。」

宝鶴「ご清聴ありがとうございました。」

三笠「さて・・・作者、ちょっとこっちに来て。」

霜月「あれ、何か鞭とかろうそくとかがあるんですけど……」
宝鶴「えっ、何言ってるの？あんたをお仕置きするためじゃない。」
三笠「今まで数々の公約を破ったんだから、これくらい罰があってもいいんじゃないの？」
霜月「ちょっ、やめっ！ぎゃぁぁぁぁっっ！」
宝鶴「あっ、こんなところにスタンガンが。（ニヤリ）」
三笠「わたしもいつの間にか焼け火箸が手にあったわ。（ニコッ）」
宝鶴「それでは、ご意見・ご感想お待ちしています。」
三笠「さて、作者を虐めますか☆」

第八章「トラック到着、アメリカの陰謀」（前書き）

試験後久々の投稿です。

本編が少なめなのであとがきの文量を少々増やしました。

更新のほうは一月いっぱいまで部活が忙しいので、しばらくやらないと思います。

本当にすみません。

《登場人物紹介》

「久瀬（くぜ）　康弘（やすひろ）」

所属

瑞鶴空戦闘機隊隊長

階級

海軍少佐

年齢

２６歳（１９４１年１２月１日現在）

誕生日

８月１２日

瑞鶴航空隊の戦闘機隊隊長。

軽そうに見えるが、実は現実主義者であり、時たま冷酷な一面も見せる。

防衛大学では主席卒業で、緋村とは同期。

彼との関係は本人曰く『腐れ縁』。

以前、ドイツへ軍事関係で留学していたことがある。

第八章「トラック到着、アメリカの陰謀」

『ハル・ノート』
それは昭和１６年１１月２６日に、コーデル・ハル米国務長官から渡された文書である。
以下にその内容の一部を記す。

・真珠湾燃料タンク爆破事件を帝國の工作と認め、賠償金を払う
・帝國の中国大陸からの即時撤兵
・帝國の遼東半島などの中国大陸の権益の完全放棄
・米国の支援する南京国民政府（汪兆銘政権）以外の中国に存在する政府を認めない
・米国による帝國の資産凍結を解除、帝國による米国資産の凍結の解除
・円ドル為替レート安定に関する協定締結と通貨基金の設立

これを見れば分かるとおり、『ハル・ノート』は米国からの最後通牒であった。
当然、これらの要求を帝國が呑むはずも無く、これを契機に反米運動が激化。
帝國は貴族院と衆議院で対米開戦を問うたところ、両院とも満場一致で開戦を決議した。
そのため、日米の対立は決定的になり、後に日米開戦の一大要因といわれるものであった。
そして、日本時間の１２月８日午前４時。
帝國は米国に戦線を布告したのであった……

トラック環礁はマリアナ諸島の南に位置し、『東洋のジブラルタル』

と言われるほどの要衝で、帝國軍の主要な根拠地の一つである。
現在トラックの泊地には、第二艦隊の先発隊とトラック守備艦隊の他に、数十隻の輸送艦やタンカーが停泊していた。
一方、地上に目を移してみると、滑走路や燃料タンクなどの拡張工事が急ピッチで進められており、開戦が間近に迫っていることを暗示させている。

そして、この日ようやく第二艦隊の後発隊が到着して、トラックの兵力はさらに増える事となった。
現在、第二艦隊の旗艦である『長門』の艦上では、艦魂の着任式が行われている。

「気をつけっ！第二艦隊司令に敬礼っ！！」

ビシッ！！

後発隊の全艦魂は一斉に長門に向かって敬礼する。

「ご苦労様、楽にしていいわ。遠路はるばるお疲れ様。
早速だけど、いいニュースと悪いニュースがあるんだけど、どっちから聞きたい？」

「じゃあ、悪いほうから。」

後発隊の旗艦である慧龍が即答した。

「そう。じゃあこれを見て頂戴。説明はそれからよ。」

長門はそう言って懐から紙を取り出して慧龍に渡した。
慧龍はそれを見て顔から血の気が引くのを感じた。

「こっ、これって・・・宣戦布告と変わらないじゃないの！」

慧龍は思わず大声を上げてしまった。

周りの艦魂が思わず彼女を見る。

いつも冷静な彼女が動揺しているのを見て、周りの艦魂もその紙に書かれていることの重大性に気づいた。

彼女・・・いや、帝國の国民にとって『ハル・ノート』はそれほど衝撃的で恥知らずな文書であるのである。

「そうよ。残念ながら米国はわが国との開戦を望んでいるわ。」

心なしか長門の表情も暗い。

慧龍は他の艦魂にもその紙を見せたところ、彼女たちは例外なく驚愕の表情を顔に浮かべた。

「・・・・・結局、政府の努力は無駄になったわね。」

珍しく瑞鶴が口を挟む。

「ええ、でもしょうがないわ。戦争を望む相手にいくら交渉を重ねても無駄だもの・・・・・」

長門は悲しそうに呟いた。

「そう・・・・・ところで、いいニュースって何なの？」

慧龍は先ほどまでの重苦しい空気を振り払うように明るく言う。

「呉にいる第一艦隊がトラックに派遣されるらしいわ。」

長門もそれに合わせてわざと明るい声で言うと、後発隊の巡洋艦や駆逐艦たちが歓声を挙げた。
彼女らは普段違う場所にいて滅多に会うことができない姉妹に会えるので、そうなるのも無理はない。
こころなしか戦艦や空母の艦魂も嬉しそうだ。
ちなみに、第一艦隊とは、『越後』級戦艦や『大鳳』級装甲空母などの最新鋭艦が所属する帝國の主力艦隊である。
『越後』級戦艦は５０口径の１６インチ砲を１２門搭載し、３１ノットの速力を持っている艦であり、現時点において帝國海軍最強の戦艦である。
これらの艦については前章で述べているので説明は省略する。

「そういえば第三艦隊と第四艦隊はどうなるの？」

第三艦隊とは日本海の守備を担当しており、第一、二艦隊と比べれば小規模な機動部隊ではあるが、基幹戦力は戦艦４隻、正規空母２隻、軽空母４隻という充実したものとなっている。
第四艦隊は、旧式艦が集められて主に乗員の訓練などを行っている部隊で、
現役は最古参の『金剛』級戦艦や日本初の空母である『鳳翔』が所属している。

「第三艦隊からは第三直衛戦隊と九航戦、一〇航戦以外が、第四艦隊は『金剛』級と四水戦以外がこっちに来るわ。」

「よかった～。わたし、金剛さんって苦手なのよね～。」

心底安心したように翔龍が言う。
彼女が言う金剛とは、連合艦隊の現役戦艦の中では最古参である『

金剛』の艦魂である。
金剛は外見こそイギリス人であるが、中身は生粋の日本人であり、もちろん日本語も普通に話せる。
性格はよく言えば真面目、悪く言えば融通が利かないので、翔龍はその性格からか金剛には度々睨まれているのだ。

「それは姉さんが演習中に自室で変なコスプレしてるからでしょ。」

翔龍に慧龍が冷静に突っ込む。
以前、演習の最中に、翔龍が自室でプ〇キ〇アのコスプレをしている時に、たまたま彼女に用事があった金剛が、彼女の部屋に入ってきてしまったのだ。
それを見た金剛は当然のように激怒。
騒ぎを聞きつけた他の艦魂が来るまで、一時間にも渡って翔龍に殴る蹴るなどの暴行をし、それ以降も彼女は何かと翔龍の言動をチェックすようになったのだ。
ちなみに、そのときの翔龍のやられ具合を見た仙龍は、それ以降金剛を師として仰ぐようになってしまったのだが、それは別の話。

「え～、別に自分の部屋で何してもいいじゃない。なんなら、長門さんもねこみ・・・」

ドカッ！

「はいはい、姉さんはあっちに行こうな～」

ズルズルズル～

「え～ん、いたいよ～、ひきずらないでよ～」

翔龍は仙龍に引きずられて、涙を流しながらどこかへ行ってしまった。

「あらら、あの子達はいつもあんな感じね。」

長門はそんな二人を微笑みながら見る。

「まったく、あの二人は・・・・・」

幻龍は呆れたように言う。

「あら、元気なのはいいことよ。」

「でも、その元気をほかの事に使ったらもっといいのに・・・・・」

そう言って幻龍はため息をつく。

「ふふふ・・・それより慧龍、後でわたしの部屋に来てちょうだい。」

長門は急に表情を引き締め、真剣な表情で言った。

「分かりました。」

慧龍も話の重大さを悟ったのか顔を引き締める。

「じゃあ、わたしは部屋に戻って仕事をするわ。」

「長官に敬礼ッ！」

「いいわよ、敬礼しなくても。」

慧龍が敬礼しようとするのを止めて長門は自室に戻った。
それを合図に、他の艦魂たちも次第に自艦に戻っていく。
慧龍は一瞬、『長門』の艦橋を見た後、自艦に戻った。

それから数十分後、長門は誰かが自室のドアをノックする音を聞いた。

「いいわよ。入ってちょうだい。」

「失礼します。」

入ってきたのは慧龍だった。
彼女は丁度仕事がひと段落するのを見計らったのだろう。
長門もそろそろ休憩をしようと思っていたところだ。

「いいのよ、堅苦しくしないで。これから嫌でも重い話をしなきゃいけないから。
それよりそこの椅子に座ってくれない？」

敬礼しようとする慧龍を止めて部屋の真ん中にあるソファに座らせる。

「用件はだいぶ前のことで、『国東』から連絡があった事なんだけどね・・・・・
本当は秘密なんだけど、開戦になりそうだから公開してもいい、ってことになったわ。」

『国東』とは帝國海軍の特務艦であり揚陸艦でもあるが、その存在

は最高機密に包まれており、その艦の詳細は長門でさえも知らないほどだ。

「それはいったい何なのですか？」

慧龍が興味深そうに聞く。

「米大統領のアンダーソン…彼はイレギュラーよ。」

長門は先ほどとは声色を変えて慧龍に言った。

所変わって、ここはワシントンＤＣにあるホワイトハウスである。
現在、ここの主であるチャック・Ｅ・アンダーソン大統領の執務室のドアの前に海軍の制服を着た男が立っている。
その男は、第一空母戦隊の司令長官であるウィリアム・Ｆ・ハルゼー中将だ。
彼は内外の海軍関係者から猛将として知られる有名人である。
その彼が有名なのは日ごろの大胆不敵な発言もそうであるが、数々の伝説のお陰（？）でもある。
その中の一例を紹介しよう。

１９２１年の春にロングビーチで行われた演習があった。
当時、彼は空母ではなく駆逐艦６隻を率いている水雷戦隊の指揮官であった。
その演習では、相手役の戦艦４隻に対して味方は彼の率いる６隻の駆逐艦のみという非常に不利な状況であった。
にもかかわらず彼は配下の駆逐艦たちを縦横無尽に操って戦艦を翻弄、発射した模擬魚雷３６本の内２２本を命中させるという『大戦果』を挙げた。

しかし、発射距離が近すぎたために、命中した内の数本が魚雷内に大量に残っていた燃料の爆発を引き起こし、『実際に』戦艦を中破させてしまったのだ。
その後、彼が上層部から大目玉を食らったのはいうまでもない。
他にも、彼には数々の伝説があるのだが、ここでは省略させていただく。
さて、そのハルゼーは大統領直々の呼び出しでかなり緊張していた。
（俺は何の用事で大統領に呼ばれたのだろうか……
キンメルの悪口とか、演習中の独断専行とか……思い当たる節がありすぎるな。）
彼はしばらくそうやっていたが、やがて覚悟を決めて執務室のドアをノックする。
「ああ、入りたまえ。」
ドアの向こう側から大統領の声が聞こえる。
「失礼します。」
ハルゼーが執務室に入ると、大統領は書類にサインをしている所だった。
「おお、ハルゼー君か。早速だが君に頼みたいことがあってな。どうぞそこに座りたまえ。」
「はっ」

ハルゼーがソファに座ると、大統領はおもむろに席を立って窓の外を見る。
窓の外には曇り空が広がっており、下を見るともう葉が散ってしまった桜並木があった。

「ハルゼー君、我々の敵は何だね？」

「へ？」

ハルゼーは予想とは違う言葉についそのように返事してしまった。

「ん？何か問題があるかね？」

大統領が不思議そうに彼に尋ねる。

「い、いえ。私はてっきりなにか注意されるのではないかと……」

「はっはっはっ、大丈夫さ。我が合衆国はそんな細かいことで君のような有能な人材を失わせないよ。それより、私の質問に答えてくれないかね？」

大統領は窓の外を見ながら言った。

「はっ、我々の敵は自由と平和を謳歌する合衆国民の……」

「そんな教科書どおりの答えじゃなくていい。君の思っていることを言ってくれたまえ。」

大統領はハルゼーの言葉を遮る。
ハルゼーは腹を括って本音を話すことにした。

「はっ、僭越ながら我々の敵はナチスのチョビ髭野郎ではなく、ジャップのクソ猿だと思います。」

「ほう、それはどういった理由かね？」

ハルゼーの熱弁に大統領は彼のほうを振り向いて興味深そうに見る。

「はっ、クソ猿・・・もとい、ジャップは我々が自国防衛の為にワシントン条約の破棄を申したときには真っ向から批判していましたが、実は条約中に影でコソコソ新鋭艦を造り、あたかも条約後に建造したと言っておるのです。
さらに、我々が中国の・・・・・」

「もういい、分かった。噂どおり君の日本嫌いは相当なものだな。
よし、今から簡単な質問をする。ああ、そんなに堅くしなくていい。
あくまで君が思っていることを言いたまえ。」

ハルゼーが熱く語ろうとするのを手で静止し、大統領はさらに彼に質問をする。

「はっ。」

「君の嫌いなものを三つ上げてくれ。」

ハルゼーはまたも戸惑った。
大統領の真意がいまいち分からないが、とりあえず彼は思ったままを答えることにした。

「そうですね・・・まずはジャップ、次に融通が利かない上官、そし

て役立たずの味方です。」

「よろしい、合格だ。やはり君は私の見込んだとおりだったよ。」

大統領は喜色満面に言うと、金庫の鍵を開けて中から書類を取り出した。

「さあ、これを読みたまえ。言っておくが、これは超S級の機密書類だ。くれぐれも口外はしないでくれよ。」

ハルゼーはさっそく書類を受け取って中を読み始める。

「大統領っ、これは！」

数分後、ハルゼーは驚愕の表情で大統領を見ていた。

「そうだ、これを成功させた暁には君は英雄として凱旋することになるだろう。」

大統領はニヤリとしながらハルゼーに言った。

ハルゼーはただ呆然としながら手元の書類を見続けていた。

その書類の表紙には『作戦名：オーバー・ザ・レインボー』と書かれていた……

第八章「トラック到着、アメリカの陰謀」（後書き）

霜月「ふぃ～、ようやく第八章をｕｐできたぁ！」
三笠「いつも通り更新遅いね。」
宝鶴「しかも今回分量少ないし・・・」
霜月「うっ・・・なんですかそのジト目は。」
三笠「いや～特に何も。ねぇ？」
宝鶴「ねぇ？」
霜月「さ、さて、次からはいよいよ日米開戦です。次はアメリカ側の話を書こうと思っていたり、いなかったり・・・」
宝鶴「あっ、話そらした・・・というかどっちなのよ！」
霜月「あくまでも予定なので・・・」
瑞鶴「・・・予定は未定。」
三笠「おっ、瑞鶴ちゃんうまい事言うね～」
翔龍「いや～作者も大変だね。更新速度遅い上にストック存在しないってヤバイんじゃない？」
霜月「まあ、執筆する気分のときは三千文字は軽く打てるんだけど、気分が乗らないときはゼロ文字という極端な書き方ですから。というか、いつの間にかここにいるキャラが増えてない？」
慧龍「なんか今日はクリスマスだっていうから、三笠さんがみんなを呼んだらしいです。」
三笠「何か文句ある？」
霜月「いえ、別に・・・」
三笠「あ、忘れてた。作者から皆にクリスマスプレゼントとして何かひとつだけ要望をかなえてくれるって！」
霜月「えっ！？そんなの聞いてな・・・」
艦魂一同『やった～！』
三笠「じゃあ、私メインの外伝を書いて！」
霜月「疲れるんで拒否。」

三笠「あぁ？あんたロクに更新してないくせにそんなこと言う権利あるの？」
霜月「いえ、ですが・・・」
三笠「はい、決定！他に何かあるひとー！」
霜月「人の話を聞いちゃいないな・・・」
幻龍「じゃあ、わたしは本編での登場を増やして！」
霜月「そういえば第四章しかマトモな台詞がなかったっけ・・・じゃあ、次の次くらいで出番を作るよう努力します。」
幻龍「やたー！」
翔鶴「じゃあ、わたしはその・・・彼方さんと・・・キスなんてしてみたかったり・・・」
霜月「う～ん、前向きに検討するとだけ言います。じゃあ、次」
宝鶴「何だかんだ言ってあんたも乗り気じゃない。とりあえずわたしは役に立つ下僕が欲しいわ。」
霜月「余裕があったら書きます。次。」
瑞鶴「・・・お腹いっぱい料理が食べたい。」
霜月「その内書くと思います。次。」
・・・一時間後・・・
霜月「はーっ、はーっ、ようやく終わった・・・」
翔龍「作者乙。それにしても、コ○ケ並みの行列だったね。あっ、そうだ。冬○ミいかなきゃ！」
仙龍「姉さん、念のため言うけどコ○ケに行ったらいかんで～。」
翔龍「もっ、もちろん、部下が代わりに買ってくるから問題なしだよ。」
仙龍「じゃあ、そのカタログはなに？」
翔龍「ギクッ・・・いや、その、これは・・・」
仙龍「どうして嘘をつくのかな、かな？」
翔龍「ひぃ！オ○シロモードだ・・・」
仙龍は翔龍に一歩ずつ迫っていく。
翔龍は次第に後退してゆき、作者のすぐ隣まで来る。

翔龍「この鉈女め・・・作者ガード！」
霜月「えっ！？ちょっ、おまっ！」
仙龍「わたしの右手が真っ赤に燃えるぅ、お前を倒せと輝き叫ぶぅ・・・必殺、シャ○ニン○フィ○ガー！」
バチコーン！
霜月「時報はもう嫌だぁー！」
キュピーン
作者は星になった。
翔龍「くっ、馬鹿な・・・このわたしが負けるなんて。」
仙龍「わたしの戦闘力数は、５３万やで。負けて当然や。」
翔龍「ふざけるなよ、猿野郎！」
幻龍「はいはい、フ○ーザとかひ○ぐらしはもういいから。で、結局次回は何やるんだっけ？」
宝鶴「次はアメリカの艦魂について書くらしいわ。わたしは彼女たちに会ったことはないからよく分からないけど・・・」
幻龍「ほんとに書くのかなぁ・・・それでは、ご意見・感想待ってます！」

第九章「嗚呼、十二月八日朝」（前書き）

新年あけましておめでとうございます。

作者の霜月龍牙でございます。

カナタの幻想は現在第十章まで書きあがりましたが、作者自身が部活のコンクール等があるのために、なかなか投稿できないのでストックにしてます。

更新速度は相も変わらずメチャクチャ遅いですが、一生懸命書きますので本年もよろしくお願いします。

第九章「嗚呼、十二月八日朝」

１９４１年１２月７日午前６時（現地時間）　オアフ島レーダーサイト

「おい、ジョン！レーダーに多数の機影が映っているぞ！」

レーダーの操作員がスクリーンに映る多数の輝点を見て叫ぶ。

「ふぁ～あ、なんだマイケルは聞いてなかったのか。
それは味方のＢ－１７で、ここの戦力を増やすためにステイツから転属した部隊さ。
なんでも夜間飛行の訓練を兼ねて、こんな朝早くに着くようにしたんだとよ。」

ジョンと呼ばれた男は眠そうに目を擦りながら言う。

「なんだ、てっきりジャップの奇襲かと思っちまったぜ。焦って損した。」

マイケルは安心したように伸びをして、イスから降りてストレッチを始める。

「おい、噂をすればＢ－１７がそろそろ真上につく頃だぜ。」

二人は耳を澄ませると、かすかに爆音が聞こえてくる。
次第に爆音は大きくなり、やがてだんだん小さくなる。

「海軍や航空隊の連中は大変だな。開戦してもしなくても毎日訓練

だとよ。」
マイケルが呆れたように言う。
「まったくだ。画面とにらめっこしてるだけでいい俺らは勝ち組だな。」
そして二人は爆笑した。
何のことはない。
それはいつもの光景であり、日本軍の攻撃がない限りこれからも続くやりとりであった。

ハワイ列島の島であるオアフ島は、アメリカが持つ太平洋の基地の中でも本土の西海岸に次ぐ規模の基地である。
そこには、アメリカ海軍太平洋艦隊の司令部があり、飛行場や艦艇用の燃料タンク、ドックなどをはじめとする多彩な設備がある。
また、同島の他の場所には戦艦の主砲と同じである１６インチ砲などを備えた陸上要塞があり、直接上陸して占領するのは困難と見られている。
その真珠湾にはダニエルズ・プランやスタークス・プランで建造された多数の艦艇が並んでいた。

太平洋艦隊長官であるハズバンド・Ｅ・キンメル大将は、その真珠湾から程近い太平洋艦隊司令部の建物の窓から外を眺めていた。
外や湾内の艦艇では防空訓練が行われており、機銃や高角砲についた兵たちが忙しそうに移動している。
キンメルは数日前に『１２月８日早朝に抜き打ちで防空訓練をせよ』との大統領命令を受け取った。
彼はそれを怪訝に思いながらも、言われたとおりに実行していた。

キンメルは手元の書類を見ていると、ふと窓の外から爆音が聞こえてくるような気がした。

「おい、どうやら航空機が飛んでいるようだが、今日の訓練はまだじゃなかったのか？」

キンメルは参謀長であるスミスの方を向いて聞く。

「あれはジェームズ・Ｈ・ハンセン中佐の部隊で、夜間航法訓練も兼ねて移動してきたらしいです。」

「ほう、あれが噂のハンセン中佐か・・・・」

キンメルはそう呟くと、訓練結果のレポートが来るまで机に向かって仕事をすることにした。

真珠湾の上空５千メートルでは、５０機ほどのＢ－１７爆撃機が編隊を組んで飛んでいた。

Ｂ－１７は米陸軍が誇る四発の大型爆撃機で、愛称が『空の要塞』（フライング・フォートレス）である。

Ｂ－１７は、多数の防御砲火と高い防弾性が特徴であり、ノルデン爆撃照準器を装備しているので高高度からの投弾でも命中率が高かった。

日本でも九八式爆撃照準器として同じような機器が採用されている。

「おっ、そろそろパールハーバーか・・・・・それにしても上空にはほとんど戦闘機が上がっていないな。

もう戦争だってのに大丈夫なのかよ・・・・」

そう呟いたのは編隊を束ねるハンセン中佐であった。
彼はシゴキが厳しく、部下の体に痣が無いものはいないということで有名である。
さらに、彼が率いた部隊は練度・士気が高いことでも有名であり、彼は陸軍航空隊きっての編隊長としての地位を築いている。

「そうは言っても、まだわが国は開戦してませんからね。多少の気の緩みはしょうがないでしょう。」

彼の独り言に返事をした男は、この機の主操縦士のロナルドである。
ロナルドは彼とペアを3年前から組んでおり、お互い気心の知れた仲である。

「はぁ？てめぇ、何を言ってるんだ？
もしかすると今ジャップがここに奇襲攻撃をかけてくるかもしれないんだぞ。」

ハンセンは少し怒ったように言う。

「大丈夫ですよ。ハワイは我が軍が常時哨戒機を飛ばしてジャップの攻撃を警戒してますから。」

ロナルドは楽観的な口調で言う。
彼は元々そのような性格なので、ハンセンはこれ以上彼と議論するのをやめた。

「だといいがな・・・」

ハンセンはそう呟いて北の空に目を向けた。

ハンセンが見つめた遥か先には一群の機動部隊が航行していた。
その機動部隊には空母が2隻おり、その周りを数隻の駆逐艦が囲んでいた。
ちょうど今、その内の1隻である空母『サラトガ』の飛行甲板上では、艦載機がエレベーターで上げられており、整備員が忙しそうに駆け回っている。
そこから少し離れた機銃座の近くには一人の青年がいた。

「なあ、サラ。俺たちって何でわざわざこんな所に来て訓練してるのかな？」

青年は隣にいる15、6歳くらいに見えるブロンドの髪の少女に話しかける。

「知らないわよ。というか、何であんたがここにいるのよ。」

サラと呼ばれた少女は『サラトガ』の艦魂であった。

「別にいいじゃないか。いつも一緒にいるんだし。」

そう言って青年はサラトガの頭を撫でる。

「ひゃぁっ！なっ、何するのよぉ！」

サラトガは顔を真っ赤にして青年をポカポカと殴る。

「わっ、痛いっ、やめろって！う～ん、僕はサラトガ……が好きなんだけどな。」

青年は残念そうに言う。

「！？わっ、わたしも・・・あんたが好きよ。」

サラトガはなぜか顔を真っ赤にしたまま俯く。

「そう？ありがとう。じゃあ、お言葉に甘えて。」

そう言うと青年は再びサラトガの頭を撫でる。
サラトガは今度は気持ちよさそうに、されるがままにしている。
だが、その時間は長くは続かなかった。

《戦闘機搭乗員は全員艦橋前飛行甲板へ集合せよ！繰り返す・・・》

「ごめん、もう行かなきゃ。」

青年はすまなそうに言う。

「別にいいわ。あのね・・・またあんたがあたしの頭を撫でたいっていうなら、撫でてもいいわよ。
かっ、勘違いしないでよね！あんたがそれをやらないと、本当に惨めで可哀想だからしょーがなくやってあげてるだけなんだからね！」

サラトガは顔を真っ赤にしながらプイっと横を向く。

「ははは、分かったよ。後でまた撫でさせてもらうよ。」

青年はそう言ってサラトガの頭をわしゃわしゃとなでた後、ラッタルを登っていく。
残されたサラトガは彼が見えなくなると、だらしなく頬を緩ませる。

「キャ～、わたし『好き』っていわれちゃったぁ☆
って別にわたしはアイツのことを好きじゃないんだからね！」
サラトガは自分で言って自分に突っ込むが、やはりニヤけている。
「なにニヤけてるのサラ？気持ち悪いわよ。」
サラトガはその声に後ろを振り向くと、そこには姉であるレキシントンが立っていた。
「う、うるさいわね！なんでもないわよ！」
「あらら～、サラは愛しのアル君に『好き』とか言われちゃったから喜んでるのかな～？」
レキシントンはニヤニヤしながらサラトガをいじる。
ちなみに、アル君とは先ほどの青年で、名前をアルフレッド・Ｊ・ウェーバーといい、階級は中尉である。
彼は戦闘機パイロットであり、一個中隊を率いる中隊長でもある。
「！？バカ姉！どこから聞いてたのよ！」
レキシントンが言ったことがほとんど当たっていたため、サラトガは顔を真っ赤にして怒る。
「ん～っと、『なあ、サラ。俺たちっって何でわざわざこんな所に来て訓練してるのかな？』ってとこからかな。」
「最初からじゃないのー！」

サラトガはレキシントンをポカポカ殴る。

「え～、だってわたしの妹があんな可愛い仕草をするなんて、面白くてずっと見てるに決まってるじゃない。」

「見るなー！バカ姉ぇー！」

サラトガはさらに殴り続ける。

「ちょっ、痛っ、やめてってば。もう、ちょっとからかっただけじゃないの～。」

レキシントンがそういうと、サラトガはようやく手を下ろした。

「まったく。あ、言い忘れたけどあんた物凄い勘違いしてるわよ。」

「え？」

「アル君が言ったのは『あなたの頭を撫でることが好き』っていう事で、『あなたのことが好き』という事ではないのよ。」

レキシントンにそう言われてサラトガは先ほどの会話を思い出す。

《「なあ、サラ。俺たちって何でわざわざこんな所に来て訓練してるのかな？」

「知らないわよ。というか、何であんたがここにいるのよ。」

「別にいいじゃないか。いつも一緒にいるんだし。」

そう言ってアルはサラトガの頭を撫でる。

「ひゃぁっ！なっ、何するのよぉ！」

サラトガは顔を真っ赤にしてアルをポカポカと殴る。

「痛っ、やめろって。う～ん・・・僕はサラトガ《の頭を撫でるの》が好きなんだけどな。」

アルは残念そうに言う。

「！？わっ、わたしも・・・あんたが好きよ。」

サラトガはなぜか顔を真っ赤にしたまま俯く。

「そう？じゃあ、お言葉に甘えて。」

そう言うとアルは再びサラトガの頭を撫でる・・・・・》

サラトガはよくよく考えてみると、確かにレキシントンの言っていることが正しいと思える。

「えっ、それじゃあわたしは勝手に自爆しただけってこと？」

「まあ、確かにそうね。でも、あなたが好きって言ったのは髪を撫でられることだとアル君は勘違いしてるし・・・・・」

レキシントンはそう言うが、サラトガはもう彼女の話を聞いてはいなかった。

「よっ、よよよよ、よくも乙女の恋心を踏みにじってくれたわね・・・覚悟しなさいっ！バカ犬ー！」

サラトガがそう言うのと同時にグラマンがカタパルトから打ち出される。

グラマンは見事離艦に成功し、空高く昇っていく。

「あんたはル〇ズか。」というレキシントンのツッコミを乗せて・・・・

第九章「嗚呼、十二月八日朝」（後書き）

三笠「せ～の」

作者＋艦魂一同『新年あけましておめでとうございます！』

霜月「いや～、この作品を書き始めてから早くも二ヶ月と少し。飽きっぽい僕としてはよくここまで書けたな～と思いますね。」

宝鶴「まあ、作者にしてはよくやったとは思うけど。最初の二日置きの更新が今では月三回なのはどうかと思うわ。」

三笠「わたしの外伝まだ～？」

霜月「現在検討中です。なるべく前向きに善処したいと思っております。」

三笠「書く気ないの？」

霜月「まあ、はっきり言えば・・・あります！やりましょう！」←三笠の無言の圧力に屈した。

三笠「よろしい。で、他の作品の艦魂がゲストで来てたりするの？」

宝鶴「そんなの超チキンでリトルハートな作者には無理じゃない。どうせメッセージに書く勇気がなかったんでしょ？」

霜月「うぐっ、言い返せないのが悔しい。」

三笠「というわけで、もし『このあとがきに艦魂を出したい！』という奇特な方がいましたら、作者に連絡をください。先着順であとがきに書かせていただきますので。」

霜月「ああ～っ、なんてことを！僕の文章力じゃ他の作者の艦魂を書ける訳ないってば！」

宝鶴「うるさいっ！あんたそれでも文系なの？」

霜月「文系と文章力は関係ないんじゃ……」

宝鶴「いいのよ別に。あんたはさっさと書く！これ決定事項よ！」

幻龍「ねえ、正月スペシャルなんだからわたしたち脇役も出してよ。」

長門「まあまあ、そうカリカリしない。ほら、翔鶴たちが彼方君を取り合ってるわよ。」

幻龍「なにっ？わたしを差し置いて何いいことしてるのよー！」

幻龍は退場した。

三笠「いや～、長門っち久しぶり～」

長門「お久しぶりです、三笠長官。」

三笠「っと、積もる話は後にして、もうすぐ時間が迫ってるわ。」

宝鶴「作者はカウントダウンと同時に投稿しようとしてるからね。」

長門「あと、このあとがきに自分の作品の艦魂載せて欲しいという作者さんがいらっしゃいましたら、作者に連絡してください。ホテルに缶詰にしてでも書かせますので。」

三笠「長門っちさりげなくわたしの台詞取ってるし・・・・」

霜月「それではっ！」

一同『本年もよろしくお願いします！』

第十章「動き出す歯車」（前書き）

《登場人物紹介》

レキシントン
所属
アメリカ合衆国海軍第４９任務部隊
年齢
１３歳（１９４１年１２月１日現在）
誕生日
１１月９日
身長
１６１ｃｍ
年齢
２０歳

サラトガの姉で最古参の空母艦魂であり、そのためか空母艦魂たちのまとめ役となっている。
妹のサラトガをよくからかったりするが、時々アドバイスもしてあげている。
自分の身長が低いのを気にしている。

サラトガ
所属
アメリカ合衆国海軍第４９任務部隊
年齢
１４歳（１９４１年１２月１日現在）
誕生日
１１月１６日
身長

１９１ｃｍ
外見年齢
１９歳

ツンデレキャラ。
アルフレッドのことが好きだが、素直に言えない。
姉とは反対に背が高く、自分の背が高すぎることがコンプレックスになっている。

アルフレッド・Ｊ・ウェーバー
所属　サラトガ戦闘機隊第一中隊三番機
階級　開戦時　海軍中尉
年齢　２５歳（１９４１年１２月１日現在）
誕生日　１月５日
身長　１７８ｃｍ
体重　６５ｋｇ

サラトガの戦闘機パイロットで艦魂を見る能力がある。
性格はマイペースで温和。
サラトガの頭を撫でるのが好きで、彼女に嫌がられながらもよく撫でている。
また、童顔のために私服で外を歩くと学生に間違われることもある。
彼の機体には矢のマークが描いてあるが理由は不明。

第十章「動き出す歯車」

・
・
・

その時、青年は零戦に乗っていた。
彼は周りを見てみると、彼の零戦のほかにも多数の零戦や彗星、天山が編隊を組んでいる。
彼らの目的は唯一つ。

『米機動部隊を殲滅すること』

それだけである。

単調な景色に飽きた彼がふと上を見ると、編隊の5百メートル上から十機ほどのグラマンが降ってくるのが映った。

「敵襲だ！」

彼を含め、グラマンに気付いた十数機の味方が回避運動をする。
しかし、他の機はまだ気づいていないのか、悠然と直線飛行を続けている。
そうしている間にもグラマンの群れはどんどん降下していく。

「畜生っ！マトモな無線があれば！」

思わず彼は叫んでいた。
零戦には無線があることにはあるが、性能が悪いために雑音が酷く、ベテランの中には邪魔だからと無線機を降ろし、さらにはアンテナ

さえもノコギリで切り落とした者もいる。
それほどまでに帝國の無線機は劣悪な代物なのだ。

だが、そうやって青年が悪態をついても事態が好転するはずが無い。
グラマンが通り過ぎる轟音とともに、何十条ものアイスキャンデーが通り過ぎた。
そして、その後に残っていたのは阿鼻叫喚の地獄絵図だった。
火を噴きながら堕ちていく零戦。
爆弾に機銃弾が当たったのか、その場で爆発して跡形もなくなった彗星。
風防内が血で真っ赤に染まり、黒煙を吹きながらもなお飛行している天山。

青年はそれらを目に入れないように再度敵の奇襲がないか周りを見渡す。
幸いにも自分の小隊は無事なようだが、味方の十数機が撃墜破されたようだ。
そして、彼は五百メートル上空にさらに十機ほどのグラマンがいるのを発見した。
彼は劣位戦ではあったが、単機で果敢に敵編隊に挑んでいった……

・
・
・

トラック環礁の上空では、空母の艦載機部隊が月月火水木金金の猛特訓をなっていた。
トラックへの移動途中に『慧龍』で起こった着艦事故の結果、第二艦隊司令部は空母を使って行う訓練はまだ危険である、という結論を出した。
『幻龍』級が配備されている七航戦と八航戦は搭載機を陸上の基地

に上げ、現在に至るまで編隊飛行や空戦訓練など、基礎的な訓練が徹底的に行われている。
無論、ベテラン搭乗員が多い『翔鶴』級が配備されている五航戦や六航戦の搭乗員も、陸にあがって同様の猛特訓が行われている。

その内容を示すと、五百キロ以上の長距離を飛行した後に、約３０分の戦闘訓練を行い、また往路の分を飛翔して飛行場に着陸するという、いわば機動部隊の戦闘をそのまま再現したものである。
この訓練は言うのは易いが、実際にやると精神と肉体の両方を消耗する超過酷なものである。
そのために、練度が低い七航戦や八航戦はもちろん、ベテランが多い五航戦や六航戦ですらほぼ三日に一回は何かしらの事故が起こり、殉職者や重軽傷者は後を絶たなかった。
だが、訓練はなおも続き、ヒヨコだった者がしだいに海の荒鷲に育っていく。

そして、運命の１２月８日。
その日の朝、急に訓練が中止になり、基地にいる将兵は基地の指揮所の前で整列していた。
突然の召集に彼らは疑問に思ったが、大部分の者はいよいよ米国と開戦したのだろうと思っていた。
そして、演台に飛行場の司令である小園（こぞの）　安名（やすな）中佐が立つと、一同は水を打ったように静かになる。

「今日、皆に集まってもらったのは他でもない。
わが国は遂に米国との開戦を決定し、米国に対して宣戦を布告した！」

小園がそう言うと、将兵たちはざわめきだした。
しばらくしてざわめきが収まると、小園は言葉を続ける。

「やがて米国は対日攻略作戦のオレンジプランに従って帝國に向けて侵攻してくるだろう。
諸君らの任務は侵攻してくる米太平洋艦隊を何としても撃滅することだ！
今まで月月火水木金金の猛訓練に耐えてきた諸君らには必ずできるはずだ！
だが、まだ米太平洋艦隊の来寇まで時間がある。
それまで、諸君らはよく訓練し、よく食べ、よく寝ること！
くれぐれも、当日になって体調を崩さないように！以上ッ！」

小園がそう締めると、将兵からは歓声があがった。
やるぞー！と大声で言う者や静かに闘志を燃やしている者、さらには感動のあまり涙を流している者まで反応は様々であったが、部隊の士気は格段に上昇したことは間違いない。
だが、彼方や菅野のように、苦い顔をしている者もごく僅かながらいた。
そして、今まさに演壇を降りていく小園もその一人であった。
彼らは皆、米国と戦うことがどういうことか知っている者であった……

現地時間12月12日午後3時　オアフ島沖

「敵艦発見！艦種は空母3、巡洋艦3、駆逐艦18……まだまだ増えています！」

「むぅ、米機動部隊か……」

そう唸るのは帝國の潜水艦である『伊－49』の艦長の橋本（はしもと）　以行（もちつら）

中佐である。
彼は過去にドイツの駐在武官を務めていたことがあり、通商破壊の戦術に造詣が深く、潜水艦戦の第一人者として有名である。
そして、彼の乗艦である『伊－４９』は通商破壊用の巡潜６型であり、１６隻が建造されている。
現在、彼女のほかにも多数の潜水艦がハワイ沖で哨戒行動を取っており、米艦隊の動向を探っている。

「艦長、どうしますか？即座に通報して退避するか、そのまま敵をやり過ごして通報するか・・・
攻撃は断固慎むようにと言われてますからね。」

副長が彼の判断を仰ぐ。

「・・・よし、通報してから退避しよう。通信士官、統合参謀本部に通信だ。
『敵機動部隊出撃す。戦力は空母４隻以上、巡洋艦４隻以上、駆逐艦多数。』と送れ！
送信後、急速潜行だ！」

橋本は即決する。
ぐずぐずしてるとせっかくの好機を逃しかねないからだ。

『了解！』

その後、『伊－４９』は無線で通報した後にすぐに退避した。
だが、米艦隊は彼女を攻撃することなく北西の方向へ去っていった。
橋本は後に、この時に危険を冒してでも魚雷攻撃を行わなかったことを後悔することになる・・・・

第十章「動き出す歯車」（後書き）

霜月「ようやく十章をあげました。本当は昨年の内に書き上げたのですが、部活の大会が終わったので投稿することにしました。」

三笠「ほんとにようやくだね。しかも短いし。というか、もう新学期始まってない？」

霜月「それには様々な事情が……」

宝鶴「ふ～ん……」

翔鶴「……（ジトッ）」

瑞鶴「……」

三笠「そういえば、なんで今日は翔鶴ちゃんと瑞鶴ちゃんがここにいるの？」

霜月「なぜなら今日はゲストが来てくださったからです！」

宝鶴「そういえば前回でそんな話があったわね。作者が公約守ったなんてものすごく意外だわ。」

霜月「さすがに今回は死んでも守らないといけないので。

…さて、今日は草薙先生の《独立機動艦隊『紀伊』―連合艦隊大勝利！》から翔鶴さんと瑞鶴さんに来ていただいております！」

楓「どうも、『翔鶴』の艦魂で真名は楓です。それでこっちは妹で

ある『瑞鶴』の艦魂で真名は陽子です。」

陽子「よろしくお願いします。あっ、べつに真名を呼んでもかまいませんよ。」

三笠「よろしく☆　わたしは『三笠』の艦魂の三笠だよ。あっ、作者は例外ね。真名呼んじゃダメだよ。」

霜月「なんで！？」

三笠「外伝書いたの？」

霜月「すみません、書いてないです。」

三笠「じゃあ、真名で呼べないよね？」

霜月「はい……」

翔鶴「えと、わたしは『翔鶴』の艦魂の翔鶴です。違う世界のわたしと会うなんて不思議な感じです。」

瑞鶴「…わたしは『瑞鶴』の艦魂の瑞鶴。よろしく。」

宝鶴「わたしは翔鶴姉さんの妹で『宝鶴』の艦魂の宝鶴よ。よろしくね。」

三笠「さて、自己紹介も終わったところで、お酒でも飲んで話しましょうか。」

楓「賛成！」

宝鶴「……（錦鶴を連れてこなくてよかったわ。）」

陽子「なんか、こっちのわたしって何だか無口だね。」

宝鶴「それは作者が無口無表情キャラが大好きだからよ。長○有希とか綾○レイとかの画像を携帯の待ち受けにしてるくらいだから。」

陽子「そうなんだ……（汗）」

霜月「誤解を招くことを言わないでくださいよ。あくまでも一時期です。今は普通の待ち受けですから。」

くいくい

宝鶴「姉さん、なに？」

瑞鶴「……食べ物は？」

宝鶴「ある訳ないわ。だって姉さんが全部食べちゃうし。それより陽子さんと話でもしなさいよ。」

瑞鶴「……うん。和菓子いる？」

陽子「えっ……いいの？」

瑞鶴「……（コクリ）」

瑞鶴は頷いて手に力を込めると、彼女の手のひらが輝いた。
そして光が消えたあとには一個の八つ橋があった。

瑞鶴「はい。」

陽子「ありがとう。……うん、なかなか美味しいわ。」

瑞鶴「……よかった。」

宝鶴「珍しいわね。姉さんが他の人に食べ物をあげるなんて。和菓子の分のカロリーを使うからいつもは嫌がってるじゃない。」

瑞鶴「……今回は特別。」

宝鶴「……（よく考えてみると、これってダ・〇ーポのパクリじゃないかしら!?）」

翔鶴「ひゃっ!楓さん、やめてください!」

楓「こっちのわたしってよく見ると結構かわいいわね。」

陽子「あっ、姉さんまたやってる!もう、いい加減にしてよ!」

宝鶴「えっ、楓さんどうなっちゃったの?まさか酒乱の気がある人?」

陽子「そうよ!姉さんは酒を飲むと『究極のエロ魔王』になるのよ。それよりも早く姉さんを止めないと!」

三笠「大丈夫よ。わたしがとめて見せるわ。」

陽子「三笠さん!」

楓「ん？三笠さんも脱がしてあげようか？」

三笠「あなたが起きていられたらね。いくわよっ、三笠百裂拳！」

霜月「ちなみに僕は北〇の拳を見たことが無いので、使用法が間違ってても一切苦情は受け付けません。」

宝鶴「作者、何か言った？」

三笠「・・・3、4、5！」

楓「うっ・・・・・」

三笠が5まで数えた瞬間、楓は突然その場に倒れてしまった。

陽子「姉さんっ！」

三笠「大丈夫よ。本来この技は体の秘孔を突いて死亡させるものだけど、手加減したから気絶程度で済んでるわ。しばらくすると目が覚めるはずよ。」

陽子「ふぅ、よかった。・・・翔鶴さん、姉さんが迷惑かけてすみません。」

翔鶴「べっ、別に大丈夫ですよ。楓さんから色々アドバイスももらいましたし。」

霜月「おっと、そろそろ時間のようですよ。」

陽子「そうですか・・・今日はわざわざ呼んでくださいましてありがとうございます。」

三笠「陽子さんも元気でね。」

翔鶴「また来てくださいね。」

瑞鶴「・・・バイバイ。」

宝鶴「あっちでも元気でね。」

霜月「あっ、そうそう。ちょうど僕の実家がある函館から毛ガニが届いたので、よかったら持っていってください。」

陽子「本当ですか！？ありがとうございます！」

宝鶴「ちなみに作者はカニとかマグロが嫌いなのよね。可哀想に。」

翔鶴「人生の半分を無駄にしてますね。」

霜月「別にいいじゃないですか！どうせ僕は魚介類が嫌いですよ！それより、二人とも大変とは思いますがあちらの世界でも頑張ってくださいね。」

陽子「はい、ありがとうございます。」

翔鶴「あっ、本当に時間のようです。」

翔鶴がそう言うと、楓と陽子の体が光り始める。

霜月「それでは、お二人に対し敬礼ッ！」

ザッ！

陽子「皆さん、また会いましょうね！」

楓「・・・・ん、ここはどこ？翔鶴は？」

そして、二人は光の粒となって消えてしまった。

三笠「行っちゃったね。」

霜月「そうですね。」

宝鶴「瑞鶴姉さんは陽子さんと話せてよかったね。」

瑞鶴「・・・・うん。」

翔鶴「わたしも楓さんからいっぱいアドバイスをもらいましたし・・・今度試してみよう。」

霜月「えと、若干一名がなにやら不穏な動きを見せていますが・・・・さて、次回はいよいよ連合艦隊が出撃します。」

三笠「次は零戦先生の艦魂をお呼びする予定だね。」

宝鶴「作者がまともに書けるか不安だわ。」

霜月「正直僕も不安ですが、粉骨砕身の努力で頑張りたいと思います。」

翔鶴「草薙先生、こんな感じでよろしいですか？作者的には今回はかなり頑張ったらしいので、大目にみてくださるとありがたいです。」

瑞鶴「・・・それでは、ご意見・ご感想を待ってます。」

間章「帝國軍兵器紹介その2」

霜月「さて、今回は『帝國軍兵器紹介その2』です！」
三笠「わーい、どんどんぱふぱふ☆」
宝鶴「まさか・・・作者が一日で二話投稿するなんて。ハルマゲドンでも起こるんじゃないかしら・・・・・」
霜月「いや～、なんか次の話に行き詰まったので気晴らしに書いてみました。」
宝鶴「あまり感心しない理由だけど・・・まあいいわ。それで今回は何を紹介するの？」
霜月「今回は前回紹介できなかった艦艇や航空機がメインとなります。あと、今まで書かなかった本作の設定などもありますので。」
三笠「補助艦艇や輸送機ばかりでつまらないかもしれないけど最後までお付き合いください。」

・軽空母
祥鷹級
概要
日米開戦が近付いたころ、海軍は緊急に空母戦力を拡充する必要があった。
そこで改幻龍級正規空母の大量建造に着手したが、完成までにどう頑張っても一年半以上かかる。
そのため、海軍はその間のつなぎとして祥鷹級軽空母を4隻建造した。
本級は開戦後に機動部隊の随伴や、戦艦部隊・輸送船団の護衛、上陸作戦時の航空支援などに使われた。
その時の運用実績がよかったため、さらに改良型が12隻が追加建造されて雲鷹級となった。
竣工時から航空機用カタパルトが装備され、狭い甲板からの発艦が

可能となった。

武装
１０サンチ両用砲６５口径連装４基８門
４０ミリ機銃連装１０基２０門
４０ミリ機銃単装１６門
３０ミリ機銃単装１２門

速力
３３ノット

全長
１９４．５ｍ

艦幅
３２．９ｍ

排水量
１万３千トン

搭載機数
４３機（戦１６（１）、爆１２（２）、攻１２（２）、偵３）または（戦４８（４））

同型艦
翔鷹（しょうよう）
瑞鷹（ずいよう）
龍鷹（りゅうよう）
大鷹（たいよう）

・巡洋艦
妙高級
概要
マル二計画で建造された重巡洋艦で、戦艦に準じた主砲配置と魚雷を完全に撤廃したことにより、世界の注目を集めた。
しかし、居住性と復元性が悪く、１９３７年のイギリス国王の戴冠記念観艦式に参加するために訪英した時、イギリス人記者に
「今日私は初めて　本当の軍艦を見た。今まで私が見てきたのはホテルシップだった」
と言われたほどひどいものであったという。
後に改装され、居住性が良くなり防御力も上がっている。

武装
８インチ砲５６口径３連装３基９門
８．８サンチ７２口径高角砲単装６基６門
４０ミリ機銃連装４基８門
３０ミリ機銃単装２０門

速力
３４ノット

全長
１８４．３ｍ

艦幅
１８．７ｍ

排水量

９千５百トン

搭載機数

水上機×３機

同型艦

妙高

那智

足柄

羽黒

高雄級

概要

ワシントン海軍軍縮条約後のマル三計画で建造された重巡洋艦。条約の枠を目一杯使って建造さた。

妙高級の反省を踏まえて居住性と復元力を良くし、戦闘力を向上させた巡洋艦。

開戦前には改装が行われ、レーダーなどを新型にしたり対空火器を増やしたりしている。

武装

８インチ砲５６口径３連装３基９門

８．８サンチ７２口径高角砲単装８基８門

４０ミリ機銃連装１２基２４門

３０ミリ機銃単装２６門

速力

３５ノット

全長
１８７．９ｍ
艦幅
１９．４ｍ
排水量
９千９百トン
搭載機数
水上機×３機
同型艦　８隻
高雄
愛宕
麻耶
鳥海
古鷹
青葉
衣笠
阿蘇

球磨級
概要
改マル二計画で建造された軽巡洋艦。
水雷戦隊の旗艦として建造され、竣工後は各水雷戦隊の旗艦として、配備された。
後に機関の換装や、レーダーの搭載などの改装が行われた。
大戦中は旧式艦ながら、獅子奮迅の活躍を見せ、終戦まで第一線で活躍した。

武装
６インチ砲５２口径連装３基６門
６１サンチ魚雷４連装２基８門
８．８サンチ７２口径高角砲単装８基８門
４０ミリ機銃連装１０基２０門
３０ミリ機銃単装２０門

速力
３６ノット

全長
１７８．６ｍ

艦幅
１５．６ｍ

排水量
６千７百トン

搭載機数
水上機×１機

同型艦
球磨
多摩
大井
北上
川内
神通

那珂
高瀬

阿賀野級
概要
マル四、マル急計画で建造された艦隊型軽巡洋艦。
長良級の改良型で、対空能力を強化した。
大戦中は機動部隊の護衛や水雷戦隊の旗艦などで活躍した。

武装
６インチ砲５２口径３連装４基１２門
１０サンチ両用砲６５口径連装４基８門
４０ミリ機銃連装８基１６門
３０ミリ機銃単装３０門

速力
３６ノット

全長
１６８．４ｍ

艦幅
１６．８ｍ

排水量
６千７百トン

搭載機数
水上機×３機

同型艦
１２隻

天龍級
概要
マル一計画で建造された軽巡洋艦。
後に改装されて速力が向上しているほかに、魚雷と６インチ砲が撤去された代わりに高角砲が搭載され、軽巡洋艦から防空巡洋艦に艦種変更した。
大戦中は機動部隊やの護衛として活躍した。

武装
１０サンチ両用砲６５口径連装３基６門
４０ミリ機銃連装８基１６門
３０ミリ機銃単装２０門

速力
３５ノット

全長
１６５．７ｍ

艦幅
１４．４ｍ

排水量
５千６百トン

搭載機数
水上機×１機

同型艦
天龍
龍田
石狩
釧路

・駆逐艦
秋月級汎用駆逐艦
概要
計画で建造された一等駆逐艦。
艦隊型汎用駆逐艦の第一弾として、その当時での画期的な防空能力と対艦攻撃力を兼ね備えている中型汎用駆逐艦。
大戦中ではその汎用性から、機動部隊護衛、上陸支援、船団護衛など様々な任務に従事した。

武装
１０サンチ両用砲６５口径連装３基６門
６１サンチ魚雷四連装２基８門
４０ミリ機銃連装２基４門
４０ミリ機銃単装８基８門
３０ミリ機銃単装１０基１０門
零式対潜爆雷投射機２基

速力
３６ノット

全長
１１８．５ｍ

艦幅
１０．４ｍ

排水量
１千７百トン

同型艦
１２隻

朝潮級防空駆逐艦
概要
マル四計画で建造された艦隊型防空駆逐艦。
魚雷を全廃した代わりに対空火器が増えている。
航続距離、居住性にやや難があり、計画されていた３６隻のうちの２４隻が改良型の夕雲級として竣工した。
大戦中は主に機動部隊の護衛を務めている。
また、ネームシップの朝潮は帝國の軍艦で初めて電気溶接を採用した艦である。

武装
１０サンチ両用砲６５口径連装４基８門
４０ミリ機銃連装６基１２門
４０ミリ機銃単装１２基１２門
３０ミリ機銃単装８基８門
零式対潜用爆雷投射機２基

速力
３７ノット

全長
１３３．５ｍ

艦幅
１１．５ｍ

排水量
２千２百トン

同型艦
１２隻

・通商破壊用潜水艦

巡潜４型級

概要
マル二計画で建造された中型潜水艦。
開戦時には多少旧式化していたが、それでも誘導式５３．３サンチ酸素魚雷によるアウトレンジ攻撃で連合軍の輸送船団に少なからぬ損害を与えた。

武装
４０ミリ砲×１
２０ミリ機銃単装×２
５３．３サンチ魚雷発射管１型×４

速力
水上１５．９ノット
水中６ノット

同型艦　８隻
伊２１～伊２８

巡潜５型級
概要
マル三計画により建造された通商破壊用潜水艦。
新型の発射管を装備したことにより魚雷発射時の静粛性が上がった。

武装
８．８サンチ砲×１
２０ミリ機銃連装２基４門
５３．３サンチ魚雷発射管２型×８

速力
水上１５．６ノット
水中８ノット

同型艦　１２隻
伊２９～伊４０

巡潜６型級
概要
マル四計画により建造された通商破壊用潜水艦。
バッテリーも最大出力を犠牲にして連続使用時間を延長したものになっている。
さらに、新設計の船体構造を用いており、水中速度が上がっている。

武装

８．８サンチ砲×１
２０ミリ機銃連装２基４門
５３．３サンチ魚雷発射管２型×８

速力
水上１５．６ノット
水中１１．５ノット

同型艦　１６隻
伊４１～伊５６

・艦隊攻撃用潜水艦
攻潜１型級
概要
マル三計画により建造された中型潜水艦。
艦隊攻撃用に威力の高い艦船用の６１サンチ酸素魚雷を搭載した。

武装
８．８サンチ砲×１
２０ミリ機銃連装２基４門
６１サンチ魚雷発射管２型×６

速力
水上１７．３ノット
水中８．４ノット

同型艦　１２隻
呂１～呂１２

攻潜２型級
概要
マル四計画により建造された艦隊攻撃用中型潜水艦。
今までの潜水艦とは違って水中速力が向上している。

武装
８．８サンチ砲×１
２０ミリ機銃連装２基４門
６１サンチ魚雷発射管２型×６

速力
水上１５．５ノット
水中１２．９ノット

同型艦　２４隻
呂１３～呂３６

・標的艦
能登級
概要
マル三計画で建造された標的艦。
巡洋艦並みの速力を持ち、主に航空機の雷爆撃訓練の目標となった。
この艦で訓練を受けた搭乗員や艦長は、太平洋戦争で活躍することになる。

武装
なし

排水量
一万二千トン
速力　３２ノット
同型艦
８隻

・工作艦
大津級
概要
マル三、四計画で建造された新型工作艦。
工作艦は以前は旧式戦艦を改装して代用していたが、性能の不足により新規に建造することとなった。
主にトラックやパラオなどの前線基地に配備され、艦艇の応急修理を受け持った。
武装
１０サンチ両用砲６５口径連装３基６門
排水量
一万七千トン
速力
２５ノット
同型艦
８隻

霜月「以上で艦艇の解説は終わりです。」
宝鶴「今後まったく出る予定はないけどとりあえず出してみたって感じね。」
霜月「まあ、そうですね。ひょっとしたら名前すら出ないかも……」
バキューン！
霜月「おわっ、危ない！」
？？「ちっ、外したか……」
三笠「あ～あ、今ので完全に彼女たちから恨まれたわね。」
霜月「なっ、なるべく出すように善処いたしますので！」
宝鶴「それで次はなに？」
霜月「次は偵察機や輸送機といった裏方的な航空機を紹介します。」
宝鶴「ここを読んでもつまらん！と言う方は下にこの作品の設定などが載っているので、せめてそれだけは見てください。」
三笠「それでは、レッツゴー！」

・陸上偵察機
三菱　零式陸上偵察機
概要
帝國軍では唯一液冷エンジンを搭載している。
主翼には層流翼が採用され、胴体も空気抵抗の少ない流線形となっている。
この機は偵察専門のために空中管制はできないが、７００ｋｍ／ｈを超える速度と上空１万３千メートルまで上昇できる性能があり、戦略偵察機として使用された。
１１型

武装
１２．７ミリ機銃×１、電探１基
発動機
ハ－１３０－３型（二段三速、排気タービン付き）液冷２３２０馬力　×２
最高速度
７１３ｋｍ／ｈ
航続距離
５３００ｋｍ
上昇限度
１万３千７百メートル

・輸送機
九七式双発輸送機
概要
ダグラスＤＣ－３の帝國軍型で、エンジンや機内装備を国産のものに変更した。
太平洋戦争で最も活躍した輸送機。
空挺降下や、人員・兵器輸送など多種多様な任務をこなした。

２１型
武装
１２．７ミリ機銃×１
搭載量
貨物５ｔまたは兵員３２名
発動機
ハ－９２－１型（二段三速）空冷１５１０馬力×２
最高速度
４０２ｋｍ／ｈ

航続距離
２６００ｋｍ
上昇限度
８千７百メートル

九八式四発輸送機
概要
九七式双発輸送機では輸送できないものを運ぶために開発された。
太平洋戦争では飛行機のエンジンや部品など、戦線を維持するのに
重要なものを運んだ。

２１型
武装
１２．７ミリ機銃×４
搭載量
貨物７．８ｔまたは乗客６０名
発動機
ハ－９２－１型（二段三速）空冷１５１０馬力×４
最高速度
４３２ｋｍ／ｈ
航続距離
３０００ｋｍ
上昇限度
８千９百メートル

一式六発輸送機
概要
空挺作戦用に作られた輸送機。

完全武装の兵員を１５０名乗せられ、さらには飛行場間の輸送に限るが軽戦車も乗せることができる。

２１型
武装
１２．７ミリ機銃×４
搭載量
兵員１５０名または軽戦車一両
発動機
ハ－１２２－３型（二段三速、排気タービン付き）空冷２１９０馬力
最高速度
４１２ｋｍ／ｈ
航続距離
３５００ｋｍ
上昇限度
７千９百メートル

霜月「ようやく終わった・・・・・」
三笠「そんなの書かなくていいから早くわたしの外伝書いてよ。」
宝鶴「最近わたしの登場頻度低いんだけど。」
霜月「ごめんなさい。三笠さんの外伝はネタが思い浮かばないんです。」
三笠「いっぺん、死んでみる？（ニコッ）」
三笠は作者に軍刀をつきつけた。
霜月「ひぃっ！すみません！」
宝鶴「みっ、三笠さん落ち着いて！作者殺したら外伝なくなっちゃいますよ！」
三笠「それもそうだね。」

宝鶴「さて、次は本作の設定です。何で今まで書かなかったは聞かないで下さいね。」

◎大日本帝國の状況

・鉄・石油などの資源がすべて自国で取れる。
・人口が忠実よりも多い（１９４１年当時）。
・日本はポーツマス条約で満州での権益を放棄する代わりに、樺太全土と千島列島を領有している。
・日本の領土は本州、四国、九州、北海道、台湾、樺太、千島列島、遼東半島、グアム島を除くマリアナ諸島、トラック、マーシャル諸島、パラオ、瀋陽あたりまでの満州（中国と国境を接している）。
・なお、朝鮮を一時期併合していたが、採算がまったく取れないことが判明したため、自主独立をさせて同盟を結んでいる。
・現在、ドイツとは技術協定を結んでいるが、同盟には至ってはいない。タイ、中国国民党、韓国とは同盟を組んでいる。

◎航空隊の編成について

1．戦闘機
戦闘機分隊は戦闘機２機で構成され、分隊が二個集まると小隊となる。
小隊が二個集まると中隊、中隊が三個集まると大隊となり、一個大隊で２４機である。
一個航空隊には二個大隊と一個中隊が配備され、一個中隊は予備となる。
一個航空隊の定数は５６機である。

2．爆撃機または攻撃機

爆撃機小隊は爆撃機４機で構成され、小隊が二個集まると中隊となる。
中隊が三個集まると大隊となり、一個大隊で２４機である。
一個航空隊には二個大隊と一個中隊が配備され、一個中隊は予備となる。
一個航空隊の定数は５６機である。

◎近衛航空隊について

近衛航空隊とは戦闘機のエリートパイロットを集めた飛行隊で、搭乗員は全員防衛大学校を卒業している。
東京に本部がある近衛第一航空隊と京都に本部がある近衛第二航空隊がある。
普段の任務は帝都と京都御所の防空であるが、平時にはアクロバット飛行も行う。
定数は各隊２４機で、機種は汎用戦闘機と局地戦闘機が一人につき一機ずつあるという贅沢な装備である。

◎搭乗員の評価

彼方「どうやらここは僕と菅野さんが説明することになったらしいです。」
菅野「おお～、これが『超空間』ってやつか。はじめて見たな。」
彼方「ほら、菅野さん。今から読者の方々に説明するんですから。」
菅野「おお、すまんすまん。」
彼方「さて、搭乗員の評価と聞いて疑問に思うかもしれませんが、要は搭乗員のレベルの事です。」
菅野「例えば『あいつは技量Ｄだから下手糞だ。』とか『あの部隊

は技量超Ａばかりの精鋭部隊だ』とかいう風に作中で使う、って作者が言ってたな。」
彼方「まあ、下の解説を読めば分かるとおり、上に行くにつれて技量が高いってことです。」
菅野「もちろん俺は技量超Ａだけどなっ！何せ・・・・・」
彼方「ほら、菅野さん！それは秘密だって言ったじゃないですか！」
菅野「ああ、そういえば作者にキツク言われてたっけな。」
彼方「まったく。それでは本編の方もよろしくお願いします。」

技量超Ａ・・・撃墜数２０機以上の超エース。忠実の坂井氏や西沢氏レベル。
技量Ａ・・・エースまたは飛行時間千時間以上の搭乗員。部隊の先任士官やたたき上げの下士官レベル。
技量Ｂ・・・飛行時間五百～八百時間クラスの搭乗員。ようやく一人前。出撃に参加できる。
技量Ｃ・・・飛行時間三百～五百時間クラスの搭乗員。まだまだ半人前。緊急時のみ出撃に参加できる。
技量Ｄ・・・飛行時間百～二百時間クラスの搭乗員。戦闘には覚束ないレベル。
技量Ｅ・・・飛行時間百時間未満または搭乗員基礎過程卒業直後。戦闘は到底無理。

※１これはあくまでも目安である。そのため技量Ｃの基準でも人によって技量Ｂになったりすることもある。
※２エースは撃墜５機以上。

霜月「さて、次は帝國の艦艇建造計画を簡単にまとめたものです。」
宝鶴「他にも多数の補助艦艇が建造されてますが、作者が書くのが

めんどいので省略する、と言ってました。」
三笠「チッ、使えないわね……」
霜月「あっ、あくまでも早見表ですから。」
宝鶴「それじゃあいってみよー！」←ヤケクソ

◎艦艇建造計画

・第一次海軍軍備拡充計画（通称マル一計画）

新規建造

戦艦
扶桑級４隻
巡洋戦艦
金剛級４隻
駆逐艦
朝霜級１６隻（後に二等駆逐艦に降格）
江風級８隻（後に二等駆逐艦に降格）
潜水艦
巡潜１型潜水艦４隻（開戦前に解体）、巡潜２型潜水艦８隻（後に訓練艦となる）

改装
戦艦
河内級２隻

・第二次海軍軍備拡充計画（通称マル二計画）

新規建造

戦艦

長門級８隻

空母

鳳翔

重巡

妙高級４隻

軽巡

天龍級４隻

球磨級４隻

駆逐

峯風級１２隻（後に二等駆逐艦に降格）

潜水

巡潜３型潜水艦８隻（後に訓練艦になる）

巡潜４型中型潜水艦４隻

改装

巡洋戦艦→戦艦

金剛級４隻

・改第二次海軍軍備拡充計画（通称改マル二計画）

新規建造

空母

蒼龍級２隻

建造中止

戦艦
長門級２隻

改装
戦艦→空母
長門級２隻
戦艦→標的艦
河内級２隻、鞍馬級２隻

売却

戦艦
薩摩級２隻（ギリシアへ売却）
鞍馬級２隻（タイへ売却）
その他旧式化した艦艇は外国に売却又は廃棄処分。

第三次海軍軍備拡充計画（通称マル三計画）

新規建造
戦艦
越後級４隻
空母
翔鶴級４隻
重巡
高雄級８隻
軽巡
長良級８隻
駆逐艦
秋月級１２隻

長月級２４隻
潜水艦
巡潜５型潜水艦１２隻
巡潜６型潜水艦８隻
標的艦
能登級８隻
工作艦
大津級４隻

第四次海軍軍備拡充計画（通称マル四計画）

新規建造

戦艦
Ａ－１５０級４隻
空母
大鳳級４隻、幻龍級４隻
重巡
朝日級１２隻
軽巡
長良級４隻
一等駆逐
朝潮級１２隻
夕雲級２４隻
綾波級３６隻
潜水
巡潜６型潜水艦１６隻

第一次戦時緊急海軍拡充計画（通称第一次マル急計画）

新規建造

戦艦
Ａ－１６０級４隻
正規空母
改幻龍級１２隻
軽空母
祥鷹級４隻
重巡
改朝日級８隻
軽巡
阿賀野級１６隻
吉野級８隻
一等駆逐
朝霜級５６隻
神風級３６隻
二等駆逐
甲級８０隻
潜水　巡潜７型潜水艦４４隻、巡潜８型潜水艦１２隻

霜月「ふぅ、ようやく終わった。」
三笠「つかれた～。」
宝鶴「以上で説明は終わりです。ご清聴ありがとうございました。」

間章「帝國軍兵器紹介その2」（後書き）

霜月「なっ、何だこの空間は！？」

三笠「今日は作者に恨みがある艦魂に集まってもらったわ。」

幻龍「残念ながら零戦先生の艦魂は次回ということになるわね。」

仙龍「ウチもほっとんど出させてもらえへんからな。」

慧龍「姉さんに呼ばれたのでしかたなく来てみたら・・・・・これも自業自得です。」

幻龍「あっ、こんなところにあらすじの紙が落ちてる！」

霜月「あっ、それはダメですっ！」

三笠「うっさい！」

ゲシッ！

霜月「ぐはっ！」

幻龍「・・・作者、いっぺん死んでみる？」

仙龍「ホンマや！ウチら途中で出番なくなるやん！」

慧龍「なになに・・・彼方さんが××ってなって、××に××して《以降編集により削除》××になるのね。」

三笠「わたしなんて出る予定まったくないじゃないのよ！」

幻龍「しかも《編集により削除》だし！メ《編集により削除》なんて！納得できないわ！」

霜月「ひぃー！お助け！」

三笠「黙れ・・・黙れ。これ以上、口を、利くな！」

ゲスッ！

霜月「あべしっ！」

作者は気絶した。

幻龍「食らえっ！デ○ビーム！」

仙龍「行けっ！乱○蓮！」

三笠「ど○るみるきぃぱ○ち！」

慧龍「最後のってマ○ラブ知らないとわからないんじゃ・・・・・」

ズバババーン！

霜月「ぐふっ、燃え尽きたよ・・・真っ白にな。」

バタン！

三笠「こうして作者は灰になったとさ。」

翔鶴「うわ・・・ひどすぎませんか？」

三笠「いいの♪さっさと外伝書かないからだよ。」

翔鶴「・・・（三笠さん怖い・・・）」

宝鶴「（ほっ、ようやく終わった。）」

幻龍「さて、次回はいよいよ米太平洋艦隊主力の出撃です。」

慧龍「零戦先生、申し訳ございませんが、作者の都合により、次の話で艦魂を招待させていただくことになりました。」

三笠「まったく、ネタの出ない作者なんて屑と同じだね♪」

錦鶴「ひぃぃ！三笠さん怖いです・・・」

第十一章「決戦準備」（前書き）

どうも、霜月です。
更新が遅れて本当にすみません。
その分、文章量を前回より増やしましたのでどうかご容赦ください。

それと零戦先生、お待たせしました。
ようやく先生の艦魂を招待できました。
遅くなって申し訳ありません。

かなり言い訳がましいですが、僕は現在コンクールのために一日の殆どを部活に費やしているので、正直執筆時間が取れてません。
なので、次の更新は二月の半ばごろと大分遅い予定ですが、どうか見捨てないでくださいませ。
それでは、本編へどうぞ。

第十一章「決戦準備」

大日本帝國の首都である東京から約６千キロ南に行った所にあるトラック環礁には、第二艦隊が停泊しており、開戦した現在においては更なる増援がこの地に到着する予定である。
そして、今まさに帝國海軍が誇る第一艦隊は、トラックへの増援として環礁と外海をつなぐエバリッテ水道に差し掛かろうとしていた。

「加賀(かが)っ、もうすぐトラックだねっ！」

ツインテールの小さな少女が、すぐ近くに迫った島影を見ながら隣の少女に言う。
彼女は帝國軍の主力空母である『土佐(とさ)』の艦魂である。

「ああ、そうだな。」

加賀と呼ばれた少女は土佐の妹である。
彼女は姉とは対照的に背が高く、大人びた体つきをしている。
腰には二本の刀を差しており、軍服を着ている事を除けばまるで女武者の様な出で立ちである。

「翔鶴や瑞鶴たちにも久しぶりに会えるねっ！」

「うん。私も楽しみだ。」

そう言って加賀は僅かに微笑む。

「む～、加賀ってば反応がつまんない～」

「しょうがないだろう、わたしはこういう性格なんだ。それを今更かえることはできんよ。」

土佐は加賀の反応にむくれるが、加賀はそんな土佐の抗議をサラリと受け流す。

その時、不意に二人の耳に航空機特有のの爆音が聞こえてきた。

「ん？・・・加賀、見て見てっ、陣風だよっ！あれは瑞鶴の航空隊かなぁ。」

加賀は土佐に言われて上を見ると、八機の陣風が見事な編隊を組んで飛行していた。

垂直尾翼に『瑞鶴』航空隊の標識をつけた陣風たちは、だんだんこちらに向かってきている。

二人がそのまま見つめていると、陣風たちは唐突にその場で旋回を始める。

甲板にいる兵員たちが何事かと思って陣風たちに注目すると、彼らは雁行編隊を二組のフィンガーチップ（戦闘機四機で組む編隊。視界がよいので見張り能力に優れる。）に組み替えてアクロバット飛行を始める。

彼らは編隊を組んだままの宙返りやロール（横転）などの高等技術を、まるで糸で繋がっているような機動で行っている。

それらを見ていた兵員から拍手や歓声が湧き、中にはどこから取り出したのか日の丸の旗を振る者までいた。

「ほう、中々の技量だな・・・・・うちにも欲しいくらいだ。」

「すご～い！まるで『源田サーカス』みたい！」

陣風たちの機動に感心している加賀の横では、土佐が子供みたいに

目をキラキラさせて空の芸術に見入っている。
ちなみに『源田サーカス』とは、現在霞ケ浦教育航空隊の教育隊長である源田実(げんだみのる)中佐が隊長だったアクロバット飛行隊である。
残念ながら開戦が差し迫ったために先月に解散してしまったが、当時は達人揃いの飛行隊として名を轟かせていた飛行隊である。

拍手喝采の嵐の中で演技を一通り終えた八機の陣風は、編隊を横一列に組み直して低空飛行で艦隊の上空を航過する。
加賀は周りを見渡すと、飛行甲板にはいつのまにか非番の兵士たちが集まっていて、陣風に声援を送っている。

加賀は無意識に小隊長の標識を付けた機体を目で追っていた。
その機体の垂直尾翼に書かれた標識には、彼が『瑞鶴』戦闘機隊の第三中隊に所属している事を示している。
その小隊長機のパイロットは『加賀』の上を通過するときに彼女に向かって手を振ってきた。
加賀は思わず手を振り返す。
すると、そのパイロットはまるで加賀の仕種を見ていたかのように微笑み、そのまま遠くに去ってしまった。

「凄かったね〜！あれ、加賀どうしたの？ぼーっとして。」

土佐は陣風が去っていった方角を見続けている加賀の方を覗き込んでくる。

「ああ、ちょっと気になった事があったのでな。」

加賀は無意識に土佐から目を逸らす。
すると、土佐はニヤニヤして加賀の目線の方向に動いて彼女の視界に入ろうとする。

「あぁ～、さては小隊長の標識を付けてた機体のパイロットに惚れたんだぁ～。」

「さあな。ただ何となく変な感じがしただけだ……」

加賀は再び目線を逸らし、体を反対側に向けて言う。

土佐は再び彼女の視線の先に回りこむ。

「ニヒヒ、もしかして恋だったりして。」

「ひょっとするとそうかもな。」

土佐のからかいに加賀はめんどくさそうに今度は上を向いて答える。

「え〝……えぇー！？」

「どうしたというのだ。わたしだって恋くらいはしてもよいと思うが。」

驚く土佐に加賀は何を言っているんだ、といった風に言う。

「ちょっと加賀、どうしちゃったの！？いつもと違うよ！ねえ、正気に戻ってよ！」

いつもと違う加賀を不安に思った土佐は彼女を思いっ切り揺する。

加賀はそんな姉の首根っこをめんどくそうに摘むと、そのまま土佐を高々と持ち上げる。

「うわっ、やめてよ！放してよ！」

土佐はジタバタもがくが、残念ながら襟首を掴まれているために加賀には殆ど効果がない。

「本当に放していいのか？」

「あたりまえでしょ！早く放してよ！」

パッ・・・ドスン！

「いった～い・・・もう、なにするのよ！」

土佐はそう言って加賀を睨む。

だが、その幼い外見からかまったく怖くない。

「姉上が放せと言ったから放しただけだ。」

加賀はさっきとは反対にニヤニヤしながら言う。

「うぐっ・・・でっ、でもこんなに乱暴にやらなくても・・・・・」

「だから本当にいいのか、と聞いたんだ。」

「む～・・・ふんっ、もう加賀なんて知らない！」

土佐はぷいっと顔を背けて自分の部屋へ戻ってしまった。

（少し虐めすぎたかな。後で機嫌を直してもらわないと・・・・・）

加賀はそう苦笑すると、次の瞬間には先程の事は頭からシャットア

ウトして、あのパイロットについて考え事をしていた。

（それにしても、なんだこの感じは・・・何か愛おしくて懐かしい、そして悲しい感じがする。私はずいぶん前にあの人と会った事があるはずだ・・・・・だが、どうしても思い出せない。思い出せないのだ・・・・・）

加賀はそう思いながらトラックの美しい海を見ていた・・・・・

１２月１６日午後１時　オアフ島真珠湾

真珠湾の港から軍楽隊が奏でる『星条旗よ永遠に』に送られてアメリカが誇る太平洋艦隊が出撃していく。

その艦艇の中でも特に目立つのが、ワシントン条約失効後に建造された『コロラド』級戦艦である。

『コロラド』級は１６インチ５０口径三連装砲を前に二基、後ろに一基装備し、２９ノットの速度とダニエルズ・プラン型戦艦譲りの重防御という画期的な艦である。

『コロラド』の次に錨を上げたのは条約型戦艦の『テネシー』級である。

『テネシー』級は１６インチ４５口径連装砲四基を前後二基ずつ装備しており、ダニエルズ・プラン型とは一線を画した２８ノットの速力と列強の水準以上の防御を兼ね備えている。

他にも『ニューメキシコ』級や『ペンシルベニア』級など合衆国海軍主力の戦艦が次々と錨を揚げて出航していく。

戦艦たちの後に錨を揚げたのは、二隻の『レンジャー』級正規空母

と三隻の『ボーグ』級護衛空母である。
だが、これらの五隻は攻撃機の類は一切搭載しておらず、格納庫はおろか甲板一杯まで合衆国の主力艦戦であるグラマンＦ４Ｆ戦闘機を積んでいた。

最後に殿軍の駆逐艦が錨を揚げて湾外に向けて動き出す。
その駆逐艦は先に行く艦たちと合流すると、そのまま真珠湾から遠ざかっていく。
合衆国の浮かべる城たちは、己が国の期待を背負って水平線に消えていった……

数時間後、オアフ島沖

四日前に米機動部隊を捕捉した『伊－４９』の橋本艦長は、引き続き真珠湾から出撃してくる米太平洋艦隊を捕捉する為に哨戒を行っていた。

「６０度の方向に艦影あり！艦種は戦艦、巡洋艦、駆逐艦どれも多数！太平洋艦隊の主力と思われます！」

潜望鏡を覗いている副長の小原（おはら）　勇人（ゆうと）少佐は後ろを振り返って叫ぶ。

「よし、すぐに統合参謀本部に連絡だ！」

橋本は大きく頷いてすぐさま指示を出す。

「了解！」

通信長がすぐさま暗号を組みに下のフロアにある通信室に向かって

梯子を降りていく。
橋本はそれを一瞥すると、潜望鏡で米艦隊の動向を覗く。
今のところ、彼らはこちらには気づいていないようだ。
（う～む、監視任務を早く終わらせて輸送船の攻撃をしなければな……）
米艦隊を見ながらそう考える橋本の後ろには、彼をじっと見つめる一対の目があった。

数分後、トラック連合艦隊臨時司令部

普段は市ヶ谷の防衛省にある連合艦隊司令部は、予想される決戦に向けてトラックに進出していた。
そこでは、通信兵や各軍の士官たちがおびただしい情報を処理しており、ここが彼らの戦場であることを伺わせる。
その時、一人の通信士官が連合艦隊司令長官の山本（やまもと）　五十六（いそろく）大将のところへ一通の電文を持ってやってきた。
「長官、哨戒中の『伊－４９』より緊急電です！
『敵艦隊見ユ。艦種ハ戦艦、巡洋艦、駆逐艦多数ナリ。太平洋艦隊主力ト思ハレル。』以上です！」
連合艦隊司令長官である山本は、電文を聞いていよいよ決戦か、とため息をつきながら思った。
「そうか……宇垣君、米機動部隊の動向は？」
「真珠湾を出港して以来、依然居所は掴めません。

おそらくはここかマリアナの航空基地のを奇襲する腹積もりであると思われます。」

参謀長である宇垣（うがき）　纏（まとめ）少将は表情を変えずに、教科書的な予想を山本に言う。

宇垣はその無表情から『黄金仮面』とあだ名されているのだが、実際は堅実な参謀として非凡な能力を持っているために、山本にヘッドハンティングされてこの役職に就いている。

「長官、もしや敵は内地・・・いや、帝都を奇襲してくる可能性がありますぞ。」

そう言ったのは黒島（くろしま）　亀人（かめと）大佐である。

彼は連合艦隊の先任参謀であり、日ごろの奇行から「変人参謀」とあだ名されていて宇垣とは正反対の人物であるが、山本は常識にとらわれない斬新なアイディアを出す彼を高く評価していた。

「ふむ、まずいな・・・よし、ここととマリアナの哨戒網を強化するように連絡してくれ。

あと、内地の航空隊にも近海の厳重な警戒を行うように命令させてくれ。」

「はっ！」

通信士官はそう言って去ってゆく。

山本はそれを一瞥すると、目を閉じて思考の海に沈む。

（黒島君が言っていた『真珠湾奇襲作戦』は没になってしまったが、中々よくできた手だ。

『国東』によるとほぼ確実にそれは成功するらしいしな。

もしかすると、米軍にもそれと同じようなことを考える者がいてもおかしくはない筈だ。
敵は内地、トラック、マリアナのいずれかに来る。あの大統領なら確実に本土に艦隊を送るだろう。
もう少し関東地方に戦力を配置しなければいけないな……）

「よし！ここにいる１２１航空隊を厚木に配置だ！急げ！」

山本は目をカッと見開いて連絡係の士官に告げる。

「長官っ、トラックへの奇襲の可能性がある以上、戦闘機部隊の引き抜きは……」

宇垣や他の参謀たちははあわてて山本を止めようとする。
参謀ではない士官ですら山本のほうを驚愕の目で見ている。

「長官、さすがですぞ！」

だが、唯一山本の行動に賛同したのは黒島であった。
黒島はわが意を得たり、といった顔で喜んでいたが、それを見る周りの視線はとても痛い。

「反対意見は聞かん！いますぐ１２１航空隊に連絡しろ、急げ！」

山本が気違いじみた命令を発するのを見て、宇垣ら参謀は《長官が黒島に毒されてしまった……》と心の中で涙を流していた。

「はっ、はい！すぐに連絡いたします！」

命令を受けた士官は一瞬怪訝な表情をするが、命令と割り切って連

絡に向かう。
山本が発したこの指令は、彼の神算鬼謀の成せる業なのか、はたまた本当に山本が黒島に毒されて変態になってしまったのだろうか？
それは今の段階では神のみが知っていることであった……

第十一章「決戦準備」（後書き）

霜月「ようやく…本当にようやく第十一章を上げました。読者の方々には本当に申し訳ないと思っております。」

三笠「作者、外伝の更新は？」

霜月「現在、三章と四章が完成しており、二章は執筆中です。」

三笠「ああん？あんたなにやってんのよ。いっぺん…死んでみる？」

宝鶴「地〇少女？」

加賀「それはどうでもよい。それよりこの更新頻度はなんだ？貴様はやる気があるのか？」

霜月「ひぃっ、許して下さい！コンクールが近いのでマジで執筆する時間がないのです！」

土佐「えっ、コンクールってもう終わったんじゃなかったっけ？」

霜月「それはアンサンブルの方です。そっちは部活のメンバーで出ていたんですが、今回はソロコンクールで個人で出るやつです。」

宝鶴「それで時間が無いって訳ね。」

加賀「ふんっ、時間がないなど笑止千万。ソロコンクールに出なければよいではないか。」

霜月「それだけは勘弁してください！でないと今部活やってる意味なくなるんで！」

土佐「まあまあ、加賀。作者だっていろいろあるんだから。」

加賀「むっ、姉上が言うなら仕方が無い。ふんっ、せいぜい姉上に感謝するのだな。」

??「あれ、ここはどこなのかしら？たしかここらへんの筈なんだけど・・・・・」

??「姉さん・・・ここどこ？怖い・・・・・」

??「はいはい、よしよし。それにしても、わたしたち遭難したのかしら？」

加賀「ん？貴様らは誰だ？」

霜月「ちょっ、加賀っ！その方たちは零戦先生の『新太平洋戦争』に出てらっしゃる艦魂だぞ！」

??「あら、あなたは？」

霜月「はいっ、僕は霜月龍牙で『カナタの幻想』の作者であります！」

瑞鶴「よかった・・・ようやくたどり着いたみたいね。あっ、わたしは瑞鶴よ。」

加賀「わたしは加賀です。それで、後ろにいる子はわたしの妹の土佐です。」

土佐「よっ、よろしくお願いします……」

加賀（霜）「うむ、よろしく。申し遅れたがわたしは加賀という。貴殿と同じ名前だな。」

土佐（霜）「わたしは土佐だよっ！よろしくねっ！」

宝鶴「わたしは宝鶴です。それでこちらが」

三笠「三笠です、よろしくね☆」

加賀「こちらの世界のわたしは宝塚の男役の方みたいですね。」

加賀（霜）「うむ。皆によく言われておるぞ。それにしても貴殿もなかなかの美人ではないか。」

加賀「うふふ、ありがとうございます。ほら土佐、せっかく他の作者さんのところへ来たんだから何か話しなさいな。」

土佐「はいっ……あっ、あの……皆さん好きな人っていますか？」

瑞鶴「ちょっ……あんた、なに唐突にそんな事聞くのよ！？」

土佐「ひっ……すみません……」

加賀（霜）「まあまあ、瑞鶴殿。そう怒らんでもよいではないか。」

三笠「そうだよ。他の作者さんの艦魂とこんなこと話すのもいいと思うしね。ちなみにわたしは・・・・・」

宝鶴「ちょっ！ここでのネタバレはまずいですって！」

加賀（霜）「ゲフン、ゲフン！あー、わたしはそういうのはいないな。」

土佐（霜）「加賀ったら嘘ばっかり。本当はあの小隊長さんが・・・・」

加賀（霜）「そうだ！宝鶴殿は誰かおるのか？」

宝鶴「えっ、わたし！？わたしは別にいないわよ。」

三笠「ふぅん。じゃあ瑞鶴さんたちは誰かいるの？」

加賀「わたしは・・・とくにいないですね。土佐？」

土佐「はい・・・わたしもとくにはいないです。」

瑞鶴「わたしは、将斗・・・かな？」

三笠「将斗さんかぁ・・・ライバル多くて大変でしょ？」

瑞鶴「まあ、そうね・・・でも、わたしは絶対諦めないわよ。」

加賀（霜）「うむ、そうか・・・頑張れよ。我々も応援しているからな。」

瑞鶴「うん、ありがとう……」

霜月「おっと、もうすぐ時間のようですね。」

三笠「う～ん、時間が経つのは早いね。…みんなもあっちで頑張ってね。」

土佐（霜）「あと恋の戦争もだよっ！そうだよね、加賀？」

加賀（霜）「姉上、余計なことは言うな。…貴殿らも達者でな。」

宝鶴「それじゃあ、皆さんも元気でいてくださいね！」

加賀「ありがとうございます。そちらの方も頑張ってくださいね。」

土佐「…ばいばい。」

瑞鶴「ありがとう。せいぜい他の連中に負けないように頑張るわ！」

霜月「あっ、そうだ。ちょうど今佐世保バーガーがあるのでよろしかったら皆さんで食べてください。」

加賀「こんなにたくさん…霜月さん、ありがとうございます。」

三笠「もう本当に時間がないわね。それでは、三人に対し敬礼っ！」

ザッ！！

瑞鶴「こちらも答礼するぞ。」

ザッ！！

瑞鶴ら三人が答礼をした瞬間、彼女らの体は光につつまれて消えてしまった。

土佐「行っちゃったね……」

加賀「ああ、そうだな。（ようやく《霜》がとれたな……）」

三笠「さて……作者。さっさと外伝をｕｐしなさい。」

霜月「無理。というか今書いていられることが奇跡に近いんで。」

三笠「大丈夫だよ、作者だし。あっ、今月中にできなかったら……どうなるかわかってるよね？」

霜月「ハイ、ワカリマシタ。」

加賀「さて、次回は、っと……おい、作者。貴様はなにも考えてないのか。」

霜月「いや、そんなはずは……」

加賀「問答無用。貴様を叩き切ってやる。」

霜月「そっ、それは空圧式退魔居合刀の舞蹴拾弐號（まいけるじゅうにごう）ですか？」

加賀「いかにも。では、覚悟しろよ。」

霜月「ぎゃぁぁっっ！！！」

ザシュッ！

土佐「中に誰もいませんよ。」

宝鶴「いや、それ違うから。あっ、こんなところに紙が。」

土佐「なになに・・・次回は決戦の前哨戦だって。次の更新は二月の半ばぐらいかなぁ。」

宝鶴「それでは、ご意見・感想をお待ちしております。」

第十二章「運命の出会い、そして再開」（前書き）

どうも、霜月です。
部活関係がいろいろ忙しかったので約一月半ぶりの更新となってしまい、申し訳ありません。
まだまだ部活の行事ラッシュが続くので、なかなか更新できないと思いますが、これからもよろしくお願いします。

《キャラクター紹介》

土佐
所属
大日本帝国海軍第一艦隊第三航空戦隊
年齢
１７歳（１９４１年１２月８日現在）
誕生日
３月３日
身長
１３８ｃｍ
外見年齢
１１歳

現役の正規空母では日本最古参の艦魂。
いつも元気いっぱいで艦魂たちのムードメーカー。
妹の加賀にはその子供っぽい身長と体型をよくからかわれており、本人もそれがコンプレックスになっている。
外来語が苦手。

加賀
所属

大日本帝国海軍第一艦隊第三航空戦隊
年齢
１７歳（１９４１年１２月８日現在）
誕生日
３月３１日
身長
１７６ｃｍ
外見年齢
１９歳

土佐の妹。
よく姉の土佐をからかっているが、誰よりも彼女のことを心配している。
その男らしく凛々しい姿から多くの艦魂に慕われている。
よく「姉様」「姉御」などと呼ばれているが、本人はあまりその呼ばれ方が好きではないらしい。
彼方を軍人として尊敬しているが、僅かながら恋愛感情らしきものも持っている。

第十二章「運命の出会い、そして再開」

トラックの夏島飛行場に一機の九七式双発輸送機が着陸しようとしている。
機体は何の危なげも無くアプローチに入り、滑走路に着陸しようとする。
その着陸は驚くほどの静かさで、機内の人々に殆どその瞬間を感じさせないものであった。

（なかなか上手いじゃない。）

機内の一番前の席に座っていた女性は、機長の腕に対しそう評価した。

機体はしばらく滑走した後、指揮所から少し離れたところで停止した。
それに合わせて機体後部のドアが開き、そこからタラップが降ろされる。
そこからは整備特技章を付けた兵たちがぞろぞろと降りてゆく。

「ふぅ、やっと着いた。まったく、内地は冬なのにここって暑いわね。」

彼女は12月なのにギラギラと輝く太陽に、一瞬顔をしかめて輸送機から降りた。

（そういえば、この機長って民間から徴用されたんだっけ。どうりで着陸が上手いはずだわ。）

彼女はふと、そのことを出発前に聞かされたのを思い出した。
輸送機から降りると、彼女は真っ先に駐機場とハンガーを見渡す。
そこには数十機の『陣風』が並んでおり、それぞれに整備兵が取り付いて整備を行っていた。
彼女はそれらを見ながら着任報告をするために指揮所に向かう途中、『陣風』の列線に見知った機体を探す。
だが、そこには彼女が求める機体は無かった。
彼女は少しだけ落胆しながら再び指揮所への道を歩き出す。

と、その時。

４機の『陣風』が彼女の上を見事な編隊を組みながらフライパスした。
彼女は制帽が飛ばされないように抑えながら、『陣風』の小隊長機の機体番号を読み取る。
それを見て笑みを浮かべた彼女は、指揮所への道のりを急ぐ。

飛行機から降りた中で一番最後に到着した彼女は、指揮所の前で待機していた兵たちと合流する。
彼女らの前には、この基地の司令官である小園中佐が凛とした姿勢で立っていた。
彼女は全員が揃っている事を確認すると、姿勢を正して着任報告を始めた。

「横須賀航空隊第一分遣隊整備班、敷島中尉以下１８名は只今をもって夏島飛行場に着任します！」

トラックの艦隊用の泊地では、到着した第一艦隊の艦魂たちが『長

門』の甲板に集合していた。
彼女らはすでに着任式を終えており、久しぶりに会った第二艦隊の艦魂たちと雑談をしている。

「久しぶりね、伊予。」

第一艦隊の旗艦を務めている伊予に話しかけたのは、彼女の先輩である長門であった。

「はい、長門さんも元気で何よりです。」

伊予も顔を輝かせて長門と握手をする。

「ありがとう。で、来て早々仕事の話で悪いんだけど、一航戦（『大鳳』『稜鳳』）と二航戦（『蒼鳳』『准鳳』）の搭乗員は使い物になるの？」

お喋りが好きな長門が雑談を抜きにしてまで聞きたかったのは、つい最近に開隊したばかりの一航戦と二航戦の航空隊の練度であった。
いくら大鳳級の竣工に合わせて海軍が予備の艦載機部隊を編成していたからとはいえ、それでもわずか数ヶ月で４００機以上の搭乗員を揃えるのは不可能であった。
そのために、搭乗員育成学校を出たばかりの者や空軍から転科した搭乗員が、一航戦と二航戦の航空隊の約半分を占めることになったのだ。

「う～ん、微妙ですね。空軍出身の搭乗員はかなりいい所まできていますが、新米となるとまだまだですね。
一応、三航戦（『土佐』『加賀』）や四航戦（『蒼龍』『飛龍』）に協力を要請してベテランを指導に当たらせてはいるのですが・・・

…」

伊予はそう言って言葉を濁す。
どうやら訓練の成果はあまり芳しくないようだ。

「そう……もうすぐ四航戦も着く頃だし、第二艦隊の艦載機部隊とも合同で訓練を行わせたほうがいいわね。」

「そうですね……それが妥当な選択でしょう。」

「じゃあ山本にはそれで話を通しておくわ。もっとも、彼も同じ結論でしょうけど。」

「わかりました。それでは、わたしは仕事があるのでこれで失礼します。」

「うん。それじゃあ、お仕事がんばってね。」

長門はやわらかい笑みを浮かべて伊予に手を振る。

「はっ、失礼します。」

「長門殿。」

伊予が消えた直後、長門は別の艦魂に話しかけられた。

「あら、加賀。私のことはお姉さんと呼びなさいっていつも言ってるでしょ。
戦艦に空母と艦種は違うけど元々私たちは同じ姉妹じゃない。」

長門は加賀の態度に呆れながらも、「姉妹」という言葉を強調する。
「はあ、では義姉上。」
加賀は渋々といった表情で従う。
「一文字余計だけどまあいいわ。で、何か用かしら？」
「先ほどのアクロをやった編隊について聞きたいんだが・・・・・」
「ああ、あれね。『瑞鶴』の菅野少佐が勝手にやった事よ。
まあ、今頃は小園基地司令にこっぴどく叱られている頃だと思うわ。
」
長門は困ったわ、と肩をすくめる。
「菅野少佐というと・・・・・『あの』菅野か？」
加賀は「菅野」と言う言葉に反応した。
どうやら「菅野」と言う名前は帝國内ではかなり有名らしい。
「ええ、そうよ。五ヶ月前にたった８機で４０機以上の敵機を全滅させたあの菅野少佐よ。
そういえば内地の新聞では馬琴の『八犬伝』になぞらえて『空の八犬士』とかいって騒いでいたわね。
まったく、あの『菅野デストロイヤー』には困ったものだわ。」
長門はぶつぶつと菅野少佐の愚痴をこぼし始める。
「そうか・・・・・その事でなが・・・いや、義姉さんに頼みごとがある

のだが……」

加賀はいつもの癖で長門を名前で呼ぼうとするが、長門が怖い目で睨んだので言い直した。

「お姉ちゃん、あのね、加賀はその『あくろ』っていうのをやってたパイロットに一目惚れしたんだって。しかも、その人は艦魂を見ることができるらしいんだって。」

「え〝……」

土佐が誤解を吹き込むと、長門は口をあんぐりと開けて固まってしまった。

「まあ、一目惚れなのは絶対ありえんが……とにかく彼に一度会いたくてな。」

どうやら誤解しているらしい姉の言葉を否定しながら加賀は長門に頼んだ。

「ああっ、加賀もとうとうそんな時期がやって来てしまったのね！お姉さん寂しいわぁ……」

いつの間にか復活した長門がよよ、と泣くまねをする。

「いや、だから違う『みんなー、加賀に好きな人ができたんだってー！』」

加賀がそれを否定しようとすると、土佐が誤解をさらに振りまく。

『えっ……え～っ！！』

「……わたしは、いらない子なんだ……」

加賀はだれも自分の話を聞いてくれないので、地面に《の》を描き始めた。

「おっ、お姉様。これはどういう事ですか！？」

「わっ、わたしというものがありながら……責任取って下さい！」

「ああっ！お姉様の純潔が……」

周りの艦魂たちは次々と加賀に詰め寄ってくる。

「だっ、だから違うと……というより、わたしを…姉と…呼ぶなーっ！」

周りの艦魂が次々に加賀に詰め寄ってくるので、加賀は混乱して刀を抜いて振り回し始める。

「ほらほら、あんたは諌山家の養女じゃないでしょ？
とりあえず刀を納めなさい。じゃないと死人が出るわよ。」

長門が暴れる加賀を取り押さえる。

「はっ、わたしは何をしていたんだろう……つい混乱したからといって刀を振り回すとは……」

加賀はしまった、といったような顔をする。

そして、部屋の隅っこに行って体育座りでぶつぶつと何事かをつぶやき始めた。

「う～ん、落ち込んでいるお姉様も可愛いわぁ。」

下士官服を着た艦魂がうっとりとした表情で加賀を見つめている。他にも数人の艦魂が同じように加賀を見つめている。

「ちょっ、バカッ！駆逐艦、吉野姉さんたちをさっさと連れ去りなさい！」

下士官服を着た艦魂が慌てたように駆逐艦の艦魂たちに命令する。

『了解！』

加賀を見つめていたた艦魂たちは、どこからともなく現れた駆逐艦の艦魂たちに強引に連れて行かれてしまった。

（九頭竜、助かったわ。）

（いえっ、わたしは長門様のためならたとえ火の中水の中。どんなことでもする所存であります！）

（ふふふっ、ありがとう。）

長門は九頭竜と呼ばれた少女と謎のアイコンタクトを交わすと、いまだに《の》を書き続けている加賀の方に向き直った。

「まあまあ、さっきのことは気にしなくていいわよ。で、加賀はその『瑞鶴』の搭乗員に会いたいんでしょ？」

と長門が言うと、加賀はぱっと起き上がった。

「そういえばそうだった。義姉上は何か心当たりがあるのか？」

「まっ、まあね。あなたが会いたい人には心当たりがあるから後で連れて来るわ。」

加賀の勢いに長門は若干引き気味に答えた。

「本当か？ありがとう、義姉上！」

加賀は嬉しそうに長門の手を握る。

『……（姉様に触るな！）』

周り（加賀の崇拝者）からの無言の圧力に、長門は冷や汗を浮かべながら加賀の手を握っていた……

「で、僕はどうしてここにいるんだい？」

彼方は眠そうに欠伸をする。

ちなみに、今は午後１１時である。

彼は就寝中に無理やり瑞鶴にたたき起こされてここに連れて来られたのだ。

「……長門さんの命令。」

瑞鶴は淡々と答える。
だが、彼女はさりげなく彼方と手を繋いでおり、彼女の頬は少しだけ桃色に染まっている……様に見える。
「……あのさ、僕はそろそろ寝ないといけないんだけど。」
「……だめなの？」
瑞鶴は彼方を上目遣いで見つめる。
その目は潤んでおり、行かないでと訴えている……ように見える。
「いや、だめって訳じゃないんだけど……」
「あっ、瑞鶴！こっちこっち！」
彼方が困っていると、一人の士官服を着た艦魂が瑞鶴を呼んでいるのが聞こえた。
「あの、あなたはどこの艦魂ですか？」
「はじめまして、わたしは『長門』の艦魂よ。」
長門はそう言って手を差し出す。
「どうも、僕は山城彼方です。よろしく。」
彼方は長門の手を握る。
「自己紹介も終わったことだし、ちょっとあなたに会わせたい人がいるのよ。」

すると、瑞鶴が長門の制服の裾を引っ張る。

「ん？ああ、瑞鶴へのお礼はあそこに用意してあるからね。」

「……分かった。」

長門が指差す方向を見ると、そこには料理の山がうず高く積まれていた。

瑞鶴は彼方に見向きもせずに料理の山に向かっていく。

「こういう事だったんですか。どおりで瑞鶴があんなに真剣だったん訳ですね。」

彼方はジト目で長門を睨む。

「え～っとそうそう、あなたに会わせたい人がいたっけ。ほら加賀、こっちに来て！」

「ああ、分かった。」

「きっ……君は！？」

彼方は驚いたように加賀を指差す。

「うむ。貴様と直接話すのは初めてであったな。わたしの名は加賀だ。よろしくな。」

そう言って加賀は彼方に握手を求める。

「あっ、ああ、うん。僕は山城彼方っていうんだ。よろしく。」
彼方は動揺しながら加賀の手を握り返す。
「さて、お邪魔虫はこれで退散と行きますか。」
長門はじゃあね～、と笑いながら消えてしまった。
残された二人は戸惑ったようにお互いを見つめ合う。
そして、二人の間に沈黙が降りた。
「そっ、そうだ！山城の活躍はなが・・・いや、義姉上から聞いておるぞ。
なんでもあの『八犬士』の一人だっていうではないか。」
「・・・・・ごめん。悪いけどその話はしたくないんだ。」
彼方はすまなさそうな顔で謝る。
どうやら、加賀は地雷を踏んでしまったようだ。
「そうか・・・・・すまないことをしたな。」
加賀はしゅん、とうなだれる。
「いや、いいんだ。それより、あの時いたもう一人の艦魂はどこにいるんだい？」
彼方はこの空気を何とかするために、あの時に見たもう一人の艦魂について聞いてみた。
「姉上のことか。姉上なら今ごろ・・・・・」

と加賀が続きを言おうとすると、土佐はいつの間にか加賀の隣に来ていた。

「あれっ、この人って加賀がひと・・・・・ひぎいっ！？」

「あ～ね～う～え～、誤解を招くことを言うなとあれ程言っただろうがぁ～」

加賀は殺気を放ちながら土佐の腕を思いっきり握っており、彼女の細い腕はミシミシと不気味な音を立てている。

「ごっ、ごめんなさいっ！もう絶対言わないからっ！だから、腕をっ、腕を離してっ！」

加賀は邪悪な笑みを浮かべると、彼女の腕つかんだまま普通とは逆の方に曲げ始めた。

「痛い痛い痛い痛いっ！！ギブギブギブギブっ！！腕はそっちには曲がらないーっ！！」

「・・・・・加賀、離してあげなよ。」

さすがに見るに見かねた彼方が救いの手を差し伸べる。

「むっ、山城がそういうなら・・・・・」

加賀は渋々といった表情で土佐を掴んでいた腕を放す。

「痛たたた・・・・・もう、そんなんだから加賀は女にしかモテな・・・

…」

「ほぅ、姉上はまたお仕置きして欲しいのか？」

土佐がそこまで言いかけると、加賀は再び邪悪な笑みを浮かべてバキバキと手を鳴らし始めた。

「おっ、お兄ちゃん助けてっ！！」

土佐は咄嗟に彼方の後ろに隠れる。

「ほらほら、二人ともやめなよ。というかお兄ちゃんって僕のこと？」

「えへへっ、だってお兄ちゃんって感じがするんだもん。」

土佐はそう言って彼方の腕に抱きついた。
彼方はその感触に少しだけ頬を赤らめる。

「こら姉上、山城が嫌がっているだろう。」

「別に僕は構わないんだけど……」

「ほらっ、お兄ちゃんはいいって言ってるよ。」

「すまないな。こんな姉だが、面倒を見てくれるとありがたい。」

「ああ、別に構わないよ。」

「む～っ、面倒を見るってわたしが子供だってこと？」

土佐は頬を膨らませながら加賀を睨む。
「まあ、そういうことだな。なんなら一度、自分の体をよく見つめてみたらどうだ？」
加賀は土佐の体を上から下までまじまじ見つめて、意味ありげな笑みを浮かべる。
「ふんっ！どうせわたしは幼児体型だし発育が遅いですよっ！」
そう言って土佐はぷいっと横を向く。
「ははは……ところで、他の艦魂はいないの？」
「ああ。彼女らは会議をしていたり自室で休んでいる頃だろう。」
「そうなんだ。じゃあ、今度彼女たちを紹介してもらってもいいかな？」
「ああ、構わないぞ。」
くいくい
彼方は誰かに裾を引かれたので振り向くと、そこには瑞鶴が立っていた。
「ん？もう料理を食べ終わったの？」
「……（コクリ）」

彼方が先ほどのテーブルを見てみると、あれ程大量にあった料理が跡形も無く消えていた。

「そっか。瑞鶴、悪いけど宿舎まで戻してくれないか？」

「……（コクリ）」

「なんだ、もう行ってしまうのか。」

加賀は少し残念そうだ。

「加賀はさみし……なんでもないです。」

土佐が何かを言おうとするが、加賀の一睨みで沈黙する。

「僕は明日の訓練があるからね。さすがにもう寝ないとまずいよ。」

彼方が時計を見てみると、すでに１２時を過ぎていた。

「そっか……じゃあ、また会おうねっ！」

「また会おう。」

「うん、また今度ね。」

瑞鶴は三人が挨拶を言ったのを見届けてから彼方を宿舎まで転移させた。

「……ごめんなさい。」

彼方は宿舎の前で別れの挨拶をしようとした時、瑞鶴が唐突に話しかけてきた。

「えっ、どうしたんだい？」

「……山城さんが寝ていたのを起こしてしまったから謝ろうと思って。」

瑞鶴は少し俯きながら言う。

彼方はそれを見て可愛いな、と思う。

「なんだ、そんなことか。別に気にしなくていいよ。いろいろな艦魂と仲良くなれたしね。」

彼方はそう言って瑞鶴の頭を撫でる。

瑞鶴は気持ちよさそうに、されるがままにしている。

「……うん、ありがとう。」

と、わずかに微笑んだ。

「あのさ……！？」

彼方はさらに瑞鶴に話しかけようとすると、後ろからものすごい力で肩を掴まれた。

「山城くんっ♪なぁにしてるのかなぁ～？」

「そっ、その声はっ……！！」
彼方は知っている女性の声に恐る恐る振り向いてみると、そこには横須賀にいるはずの晴香が立っていた。
「さぁて、モテモテの山城さんは何をしていたのかしらぁ～？」
晴香は肩に置いていた手の力をさらに加える。
「いやっ、僕はなにも……いだだだっ！！」
「へぇ～……こんな年端もいかない女の子と、こんな夜遅くにいることが何でも無いのかしらぁ？
あっ、でもあんたはロリコンだからいいのかなぁ？」
晴香は笑顔で問いかけるが、絶対零度の視線で彼方を睨んでいる。
彼方はその視線に怯えながらも、なんとか抵抗を試みる。
だが、晴香には全く歯が立たないばかりか、逆に腕の力を強められて彼方がギブアップ寸前だ。
「……やめて。山城さんが嫌がってる。」
彼方が限界に達しようとしたとき、瑞鶴が晴香の腕を取る。
「ん？そういえばあんた誰よ。」
晴香は彼方の肩を鷲掴みにしながら、瑞鶴にも強烈な殺気を放つ。
「……わたしは瑞鶴。」

「ずいかく？あんた、まさか芸者！？
今時の芸者にはコ〇プレとかが流行ってるの！？」
晴香は顔を真っ赤にしながら、途轍もない勘違いを披露する。
「違うってば！彼女は艦魂だよ。」
「あんたは黙ってなさい……！！」
晴香はさらに手に力を込める。
「いだだだっ！！」
「……山城さんが言ってることは本当。」
瑞鶴は真っ直ぐに晴香の目を見つめる。
「うそ……じゃあ、こいつはあの？」
「そうだよ。彼女は『瑞鶴』の艦魂だよ。」
晴香は彼方に言われてまじまじと瑞鶴を見つめる。
「ふ～ん、なるほどね……噂には聞いていたけど本当にいるとは思わなかったわ。」
ぷにぷに……むにゅっ
「……何やってるの？」

晴香は瑞鶴の頬をつついたりつまんだりしている。
瑞鶴は迷惑そうな顔だが、なすがままにされている。

「いや、彼女の頬がこんなにやわらかくてぷにぷにしてるのに、限られた人しか見ることも触ることもできないなんて不思議だな、と思ってね。
彼女の存在がまるで幻なんじゃないか、って感じちゃったのよ。」

（幻か。それは……）

「……ところで、山城。覚悟はできてるでしょうね？」

彼方が考え事をしていると、晴香が再び殺気を振りまいていた。

「あっ、あそこに牧野さんが！」

彼方は晴香の唯一の弱点である牧野大尉の名前を出す。
思わず晴香は直立不動で固まってしまう。

「えっ、うそっ！？……って、よくも騙したわね～！」

晴香が固まっていた隙に彼方は逃亡する。

「待て～っ、待ちなさ～い！」

「絶対嫌だ！殺されるっ！」

こうして二人の追いかけっこは明け方まで続いていた。
それは、二月ほど前の横須賀では毎日繰り広げられていた光景であり、久々の日課（？）に二人の顔はどことなく輝いているようであ

った。

瑞鶴はそれを見て、静かに笑みを浮かべていたのであった……

第十二章「運命の出会い、そして再開」（後書き）

??1「早く本編に出してくれないかな～」

??2「ほんま、うちら暇やな～」

??3「せっ、仙龍さん！暇とか言ってないではやくその手をどけてください！」

仙龍「え～、だって琵琶をいじってるの楽しいんやもん。」

琵琶「だっ、だからって、そんな……ひゃん！」

翔龍「はいはいお二人とも仲がおよろしいようで。それにしても何でわたしたちがここにいるの？」

仙龍「ああ、作者は更新頻度が遅すぎるから艦魂たちに処刑されてるんや。それで、三笠はんや宝鶴がいないんや。」

琵琶「そんなこと言いながらわたしの胸を揉まないで下さいっ！」

翔龍「はいはい、ご馳走様。まあ一月半放置してたから無理ないよね。
そういえば今日って陸軍記念日だっけ？」

仙龍「ウチは陸式には興味あらへんから知らへんわ。」

琵琶「って、右手に持ってる陸軍の制服は何ですか！」

仙龍「ん？ウチは何のことか分からへんわ。ほら、さっさと脱いでこれを着るんや！」

琵琶「やっ、や～め～て～！！」

翔龍「はぁ……結局こういうことになっちゃうんだね。キャストの選考ミスったんじゃないのかなぁ？」

仙龍「ふふふ……おとなしくぬぎぬぎするんやでぇ～」

琵琶「ひぃっ！誰か助けて～！」

翔龍「ご意見・感想まってます。はぁ……帰ってみ〇みけでも見よっかな。」

琵琶「ちょっと、翔龍さんっ待っ……んひぃ！」

仙龍「つかまえたっ♪さ～て、おとなしく着替えるんやでぇ～」

琵琶「キャーー！！」

第十三章「迫る刻」（前書き）

霜月です。
今回、本当に久々の更新で読者の皆様に本当に申し訳なく思っています。
言い訳ｅｔｃ．はあとがきにあると通りです。
今回、作品の投稿が大幅に遅れたので、次話を三日以内に投稿します。
さらに、できれば第十五章も今月中に上げられるように努力します。
中間試験とかいうのも現在進行形でありますが、そういうのは全てシカトしてでも次話は上げる所存です。
ですので、どうぞこれからも『カナタの幻想』をよろしくお願いします。

第十三章「迫る刻」

トラック環礁内にある夏島はトラックの行政の中心であり、そこには帝國人の入植者による市街地がある。
そこには「小松」や「南国寮」といった有名な料亭の支店があり、主に佐官以上の高級将校の宴会などに使われている。
その市街地から遠く外れた地下壕の前に一台の車が止まった。

「運転、ご苦労であった。」

後部座席に座っていた男は運転手である兵曹に礼を言って、車の外に出る。
もう１２月なのにギラギラと照りつける太陽に一瞬顔をしかめながら、男は地下壕の中に入っていく。

男は蛍光灯の明かりとコンクリートの壁以外には何も見えない通路を歩く。
男の周りにはには誰もおらず、ただ男の足音だけが狭い壕に反響する。
男がしばらく通路を歩くと、衛兵の詰め所が見えてきた。

「失礼ですが、身分証の提示をお願いします。」

男が詰め所の前に着くと、准尉の階級章を付けた衛兵が男に敬礼してきた。
男はすかさず衛兵に答礼をする。

「うむ、任務ご苦労。これでよいか？」

男はそう言ってポケットから身分証を取り出す。

「……どうぞ、ではお行き下さい」

男の身分証に不備がないことを確認した衛兵は、男に身分証を返して敬礼をする。

「うむ、ご苦労。」

男は衛兵に答礼をしながら通路のさらに先へと向かう。
途中、通路は何回かの分かれ道があるが、男はよどみない足取りで目的の場所へ向かう。
通路の行き止まりには一つだけドアがあり、男は躊躇なくドアを開ける。

「済まない、大分遅れたようだ。」

男がそう言って頭を下げると、部屋の中にいた者全員が彼に敬礼をする。

「いえ、長官。時間丁度です。」

参謀飾緒を付けた男の内の一人が腕時計を見ながら言う。

「そうか……だが、私が一番遅かったようだな。済まなかった。」

「……長官、それよりも一秒でも早く会議を始めましょう。我々には時間がありません。」

「そうだな……宇垣君、現在の米太平洋艦隊主力の動向は？」

山本はすぐに思考を切り替えて米軍の最新情報を尋ねる。
「はっ、依然つかめておりません。潜水艦の哨戒網にも、マーカス（南鳥島）やマリアナ、クェジェリン、そしてここの哨戒網にも掛かってないそうです。」
「そうか、では機動部隊・・・・・いや、『本当の』主力は？」
山本は米機動部隊をわざとそう言い直した。
この戦争の『本当の』主役は戦艦ではなく、浮かべる航空基地・・・・・つまり航空母艦であるということを言外に強調していた。
「二日前に『伊－４９』が発見して以来、未だに見つかっておりません。
ですが、敵艦隊がここかマリアナに来ることはほぼ疑いようがないでしょう。」
「そうだな・・・・・本当にそうなればいいが。」
山本は後半を小さくつぶやいたが、その呟きは誰にも聞こえなかった。
「長官、いくら米艦隊が捕捉できないとはいえ、一週間以内に来寇するのは必至でしょう。
すぐにでも決戦体制を発令すべきではないのですか？」
宇垣が山本に進言する。
「それもそうだな・・・・・だが、それは後でやっても遅くはない。

今は会議に集中すべきだろう。」

「わかりました。では、これより最後の作戦会議を説明を始めます。まずは……」

宇垣はそう前置きしてから今回の作戦を淡々と語る。
その場にいる参謀たちはそれを既に何度も聞いてはいたが、嫌な顔一つせずに真剣に聞いている。
そして、彼らは今から早くても二日後……遅くても一週間以内に起こるであろう歴史的な戦いに想いをはせ、改めて自分の役職の重さに気づいて思わず身震いするのであった。

「……というわけで、以上が作戦内容です。なにか質問は？」

『……』

その場にいる全員は全てを了解していると言わんばかりの目で宇垣の方を見つめている。
宇垣は幕僚たちの態度に大きく頷いて山本のほうを見る。

「よし、これにて最後の作戦会議は終わりだ。以降、各自の役職でより一層の奮励努力を期待する。」

山本のその一声とともに立ち上がると、全幕僚もそれに続き、敬礼をする。

「通信参謀、貴官は連合艦隊の全艦と防衛省に通達！
文面は《連合艦隊ハ之ヨリ決戦体制ニ移行ス》だ！」

「はっ！！」

「補給参謀、貴官は今一度艦艇の残存燃料の確認を急げ！
万が一でも燃料切れの艦を出してはならん！」

「了解っ！！」

「航海参謀、貴官は……」

山本は矢次ぎ早に参謀たち命令を下していく。
参謀たちは各々の書類を持ってある者は通信室へ、ある者は海図室へというように散っていく。

そして数分後、会議室に山本と宇垣の二人が残された。

「本当に……これでよいのですな、長官。」

「ああ、問題ない。既に采は投げられた。
……宇垣君、こんな言葉を知っているか？
『時計の針は元には戻らない。だが、自らの手で進めることはできる。』
この言葉のとおり、我々はこの先何があろうと進まなければならないのだ……
たとえ、どんな犠牲を払おうとな……」

山本がそう呟いたのを最後に、二人の間に沈黙が降りた。

連合艦隊の首脳が会議をしていたころ、夏島の南にある竹島の飛行場では『瑞鶴』戦闘機隊所属の陣風１６機が今まさに飛び立とうと

していた。
それだけなら普段の訓練飛行と何ら変わりがないが、今回の飛行はあることが違っていた。
それは……

『こちら菅野一番、全機準備よし。これより二航戦の新米共の訓練飛行を行う。どうぞ。』

無線機から菅野少佐のハリのある声が聞こえてくる。

『竹島第一管制塔了解、全機離陸せよ。どうぞ。』

『菅野一番了解。これより離陸を開始する！』

菅野は言葉を発するのと同時に離陸を開始する。
それに続いて離陸していくのは、普段彼の二番機を勤めている沢渡二等飛行兵曹ではなく、二ヶ月前に『蒼鳳』戦闘機隊に配属された狭霧一等飛行兵である。
１６機の内の半分がベテランの士官や准士官、下士官で構成されており、もう半分が新米搭乗員である。

彼方は今回の訓練で一個小隊……つまり陣風四機の指揮を任されている。
今回の分隊のペアは新人の崎山少尉だ。
彼は二ヶ月前に士官学校を卒業したばかりだが、その割に非常に腕がよくてこれからが期待できる新人である。
彼方の指揮下にある第二分隊のメンバーは、彼方の普段の列機である笹原二等飛行兵曹が長機を務め、二番機は新人の時田一等飛行兵曹である。

さて、そうこうしているうちに彼方が離陸する番がやってきた。
彼方は前に離陸した新人の危なげない挙動を見て、新人にしてはなかなかやるな、と思った。
彼らの飛行時間はまだ三百時間と少しといったところだが、その割には難なく離着陸をこなしている。
彼方は前の機が滑走を始めた後、自身も離陸すべく車輪のブレーキを解除した。

さて、全機が離陸し終わって編隊を組むと、いったん環礁の外縁部に沿って飛行を始めた。
そして、直径数十キロもある環礁を下に見ながら訓練空域である七曜諸島の上空に向かう。
新人は最初こそ普通に編隊を組んでいたのだが、時間が経つにつれて次第に編隊が乱れてくる。
つまり、規定の機間距離をしっかり保っているベテラン組に対し、新人たちはそれが上手くできていないので、非常に奇妙な編隊になっているのである。

『おい、新人共！！さっさと編隊を纏めないか！！』

そうなるとすかさず菅野の罵声が飛んで、新人たちは慌てて編隊を立て直す。
だが、しばらくするとまた編隊が乱れ始めてまた菅野の罵声が飛ぶ、ということを何度か繰り返すうちに、編隊は七曜島の上空に辿り着いた。
すると、菅野は右に旋回ながらバンクを振って編隊を纏め始めた。

『こちら菅野一番、これより訓練を開始する。
まずは編隊空戦の訓練だ！全機、俺に付いてこい！』

菅野機はバンクを振って大きく左に旋回する。
そして、後続の機も編隊を保ったまま旋回を始めたのであった……

第十三章「迫る刻」（後書き）

三笠「……」

宝鶴「……作者、何か言うことは？」

霜月「読者の皆さん、本当にすみませんでした。」

三笠「で、どうしてこんなことになったの？」

霜月「実は、ＧＷ直前にＰＣの小説のプロットがある方のハードディスクがぶっ飛んでしまい、三日前まで修理に出してました。」

三笠「で、あんたはどうして陸奥先生みたいに暫定版とかださなかったのよ？」

霜月「だってプロットがないから……ぐえっ！！」

三笠「あぁん？ちょっと面貸しなさい……なに、すぐ終わるわよ（ニヤリ）」

宝通「読者の皆様、こんなダメ作者で申し訳ないです。罰として作者は三日以内に次話をあげさせますので。」

霜月「ええっ！？それはむり……」

三笠「できるよね～？」

宝鶴「作者なら余裕よね～？」

霜月「無理じゃないですっ！！」

三笠「だそうなので、どうぞ楽しみになさって下さい。
こんな作者でも応援してくださるという寛大な方はぜひ感想欄に感想を書いて送ってくださいね☆」

第十四章「責任ー前編ー」（前書き）

ども、霜月龍牙です。
公約通り3日でｕｐしました！！
ですが、短時間に書くというのは僕には無理みたいで、実際にテスト勉強はこの3日間皆無です（爆）
というかそれだけの時間を費やしておきながら、一話しかｕｐできない自分の遅筆って・・・・・
その上、いろいろとちぐはぐな所があるので、近日中に修正予定です。
それでは、本編をお楽しみください。

第十四章「責任ー前編ー」

「ふぅ、今日も疲れたな。」

曹長の階級章を付けた３０代前半の男はそう呟いて大きく息を吐いた。

周りでは他の兵たちがまだ作業（といってもこの島の主食であるタロイモを植えるだけであったが）を続けている。

（そろそろ課業の時間も終わりだし、少し休憩するか）

彼は今まで持っていたシャベルを置いてヤシの木陰に座り込む。

周りの兵たちは一瞬だけ彼のことを見るが、すぐに視線を逸らす。

なぜなら、彼が周りにいる兵たちの中で一番階級が上だからだ。

そんな彼はふと上を見てみると、上空では２機の陣風が単機空戦の訓練をしていた。

彼は懐から『保万礼』と書かれた煙草を取り出すと、マッチに火を付けて吸い始めた。

（あの隊長機……いい腕してんな。）

彼はそのままぼーっと２機の空戦を見続ける。

やがて、彼が一本目の煙草を吸い終わったとき、列機のエンジンが唐突に煙を吹き出して止まってしまった。

（おっ！エンコしやがった……頼むから上手く不時着してくれよ）

彼は列機の異常をハラハラしながら見つめる。
だが、列機は彼の思いに反して、そのまま錐揉みになりながら地表に向かって墜落していく。
そして数秒後、軽い地響きとともに機体が地面に激突したいやな音が辺りに響き渡る。

結局、パイロットは脱出しなかった。

「おいっ、海軍の陣風が落ちたぞ！さっさとトラックを出して救助に向かえ！！」

陣風の墜落に呆然としている兵たちにそう怒鳴りつけ、彼自身もトラックに乗り込んだ。
彼は中に入る前ににちらっと上空を見ると、隊長機が墜落地点の周りを旋回している。

（もっとも・・・・・あの操縦士が生きているかどうかは分からないがな）

彼はその思考を首を勢いよく振ることで打ち消し、急いでトラックを墜落地点へと向かわせたのであった。

その日の夜、艦魂たちによる最後の作戦会議がZ部隊の旗艦である『伊予』で開かれた。
『伊予』の会議室には連合艦隊のほぼ全ての艦魂が集まっていたが、ほとんどの艦魂は会議の傍聴を許されただけで、会議に直接参加しているのは戦艦や空母といった主力艦や、水雷戦隊の旗艦といった重要な役職の艦魂ばかりである。
この場に潜水母艦の艦魂は見えないが、彼女らは既に決戦想定海域

に向けて出港した後なので会議には出ないことになっている。
彼女らはいつになく真剣な顔をしており、いつもはじゃれ合っている翔龍や仙龍もこの時ばかりはおとなしくしていた。

「それでは、最後の作戦会議を始めます。まずは作戦内容の確認から……」

伊予が淡々とした口調で作戦内容を説明していく。
それに口を挟んだり、質問する者は誰もいない。
幾度となく繰り返された会議で既に意見や質問は出尽くしており、後は決戦を待つだけであったからだ。

「……と言う予定です。何か意見や質問は？」

説明を一通り終わった伊予が周りを見渡すが、だれも手を挙げない。

「……無いようね。それでは会議を終わりにします。」

その言葉とともに、着席していた艦魂たちが一斉に立ち上がって伊予に敬礼をする。

「じゃあ、堅苦しい会議はこれで終わりにして今から宴会よ！
腰が抜けるほど飲んで騒いでこの世の未練をなくしましょう！！」

先ほどとは打って変わったような明るい声で伊予が宣言する。

『おーっ！！』

《酒保開け、各分隊酒を受け取れっ！！》

丁度その時、全艦に同様の放送が流されて出撃前最後の宴会が開かれた。
各艦で一斉に歓声があがる。
各部署で一番下の兵たちは主計課まで殺到し、主計兵は次々と兵たちの注文を処理していく。
酒を飲む者、歌を歌う者、菓子や料理を手当たり次第に食べる者。
彼らは思い思いの方法で初めての実戦前の……ある者にとっては今生で最後の宴会を楽しんでいた。

さて、艦魂たちも乗組員たちと同様に、思い思いに飲み歌い騒いでいた。
瑞鶴は相変わらず彼女専用のテーブルで大量の料理を腹に詰めていた。
彼方はいつもの通りに、トイレに向かったところを無理やり翔鶴と幻龍に拉致され、気がついたら椅子に座らせられていた。
周りをみると、他にも彼方と同様の境遇を辿ったらしい者の姿がちらほらと見える。

「はい、山城さん。あ～んしてください♪」

「……」

翔鶴が食べ物を取って彼方に渡そうとするが、彼方はぼーっとしたまま虚空を見つめている。

「山城さん？」

「……あっ、ごめん。何の話だっけ？」

翔鶴が覗き込むと、彼方ははっとしたように翔鶴を見る。

「むぅ～っ、人の話はちゃんと聞いてください。」
翔鶴は頬を膨らませて彼方を睨みつける。
「ははは……ごめんごめん。」
彼方は適当に笑ってそれを誤魔化した。
「そっ、それなら……ばっ、罰としてこれを食べてください！」
翔鶴は顔を真っ赤にしながら、稲荷寿司を彼方に差し出す。
「うん、いいけど……」
「やったぁ！……じゃなかった。はい、あ～ん」
ぱくっ
「山城さん、おいしいですか？」
「……うん、おいしいよ。」
翔鶴は笑顔で尋ねるが、彼方はどこか精彩に欠けた返答をする。
「山城さん、さっきから変だよ。ずっとぼーっとしちゃってるし。」
幻龍も心配そうに彼方の顔を覗き込む。
「いや、なんでもないよ。ちょっと疲れてるのかな。」

ははは、と彼方は再び適当な笑みで誤魔化した。

「……そうですか、確かに訓練は激しかったからしょうがないですよね。」

翔鶴は納得したように頷いたが、どこか不満げだ。

「おや、君たちのところは結構盛り上がっているね。」

三人がその声に振り向くと、そこには３０代くらいの少佐が立っていた。

「あっ、敬礼はいいよ。今日は無礼講だからね。」

彼方が敬礼しようとすると、少佐はそれを手で制する。

「すみません、つい癖で……」

「まあ気にしないで。そうそう、自己紹介をしていなかったね。
僕は和泉（いずみ）　真嗣（しんじ）っていうんだ。
見れば分かると思うけど、階級は少佐で『敷波』の副長をやっているんだよ。よろしくね。」

和泉はそう言って右手を差し出してきた。

「僕は『瑞鶴』戦闘機隊の山城　彼方中尉です。
それで、こちらが翔鶴と幻龍です。」

彼方はその手を握って、翔鶴と幻龍を紹介する。

「よろしくお願いします、少佐。」

「和泉さん、よろしく。」

二人はそれぞれ挨拶をしてから和泉と握手をした。

「うん、よろしく。そうか、『瑞鶴』に乗ってるのか……噂によると瑞鶴ってすごく無口らしいけど、本当なのかい？」

「まぁ……そうですね。今はあちらにいますよ。」

彼方が指差した方向では、瑞鶴がテーブルの上の料理と格闘を続けていた。

「なるほど……それにしてもよくあれだけ食べられるね。」

和泉は顎に手を当てて感心したように頷いている。

「普段はあれの三倍くらい食べてますよ。」

「……艦魂ってすごいなぁ。」

「いや、彼女だけですから。」

「おお、和泉。久しぶりだな。」

和泉が妙に感心していると、彼の後ろから見知った声が聞こえた。

「加賀じゃないか！ずいぶんと久しぶりだなぁ。」

和泉は久しぶりの友との再会に笑みを浮かべた。
「加賀さんって和泉大尉と知り合いなの？」
「ああ、和泉がまだ大尉だった頃にうちの第二高角砲群で副長をしていたんだ。」
幻龍がそう尋ねると、加賀は誇らしげに語った。
「ん……？ということは、和泉さんって砲術科出身なんだ。」
「うん、対空戦術が専門だけどね。」
「ちなみに和泉は砲術学校高等科では主席だったんだ。」
「「「主席（ですか）！？」」」
三人が驚くのも無理はない。
砲術学校高等科とは、砲術専攻を目指す大尉から少佐級の中堅士官が志願または推薦で入る所で、砲術についての専門的で複雑な知識を学ぶ所である。
もちろん、そこに集まるの者は実力派揃いで、主席になるのは余程の努力をしないとなれないのだ。
「まあ一応、ね。でも士官学校では下から数えた方が早かったよ。」
「えっ、そうなんですか？」
「砲術学校時代に和泉が課題で出した艦隊弾幕射撃理論が高く評価

されたんだ。」

「かんたいだんまく……なにそれ？」

幻龍は難解な単語に頭を抱える。

「ほら、この前伊予から説明してもらったでしょ？」

「あのときかぁ……全部寝てた気がする。」

翔鶴がそう指摘すると、幻龍はてへっ、と笑って頭を掻いた。

「なんだ、お前はあの時寝てたのか……

それなら丁度この場に発案者がいるから、もう一度聞いた方がいい。

和泉、説明してくれるか？」

「もちろん。そうだね……じゃあまずは弾幕射撃について説明しようか。

弾幕射撃っていうのは……」

和泉の説明はまだ続くが、非常に長いのでここで簡潔に弾幕射撃について説明しておこう。

普通の対空射撃は対空砲が個別に敵機を射撃するので、複数の対空砲で同一の敵機を射撃することになったり、その逆になったりすることがあり、非効率的だった。

そこで和泉が考えたのが弾幕射撃である。

これは各対空砲ごとに受け持ちの空域が決まっており、そこに敵機がいる間はずっとそこに向かって射撃し続けるという射撃法である。

その方が効率的に敵機を対空弾幕に当てることができ、撃墜率も上がるのだ。

さらに、敵機の撃墜率が上がるだけでなく、弾幕を張ることによって敵機の照準を妨害できるという利点もある。
彼の提唱した艦隊弾幕射撃はこれを艦隊単位に拡大したものである。

「なるほど・・・・・そうすれば効率的に敵機を迎撃できますね。」

彼方はこの時爆撃機の搭乗員じゃなくて良かったと思った。
それほど弾幕射撃の効果はすごく、彼方もその効果は納得できた。

「うん、大体分かったような気がする。」

幻龍も納得したような顔をして頷いている。

「まあ、口で言っただけじゃ分かりづらいけど、実際に戦ってみれば効果が分かるよ。
ただ、これにはもちろん欠点があって、各艦の砲術長が事前に集まって対空砲の射撃範囲を決めなくちゃいけないし、敵機がいる間はずっと弾幕を張らなきゃいけない訳だから弾薬の消費が激しいんだ。
ほら、たしか5月あたりに二人ともドックに入っていたでしょ？」

「ええ、確かにそうですけど・・・・・あれって消火設備の拡張じゃないんですか？」

「それもあるんだけど、その時に弾薬庫の拡張も行っていたんだ。
さっきも言ったとおり、弾幕射撃は弾薬を浪費するからね。」

「へぇ～、なるほど。和泉さんって凄いんですね。
でも、それならどうして駆逐艦の副長をなさっているんですか？
和泉さんなら巡洋艦の砲術長でもおかしくないのに・・・・・」

「それはね、色々理由があって……」

「バカシンジー！ちょっとこっち来て！」

彼方はその大声に驚いて振り向いてみると、栗毛の少女が大きく手を振って和泉を呼んでいた。

「いっ、今のは……？」

「ごめん、敷波が呼んでるから行かなきゃ。」

「バカシンジ！早く来なさいよ！」

「敷波、ちょっと待ってて！それじゃあ、また後で。」

和泉は慌てて言うと少女の所へ走っていった。

「うわ～、わたし凄い人に会っちゃった。」

翔鶴は和泉の後姿を見送りながら感慨深そうに呟いた。

「そうだね……でも、どうして駆逐艦の副長をやってるのかな？」

「あっ、実は彼女とデキてたりして……」

「「キャーッ！！」」

彼方は二人の会話が段々危ない方にエスカレートしていくのを、ただただ黙って見ていた。

「山城、どうかしたのか？」

「……いや、なんでもないよ。」

加賀が彼方の顔を覗き込むと、彼方は力なく首を振った。

「……山城、今から少し付き合ってもよいか？」

第十四章「責任ー前編ー」（後書き）

霜月「おっしゃー！！公約守ったぜ！！」

三笠「お疲れ様。いつもこれくらい早いといいんだけどね。」

宝鶴「そういえば明日は生物、日本史、現代文のテストだよね？」

霜月「暗記科目だ……しかも勉強時間皆無だよ……ｏｒｚ」

三笠「まっ、次があるよ。」

宝鶴「そうよ。明日があるわ！」

三笠「ちなみに途中経過は？」

霜月「英語２と英語ライティングは死亡フラグで、漢文と古文は七、八割堅いくらいかな。」

宝鶴「ずいぶんと差があるのね……」

霜月「漢文と古文、日本史、生物は大好きだけど、英語はマジで無理だし、数学も死亡フラグが立ってる。
現代文と政経は微妙かな。」

三笠「そういえば作者って数学が苦手だから文系にしたんだよね。」

霜月「うん、物理とか化学もダメだね。一回も平均を上回ったことがないよ。」

宝鶴「まあ、作者のテストのことは置いといて、次はいつ投稿するの？」

霜月「みて……じゃなくて、多分来月上旬かな。」

三笠「結局元の木阿弥ね。」

霜月（今、ゲームにハマってるなんて口が裂けても言えないなぁ……）

宝鶴「ほぅ……それって何のゲーム？」

霜月「太平洋戦記２ってやつなんだけど、あれって難易度がハンパな……しまった。」

三笠「作者……ちょっとこっち来ようか？」

霜月「違うっ、断じて違うっ！！あれは太平洋戦争の勉強のために……」

宝鶴「ほぅ……言い訳はそれだけ？」

霜月「そうだ！僕はテスト勉強を！！」

三笠「それ無理♪」

宝鶴「あなたは朝〇さんですか……」

三笠「というわけで、次回は……いつになるのかなぁ？」

宝鶴「ご意見、感想お待ちしています。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3733f/

カナタの幻想

2010年10月9日04時19分発行